高松市埋蔵文化財調査報告　第124集

国道11号高松東道路関連整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

太田下・須川遺跡

2009年3月

高松市教育委員会

例　　言

1．本書は，国道11号高松東道路関連整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり，太田下・須川遺跡の報告を収録した。

2．発掘調査地及び調査期間，調査面積は，次のとおりである。
調 査 地　　高松市太田下町　地内
調査期間　　平成20年5月1日～6月17日
調査面積　　1,080㎡

3．現地調査は，高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員小川賢ならびに高上拓があたり，非常勤嘱託中西克也と中村茂央がこれを補佐した。

4．整理作業は小川，高上があたった。

5．本報告書の執筆・編集は主に高上が行い，小川の補助を得た。

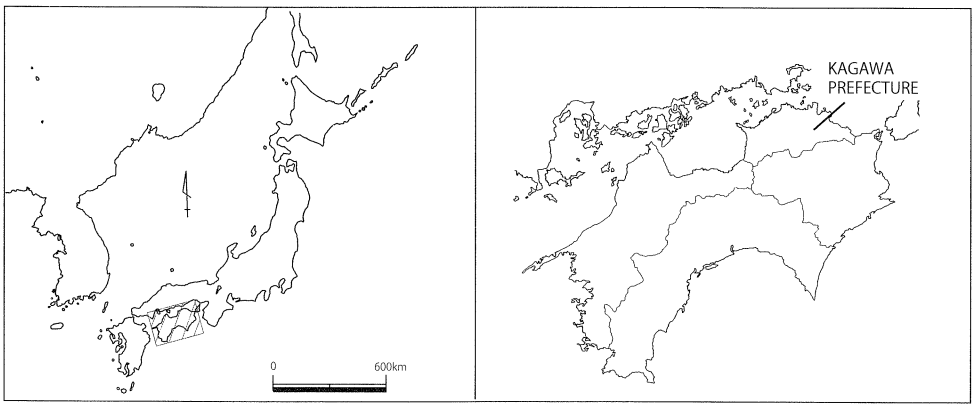
6．発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々からご教示及びご協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
香川県教育委員会，魚島純一（徳島県立博物館），大久保徹也（徳島文理大学），北山健一郎・信里芳紀・森下英治（香川県教育委員会），山中稔（香川大学）

7．標高は東京湾平均海面高度を基準とし，図中方位は座標北を指す。また，座標の数値は世界測地系第Ⅳ系にしたがった。

8．出土遺物の実測図は，土器やその他土製品等は1／4，石器1／2，遺構の縮尺については図面ごとに示している。土器実測図中で，土師質土器は断面白抜き，須恵質土器は断面黒塗りで表す。また，石器実測図中で現代の折損は濃く黒で塗り潰している。

9．出土土器に付着した赤色顔料の蛍光X線分析を徳島県立博物館　魚島純一氏に，噴礫検出地点の土壌分析を香川大学工学部准教授　山中稔氏に依頼した。また，プラントオパール分析および井戸埋土中の微細物分析を株式会社パリノ・サーヴェイに，遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。

10．発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。



目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 …… 1
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
　第１節．地理的環境 …… 3
　第２節．歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の成果
　第１節．調査の方法 …… 8
　第２節．調査の概要と基本層序 …… 8
　第３節．Ａ調査区 …… 13
　第４節．Ｂ調査区 …… 35
　第５節．Ｃ調査区 …… 38
第Ⅳ章　自然科学分析
　第１節．高松市太田下・須川遺跡出土土器に付着した赤色顔料の蛍光Ｘ線分析 …… 48
　第２節．太田下・須川遺跡における植物珪酸体（プラントオパール）分析及び微細物分析… 50
　第３節．調査地点の液状化について …… 61
第Ⅴ章　まとめ
　第１節．遺構の変遷について …… 63
　第２節．Ａ調査区井戸 SE ２について …… 68

挿　図　目　次

Fig. 1　高松市地形図…… 4
Fig. 2　周辺遺跡分布図…… 6
Fig. 3　調査区配置図…… 9
Fig. 4　遺構配置図…… 11
Fig. 5　調査区の基本層序…… 12
Fig. 6　Ａ調査区 SK10 平・断面図…… 13
Fig. 7　Ａ調査区 SK11・12 平・断面図…… 13
Fig. 8　Ａ調査区平面図…… 14
Fig. 9　Ａ調査区 SK13 平・断面図…… 15
Fig.10　Ａ調査区 SD １平・断面図…… 15
Fig.11　Ａ調査区 SD ３平・断面図…… 15
Fig.12　Ａ調査区 SE １平・断面図…… 16
Fig.13　Ａ調査区 SE ２平・断面図および遺物出土状況図…… 17
Fig.14　SE ２第２層上位出土遺物① …… 19
Fig.15　SE ２第２層上位出土遺物② …… 20
Fig.16　SE ２第２層中位出土遺物① …… 22
Fig.17　SE ２第２層中位出土遺物② …… 23
Fig.18　SE ２第２層中位出土遺物③ …… 24
Fig.19　SE ２第２層中位出土遺物④ …… 25
Fig.20　SE ２第２層中位出土遺物⑤ …… 27
Fig.21　SE ２第２層中位出土遺物⑥ …… 28
Fig.22　SE ２第２層中位出土遺物⑦ …… 29
Fig.23　SE ２第２層下位出土遺物 …… 30
Fig.24　SE ２検出面間接合遺物 …… 32
Fig.25　SE ２出土層位不明遺物 …… 33
Fig.26　Ａ調査区噴礫および SK14・SD ４平・断面図…… 34
Fig.27　Ｂ調査区平面図…… 35
Fig.28　Ｂ調査区 SD ４平・断面図および遺物出土位置図…… 36
Fig.29　Ｂ調査区 SD ４出土遺物 …… 37
Fig.30　Ｂ調査区 SR １平・断面図 …… 37
Fig.31　Ｃ調査区平面図 …… 39
Fig.32　Ｃ調査区 SK3・SD6・SP1 平・断面図… 40
Fig.33　Ｃ調査区 SK1・SD2 ～４平・断面図 … 40
Fig.34　Ｃ調査区 SD7 および足跡平・断面図…41
Fig.35　SD7 出土遺物…… 41
Fig.36　SD6 出土遺物…… 42
Fig.37　Ｃ調査区 SR １Ａ・１Ｂ平・断面図 … 43
Fig.38　SR １上層出土遺物 …… 44
Fig.39　SR １下層出土遺物① …… 45
Fig.40　SR １下層出土遺物② …… 46
Fig.41　SR1 出土層位不明遺物…… 46
Fig.42　蛍光Ｘ線分析の一例（遺物番号 31）… 49
Fig.43　蛍光Ｘ線分析の一例（遺物番号 243）… 49
Fig.44　蛍光Ｘ線分析の一例（遺物番号 139）… 49
Fig.45　調査地点の堆積層の累重状況…… 50
Fig.46　植物珪酸体含量の層位分布…… 52
Fig.47　粒度分布（噴礫と粘性土層）…… 61
Fig.48　地質断面線（A-A’ 断面）…… 62
Fig.49　地質断面図と液状化危険度 PL 値…… 62
Fig.50　大溝出土遺物…… 63
Fig.51　太田下・須川遺跡遺構配置図（弥生時代後期）…… 65
Fig.52　太田下・須川遺跡遺構配置図（古墳時代中期～後期）…… 67
Fig.53　赤色顔料付着資料① …… 70
Fig.54　赤色顔料付着資料② …… 71
Fig.55　取手付広方口皿推定復元図 …… 73
Fig.56　Ａ調査区 SE2 出土土器器種組成 …… 74

挿　表　目　次

Tab.1　太田下・須川遺跡における
既往の調査…… 1
Tab.2　整理作業工程表…… 2
Tab.3　基準点座標一覧表…… 8
Tab.4　植物珪酸体含量……51
Tab.5　微細物分析結果……56
Tab.6　粒度分布
（粒径区分における質量比）……61
Tab.7　PL 値による液状化危険度ランク ……62
Tab.8　香川県内弥生時代井戸集成表……75
Tab.9　出土遺物観察表……80

図　版　目　次

PL. 1　A調査区 SE ２出土土器集合
PL. 2　1．A 調査区 SE ２土器出土状況
（第２検出面）
2．A 調査区 SE ２土器出土状況
（第３検出面）
PL. 3　A調査区 SE ２器台・壺出土状況
（第４検出面）
PL. 4　1．A 調査区 SE ２出土水銀朱付着
把手付広片口皿
2．A 調査区 SE ２出土水銀朱付着鉢
PL. 5　1．A 調査区 SE ２出土赤色顔料付着土器
2．A 調査区 SE ２出土赤色顔料付着底部
PL. 6　1．A 調査区調査前状況（北から）
2．A 調査区北部遺構検出状況（南から）
3．A 調査区中央部
遺構検出状況（南から）
PL. 7　1．A 調査区 SE ２遺物出土状況①
2．A 調査区 SE ２遺物出土状況②
3．A 調査区 SE ２遺物出土状況③
PL. 8　1．A 調査区 SE ２遺物出土状況④
2．A 調査区 SE ２遺物出土状況⑤
3．A 調査区 SE ２断面（西から）
PL. 9　1．A 調査区中央遺構（南から）
2．A 調査区噴礫・SR １検出状況
（南から）
3．A 調査区噴礫断面
PL.10　1．A 調査区 SD １（西から）
2．A 調査区 SD ３（北から）
3．A 調査区 SD ３（東から）
4．A 調査区 SD ３断面
5．A 調査区 SE １（西から）
6．A 調査区 SE １断面
7．A 調査区 SK ５・６（東から）
8．A 調査区 SK ９断面
PL.11　1．A 調査区南部遺構（南から）
2．A 調査区南部下層確認状況（南から）
3．A 調査区 SK10・11（南から）
4．A 調査区 SK11 断面
5．A 調査区 SK10（西から）
6．A 調査区 SK10 断面
7．A 調査区中央東壁土層（北から）
8．A 調査区南端部東壁土層（南から）
PL.12　1．B 調査区調査前状況（南から）
2．B 調査区北部遺構（北から）
3．B 調査区 SD ４（北から）
PL.13　1．B 調査区 SD ４遺物出土状況①
2．B 調査区 SD ４遺物出土状況②
3．B 調査区 SD ４遺物出土状況③
4．B 調査区 SD ４遺物出土状況④
5．B 調査区 SD ４遺物出土状況⑤
6．B 調査区 SD ４遺物出土状況⑥
7．B 調査区 SD ４遺物出土状況⑦
8．B 調査区 SD ４遺物出土状況⑧
PL.14　1．B 調査区 SD ４断面
2．B 調査区南部東壁土層①
3．B 調査区南部東壁土層②
4．B 調査区南部遺構（北から）
PL.15　1．C 調査区北部遺構検出状況（南から）
2．C 調査区北部断割調査状況（南から）
3．C 調査区中央遺構検出状況（南から）
4．C 調査区中央遺構（南から）
5．C 調査区下層確認状況（南から）
6．C 調査区 SD ２断面
7．C 調査区 SD １断面
8．C 調査区中央東壁土層
PL.16　1．C 調査区 SD ６検出状況（西から）
2．C 調査区 SD ６・SK ３（西から）
3．C 調査区 SD ７・足跡検出状況
（南西から）
4．C 調査区 SD ７・足跡（南西から）
5．C 調査区 SD ７・足跡（北東から）
6．C 調査区 SD ７・足跡断面
7．C 調査区 SR １（北から）
8．C 調査区 SR １（東壁）断面
PL.17　A 調査区 SE ２出土土器①
PL.18　A 調査区 SE ２出土土器②
PL.19　A 調査区 SE ２出土土器③
PL.20　A 調査区 SE ２出土土器④
PL.21　A 調査区 SE ２出土土器⑤・石器
PL.22　B 調査区 SD4・C 調査区 SR １出土土器

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　　調査の経緯

本調査地は高松琴平電気鉄道琴平線高架に伴う側道(市道太田下町21号線)建設予定地である。国道11号高松東道路関連整備事業が高松市都市整備部都市計画課により計画されていた。当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地である太田下・須川遺跡が確認されていたため，平成19年９月13日付けで文化財保護法第94条第１項に基づく発掘通知が都市計画課より提出され，本市教育委員会から県教育委員会へ進達したところ，同月25日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて都市計画課と協議を行い，道路建設前に発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意したため，本市教育委員会は平成20年５月１日から同年６月17日にかけて，発掘調査を実施した。本書はこの調査成果を報告するものである。

第２節　　太田下・須川遺跡における既往の調査

昭和53年に一般国道11号「高松東道路」の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が香川県教育委員会によって実施された。その結果，高松市太田下町・三条町・伏石町地内で弥生時代中期～後期，古墳時代中期を中心として近世までの遺構と遺物が確認された。その後も香川県教育委員会が主体となり，高松琴平電気鉄道琴平線の連続立体交差事業などに伴う試掘調査ならびに工事立会が数次にわたって行われた。各調査の概要はTab.1・Fig. 51を参照されたい。

Tab. 1　太田下・須川遺跡における既往の調査

調査主体	調査場所	調査期間	調査原因	調査面積	内容	報告書
香川県教委	太田下町・三条町・伏石町	昭和63年6月20日～平成2年4月28日	高松東道路建設	約25000㎡	発掘	1
香川県教委	太田下町・三条町	平成12年８月７日～９日	琴電琴平線高架工事	約140㎡	試掘	2
香川県教委	太田下町	平成15年７月11日～25日	琴電琴平線高架工事	約18㎡	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成16年６月３日	琴電琴平線高架工事	約22㎡	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成16年８月９日	琴電琴平線高架工事	約150㎡	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成16年10月１日	琴電高架橋架設工事	約45㎡	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成17年５月26日～11月15日	琴電琴平線連続立体交差事業	約600㎡	立会	3
高松市教委	太田下町	平成20年５月１日～６月17日	国道11号高松東道路関連整備事業	約1080㎡	発掘	**本書**

〈報告書〉

１：北山健一郎・森下友子編 1995『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
２：古野徳久 2002「コトデン高架建設」『埋蔵文化財試掘調査報告』ＸＶ　香川県内遺跡発掘調査　香川県教育委員会
３：信里芳紀 2006「太田下・須川遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成17年度　香川県教育委員会

第３節　　調査日誌

調査は平成20年５月１日より開始した。調査予定地が極めて幅狭かつ長大なため，調査区を大きく３分割し，北側から順に調査・埋め戻しを行い順次南に移動するという工程を採用した。北から順にＡ調査区・Ｂ調査区・Ｃ調査区と呼称する（Fig.3）。調査日程は以下のとおりである。

５月 １ 日	現地にて基準杭の打設および調査区の設定。
５月 ７ 日	Ａ調査区調査開始。
５月16日	Ｂ調査区調査開始。
５月27日	Ａ調査区調査完了。
６月 ２ 日	Ｂ調査区調査完了。Ｃ調査区調査開始。
６月17日	Ｃ調査区調査完了。
７月 １ 日	資料整理作業開始。

第４節　　整理作業の体制と日程

整理作業は平成20年７月１日より開始し，平成21年３月に終了した。工程の詳細は以下のとおりである。

Tab. 2　　整理作業工程表

	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄											
接合・復元											
遺物実測											
遺構図レイアウト											
遺構図トレース											
遺物レイアウト											
遺物トレース											
観察表作成											
遺物写真撮影											
写真レイアウト											
自然科学的分析（委託）											
原稿執筆											
編集											

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　　地理的環境

高松市は香川県の県都であり，面積約 375 ｋ㎡の市域に約 42 万人もの人々が暮らす，四国地方有数の都市である。平成の大合併により近隣の庵治町・牟礼町・塩江町・香川町・香南町・国分寺町と合併したことで，阿讃山脈から瀬戸内海にまで及ぶ広大な市域を有することとなった。これにより北は備讃瀬戸で岡山県と，南は阿讃山脈で徳島県とそれぞれ境を接している。

太田下・須川遺跡が立地する高松平野は南側を阿讃山脈（讃岐山脈）に，西側を五色台山塊に，東側を立石山塊に囲まれた東西約 12km, 南北約 10km の範囲に広がる扇状地性の堆積平野である。和泉層群からなる阿讃山脈は最高所で標高約 1000 ｍを測り，海岸へ向けて階段状に標高が下がる。山脈北の前山部分では領家花崗岩から構成される丘陵性の山地となり，沿岸部付近では標高 100 ～ 200 ｍ程度になる。また，阿讃山脈と平野部の間には三豊層群および焼山峠礫群が低い丘陵を形成し，瀬戸内海の海底まで広がる。平野部は沖積低地および低位段丘から構成されており，領家花崗岩を基層として，三豊層群，沖積層が順に堆積する。この沖積層は完新世以降，平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川などの河川が流れるが，中でも香東川の堆積作用が最も強く，春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また，これらの河川はいずれも近世に大規模な改変を受けている。香東川は現在では石清尾山山塊の西側を流れているが，これは寛永年間（1624 ～ 1643）の付け替え工事によるもので，古絵図などには本来山塊の東側を流れていた事が記されている。

高松平野には，屋島や五色台など台形ないし円錐形を呈する標高 20 ～ 300 ｍほどの小山塊が多数点在する。これは高松平野をはじめとする讃岐平野の特徴的な地形として名高い。これらの山塊は侵食作用を受けやすい花崗岩が風化侵食に対する抵抗の強い讃岐岩ないし讃岐岩類に覆われ，侵食から取り残されることによって形成されたもので，台地状のものはメサ，円錐状の孤立丘はビュートと呼ばれる。海浜部を見ると，花崗岩の風化殻であるマサがみられ，瀬戸内海の白く美しい砂浜を形成する。また，高松平野の景観を特徴付けるものに，平野中に多数点在する溜池がある。出水とよばれる湧水群とともに高松平野に特徴的な灌漑施設である。高松平野はいわゆる瀬戸内式気候と呼ばれる温暖少雨な気候環境にあり，年間平均降水量は平均で 1000mm 程度と日本列島中で最も寡雨な地域である。少ない降雨を効果的に活用するため，地形を利用した溜池や出水が多数築かれ，複雑な水利慣行とともに高松の農業を支えてきた。

太田下・須川遺跡は高松平野の中心部やや北東よりの扇状地上に立地する。現在は国道 11 号線高松東バイパスと高松琴平電気鉄道琴平線が交差する地点が中心である。行政区分としては高松市太田下町，三条町，伏石町に属する。本調査の対象地域は，太田下町地内にあたる。

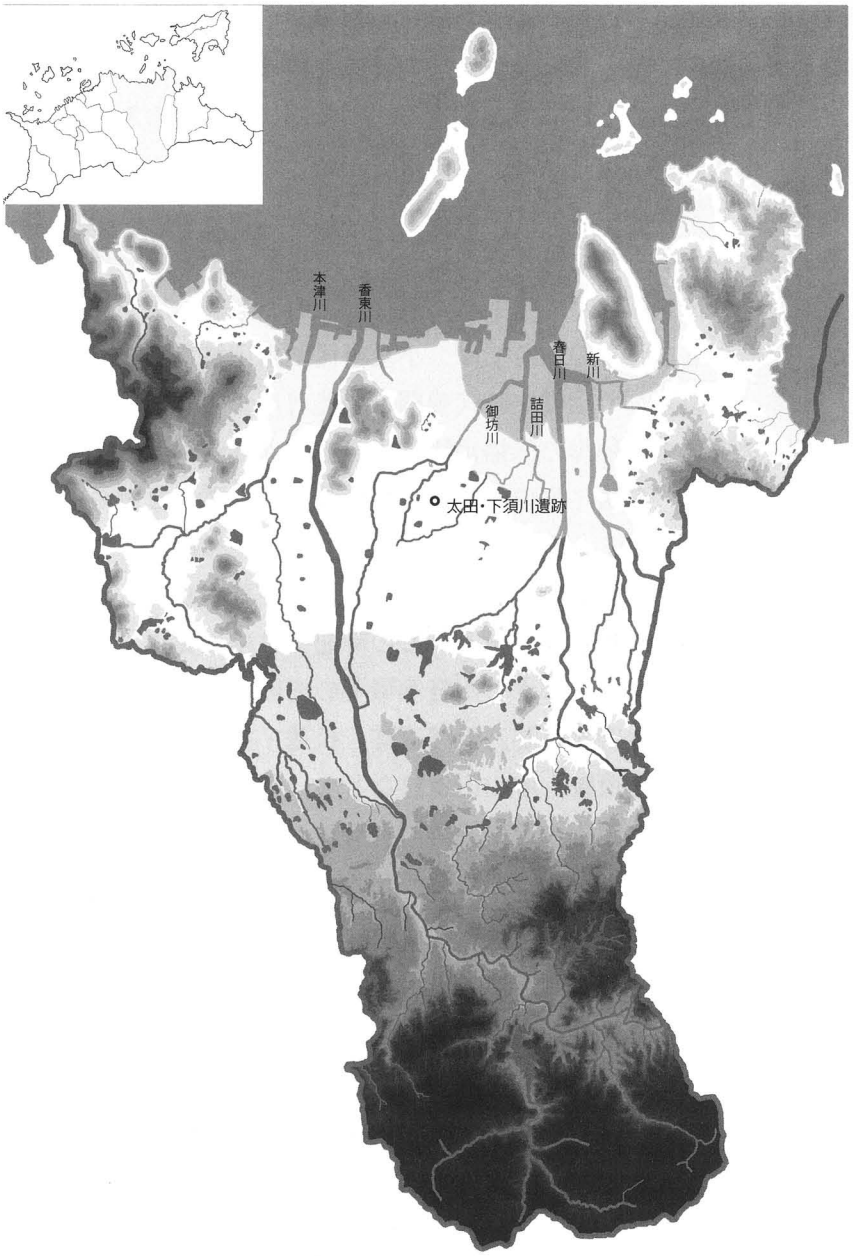


Fig. 1　高松市地形図

第２節　　歴史的環境

旧石器時代～縄文時代　高松平野における旧石器時代の生活の痕跡は，久米池南遺跡，諏訪神社遺跡，雨山南遺跡，中間東井坪遺跡，香西南西打遺跡，西打遺跡などで確認されている。いずれもサヌカイト製のナイフ形石器や翼状剥片などの散布が確認されている。また，中森遺跡，中間西井坪遺跡では石器の集中するブロックが検出されている。旧石器時代後期にあたるウルム氷期には，備讃瀬戸が完全に陸化しており，多くの湖沼が存在し大小の河川が流れる盆地であったことが指摘される（長谷川・斉藤 1989）。平野の大部分の堆積はこれ以後であるため，現在この時期の遺跡が検出されるのは平野縁辺部の丘陵上に集中する。

縄文時代の明瞭な遺構や遺物は極めて少ない。大池遺跡で草創期の有舌尖頭器などが認められるほかは，小山・南谷遺跡で落とし穴遺構，奥の坊奥池西遺跡，前田東・中村遺跡，本郷遺跡で後期の土坑などがわずかに認められるのみである。平野部での遺跡の増加が顕著に認められるのは晩期以降である。居石遺跡，松林遺跡，川岡遺跡，谷・長池遺跡，上天神遺跡，前田東・中村遺跡，林・坊城遺跡などで晩期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代　縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて，平野部での集落の形成が顕著に認められる。谷・長池遺跡，谷・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，上西原遺跡，東中筋遺跡，宗高坊城遺跡など，縄文晩期から継続するこれらの遺跡では，小規模区画水田跡など農耕に関する遺構が検出されている。また，林・坊城遺跡では縄文時代晩期の自然河川から多数の木製農耕具が検出されており注目される。高松平野でも稲作の伝播に伴う平野部の土地利用が盛んになったことがうかがわれる。また鬼無藤井遺跡，天満・宮西遺跡，汲仏遺跡では１重～２重の環濠が巡る環濠集落が形成されたことが確認されている。この後，前期末～中期前半に継続する集落は少ない。谷・長池遺跡，奥の坊遺跡で前期から中期前葉まで連続した居住が認められるのを除けば，新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。この時期には段丘化によって平野部の堆積が一気に進行することが指摘されており，こうした自然環境の変動も一因であったと考えられる。奥の坊権現前遺跡，上天神遺跡，大空北遺跡，松林遺跡，松並・中所遺跡などで居住の痕跡が認められる一方，丘陵上には久米池南遺跡，中山田遺跡などのいわゆる高地性集落が形成される。中期後半～後期前半にかけては，太田下・須川遺跡，上天神遺跡など平野中央部と，前田東・中村遺跡，大空遺跡，小山南谷遺跡，奥の坊権現前遺跡，久米山遺跡群など平野東部で集落跡が多く確認される。後期後半には，凹原遺跡，空港跡地遺跡，川岡遺跡，日暮・松林遺跡，一角遺跡，天満・宮西遺跡，宗高坊城遺跡などで再度集落が形成され，一部はその後終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ，長期間継続する集落が少ないという特徴が指摘されている。

古墳時代　集落域に関する資料は多くないが，前述のように古墳時代前期前半までは弥生時代終末期から継続する遺跡が認められる。また，本遺跡では中期の遺構・遺物が検出されており注目できる。他には空港跡地遺跡，六条・上所遺跡，谷・松ノ木遺跡などで集落跡が確認される。集落域の状況が明らかでない一方，平野縁辺部の丘陵上には数多くの古墳が築造される。前期から中期までの累代的な墓域が形成される石清尾山古墳群や，鍬形石をもつ高松市茶臼山古墳，阿蘇凝灰岩製の石棺が認められる長崎鼻古墳などが前期の有力な古墳として知られるほか，前期末～中期初頭には高松平野最大の古墳である三谷石舟古墳が築造される。前期古墳の盛行とは対照的に，中期古墳の例は極めて少ない。そのような状況の中で注目されるのは，平野西部に位置し，多くの埴輪や空心磚陶棺が出土した前方後円墳である今岡古墳である。中間西井坪遺跡ではほぼ同時期と考えられる埴輪焼成遺構や土製棺が認められ，今岡古墳との関連が注目される。ほかには女木島に楕円墳である女木丸山古墳などが知られる。後期から終末期にかけては，銅鋺が出土し，石室に石棚を持つ久本古墳，畿内型横穴式石室の可能性が指摘される横岡山古墳が有力な古墳として知られるほか、丘陵上には数多くの群集墳が築造され，浄願寺山古墳群，南山浦古墳群，

Fig. 2　周辺遺跡分布図

1．太田下・須川遺跡　2．高松城　3．浜ノ町遺跡　4．扇町一丁目遺跡 5．二番町小学校遺跡　6．高松城跡　7．紺屋町遺跡　8．石清尾山古墳群　9．北山浦遺跡　10．西ハゼ土居遺跡　11．松並・中所遺跡　12．東中筋遺跡　13．天満・宮西遺跡　14．佐藤城跡　15．キモンドー遺跡　16．松縄下所遺跡　17．境目・下西原遺跡　18．上西原遺跡　19．大池遺跡　20．弘福寺領田図比定地北地区　21．上天神遺跡　22．蛙股遺跡　23．居石遺跡　24．井手東Ⅱ遺跡　25．井手東Ⅰ遺跡　26．谷・長池Ⅱ遺跡　27．谷・長池遺跡　28．谷・松ノ木遺跡

城所山古墳群，奥の坊古墳群などが調査されている。高松平野では古墳時代を通して多くの古墳が造営されるが，一方でその造営主体となった集団の集落についての調査例は少なく，明らかでない部分が多い。今後の平野部での調査が期待される。

古代　古代の高松平野は大きく西部の香川郡，東部の山田郡に分割され，平野部のほぼ全面に条里地割が分布する。古代官道である南海道を基準に設定されたとされる当地域の条里地割は，南北線が東に約９～11°傾くことが知られる。この条里地割に沿った溝や建物跡が正箱遺跡，松縄・下所遺跡，空港跡地遺跡，奥の坊遺跡，汲仏遺跡，西下遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて，それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ，それに伴い集落の断絶と形成が認められる。郡衙跡などの所在地は不明瞭であるが，前田東・中村遺跡では墨書土器・帯金具が，新田本村遺跡では陶硯や緑釉陶器が出土しており，ともに公的施設の存在が推測されている。新田本村遺跡は小山・南谷遺跡とともに屋嶋城の後方支援的官衙の可能性が考えられる。また，発掘調査で全容の知られる例は無いが，下司廃寺，拝師廃寺，前田廃寺，山下廃寺，多肥廃寺，百相廃寺，勝賀廃寺などが古代寺院として知られ，坂田廃寺に付属する瓦窯である片山池窯跡群について調査が行われている。

中・近世　中世高松の武士としては香西氏・十河氏・由佐氏が知られ，平地の居館である佐料城，詰め城である勝賀城などの様相が発掘調査によって明らかにされつつある。西打遺跡では香西氏との関連が示唆される居館跡が検出されたほか，八幡遺跡では平地式城館の囲繞溝が確認され，キモンドー遺跡では佐藤城の堀が検出されている。居住域としては川南･西遺跡，東山崎･水田遺跡，由良南原遺跡，大空遺跡，百相坂遺跡，前田東・中村遺跡，林・坊城遺跡などで掘立柱建物を中心とした集落跡が見られる。特に空港跡地遺跡では古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され，当該期の高松平野を考える上で重要な知見が得られている。

天正 16（1588）年，豊臣秀吉の家臣，生駒親正により高松城が築城され，城下町が整備される。その後，生駒家騒動により生駒家が出羽国に転封されると，寛永 19（1642）年，松平頼重が東讃岐 12 万石を拝領し，高松城主として入封した。松平家は徳川将軍家の親藩として代々藩主をつとめ，明治維新を迎える。

〈主要参考文献〉
金田章裕 1993「讃岐国における条里プランの展開」『古代日本の景観　方格プランの生態と認識』 吉川弘文館
柴田博・糸魚川淳二 1989「瀬戸内海と古瀬戸内海」『アーバンクボタ』28　株式会社クボタ
高橋学 1995「平地の微地形変化と開発」『講座　文明と環境』６　歴史と気候　朝倉書店
長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生いたち－第一瀬戸内累層群以降を中心として－」『アーバンクボタ』28　株式会社クボタ
山本英之・中西克也編 1992『讃岐国弘福寺領の調査』 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書　高松市教育委員会
渡邊誠 2007「地理的・歴史的環境」『日暮・松林遺跡』 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松市教育委員会

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　　調査の方法

調査予定地は既設の複数の道路により分断されている。道路によって区切られた調査区を北から順にＡ調査区，Ｂ調査区，Ｃ調査区と呼称する（Fig.3)。Ｂ調査区とＣ調査区は国道11号線によって分断されている。このため，国道11号線を境に北側と南側でそれぞれ調査区に沿った主軸を設定し，記録を行った。Ａ・Ｂ調査区の基準杭をＡ１・Ａ２，Ｃ調査区の基準杭をＢ１・Ｂ２と呼び，それぞれをつなぐ線を主軸とする。世界測地系第Ⅳ系における各点の座標はTab.３のとおりである。以下，本報告で地点を呼称する際には，図中に示した方位とは若干ずれるが，それぞれの調査主軸を南北方向，それに直行する方向を東西方向とみなし，南北方向の位置関係はＡ１から北あるいは南に○ｍ，東西方向についてはＡ１－Ａ２主軸より東あるいは西に○ｍと表記する。掘削は重機による遺構上面の検出，人力による遺構の調査を基本とした。遺構図及び平面図は縮尺1/20で作図し，遺物の出土状況などは1/10で記録した。

Tab. 3　基準点座標一覧表

	A1	A2	A3	A4
X	145579.451	145400.680	145356.582	145255.876
Y	50450.416	50425.657	50424.636	50410.544

（数値は世界測地系第Ⅳ系による）

第２節　　調査の概要と基本層序（Fig. 4）

現地表面の標高はＡ調査区北端でおよそ14.0ｍ，Ｃ調査区南端で16.6ｍを測り，北に向かって下がる緩やかな傾斜を見せる。後述する第１遺構面の標高を見ると，Ａ調査区北端では13.6ｍであるのに対し，Ｃ調査区南端では15.1ｍと約1.5ｍの比高差が認められる。第２遺構面の標高も，Ａ調査区北端で13.5ｍであるのに対しＣ調査区南端では14.9ｍを測る。現在の地表面の傾斜と同様に，調査範囲内の原地形も南から北に向かい，なだらかな傾斜をもち下降していたものと考えられる。これは第Ⅰ章で述べた高松平野の地勢とも矛盾しない。

調査区内は大部分が現代の削平を受けている。調査区全域の地表面下30～50cmは削平に伴う花崗土に覆われており，一部の地点では地表面下２ｍ以上も花崗土が認められた。削平の浅い地点では花崗土下で旧耕作土ならびに床土が検出され，これらの下層より遺構面を検出した。この遺構面は黒褐色系のシルトからなる層である。出土遺物が極めて少なく，時期を推定する材料に乏しいが，数少ない出土遺物と，本層を切り込む灰色系シルトを中心とした遺構埋土から，近世の遺構面であると考えられる。以下第１遺構面と呼称する。

第１遺構面の下には黄褐色系粘質シルトからなる第２の遺構面が認められた。出土遺物から，弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構面であり，中心は弥生時代後期と古墳時代中期であると考えられる。以下第２遺構面と呼称する。部分的に断割り調査を行った地点では第２遺構

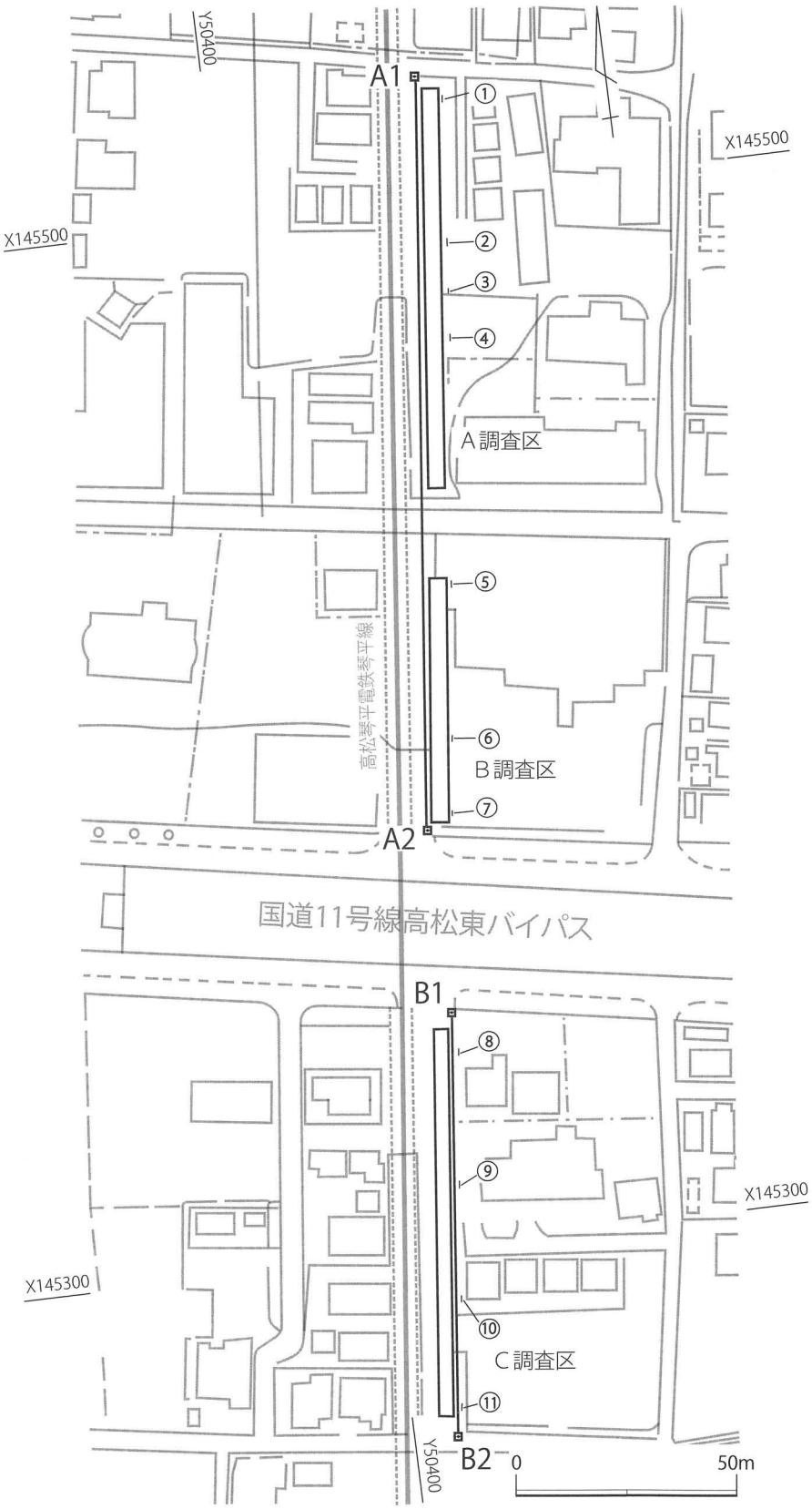


Fig. 3　調査区配置図（縮尺１/600）　※○の数字は Fig. 5 に対応

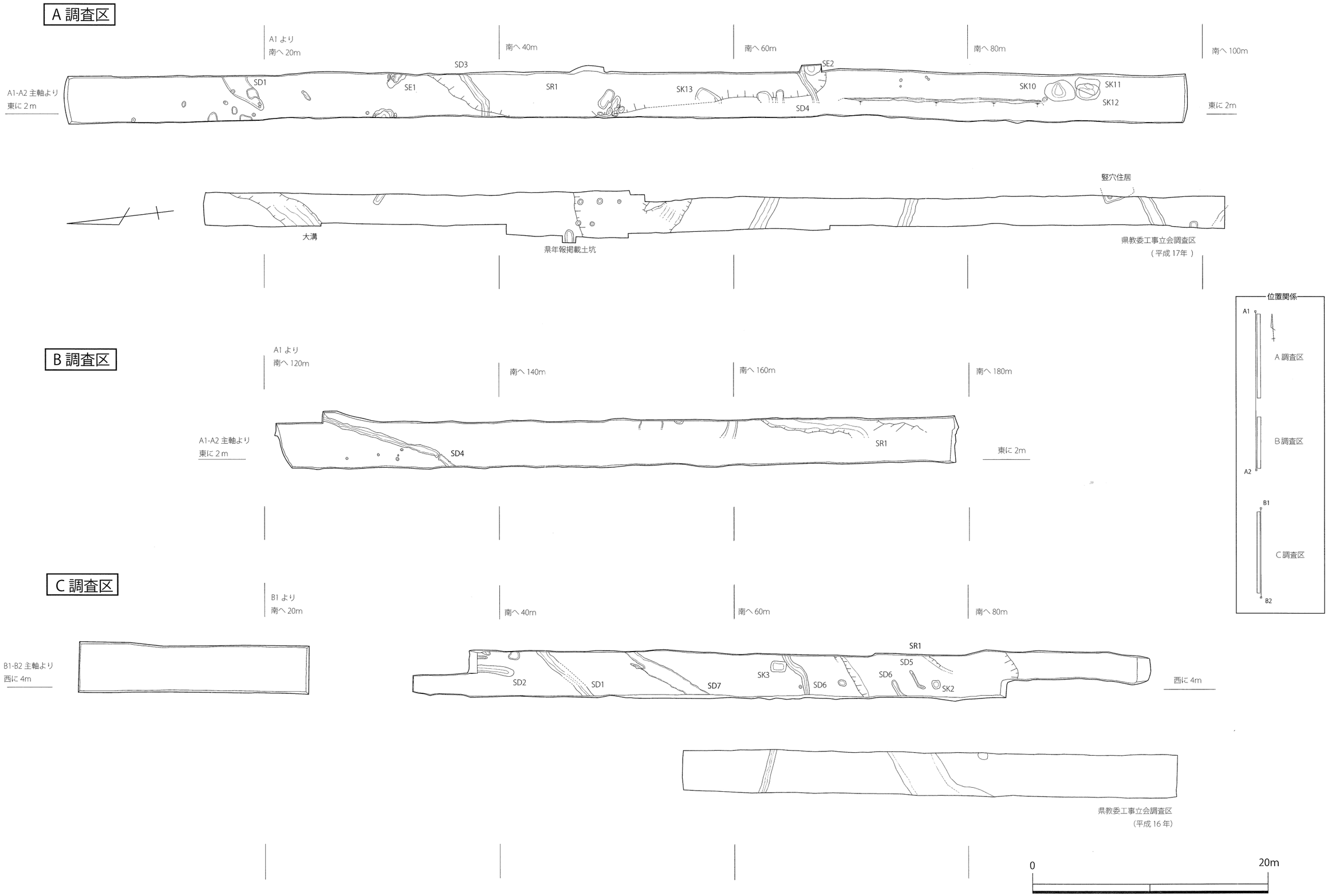


Fig. 4　　遺構配置図（縮尺 1 /300）

面下から粒径の比較的大きな礫群からなる地山層を確認した。

なお，本調査においては遺物の出土した遺構が極端に少ない。このため，遺構を時期ごとに区別して記述することが困難であるので，調査区ごとに遺構および出土遺物の詳細を列記することとする。

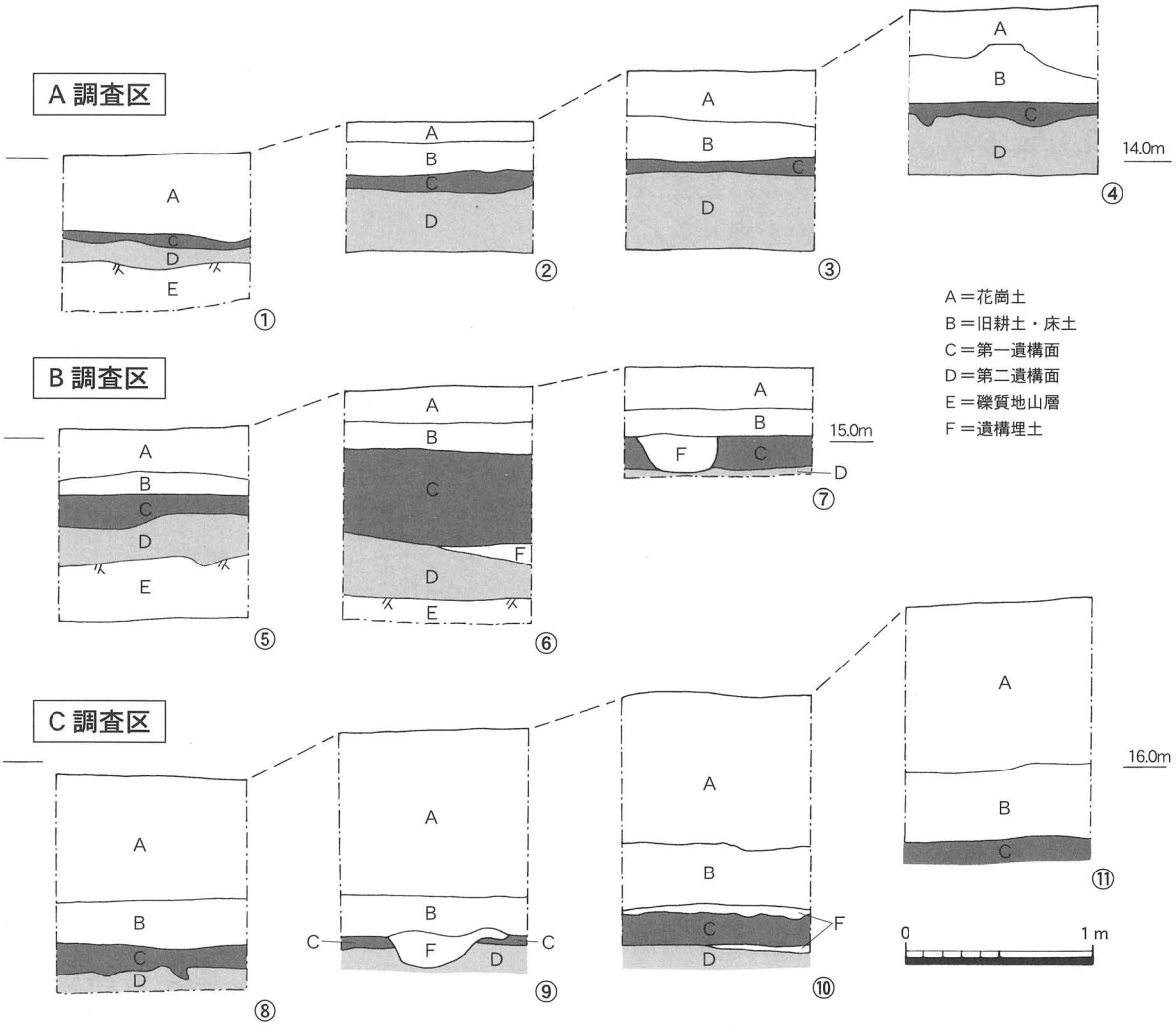


Fig. 5　調査区の基本層序　　※○の数字は Fig. 3 に対応

第３節　　Ａ調査区（Fig. 8）

Ａ調査区は幅約４ｍ，長さ約96ｍで南北方向に設定した調査区である。調査区北端の現地表面が標高14.0ｍ，南端で標高14.8ｍを測る。地表面下は厚さ30～50cmほどの花崗土に覆われており，その下に旧耕作土と床土を挟んで第１遺構面，さらに下から第２遺構面を検出した。調査区の南西半部では特に花崗土が厚く認められ，断ち割り調査を行ったところ花崗土下では遺構面が既に削平されている様子が確認された。従って調査区南側では撹乱の及ぶ範囲を避けて遺構の検出を行った。以下，特徴的な遺構の詳細を記す。

（１）土坑

ＳＫ 10（Fig. 6）　Ａ１より南へ88ｍの地点で検出した平面楕円形の土坑である。長径2.2ｍ，短径1.8ｍを測る。第２遺構面を掘り込んで形成されており，土坑中央が漏斗状に深くなる。最深部の深さは0.6ｍを測る。埋土はまずにぶい黄橙色シルトが見られ，上に黒色シルトが堆積する。また堆積状況から，１・２層は重複する別遺構の埋土である可能性と，自然堆積による堆積状況の二つの可能性が考えられる。いずれの層からも遺物は出土していない。

ＳＫ 11（Fig. 7）　Ａ１より南へ90ｍの地点で検出した平面隅丸方形の土坑である。後述するＳＫ 12を切って形成される。長辺2.1ｍ，短辺1.3ｍを測り，断面は深さ0.4ｍのレンズ状を呈する。埋土はにぶい褐色シルトが堆積し，上層に黒色シルトが認められる。遺物が出土しておらず，時期は不明であるが遺構の切りあい関係からＳＫ 12に後出して形成された遺構である。

ＳＫ 12（Fig. 7）　Ａ１より南へ90ｍの地点で検出した平面楕円形の土坑である。ＳＫ 11に切られている。長径は2.1ｍ，短径1.4ｍ，深さ0.1ｍを測る。第２遺構面を掘り込んで形成されるが，遺物が出土せず詳細な時期は不明であるが，遺構の切りあい関係からＳＫ 11に先行して形成された遺構である。

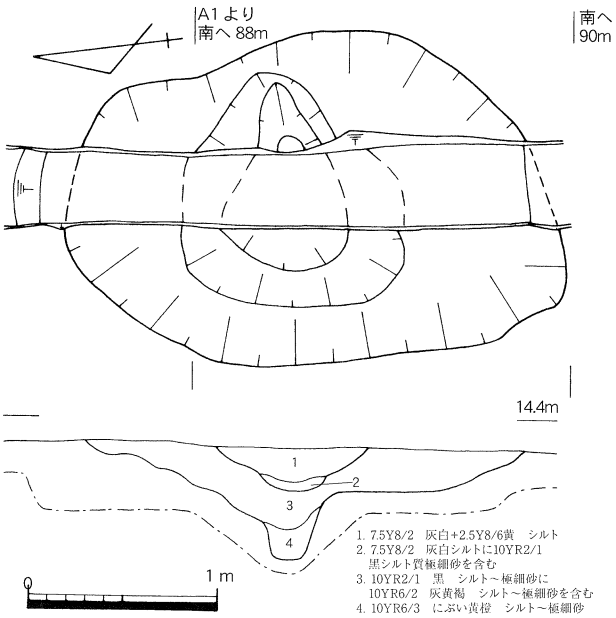


Fig.6　Ａ調査区ＳＫ10平・断面図（縮尺１/40）

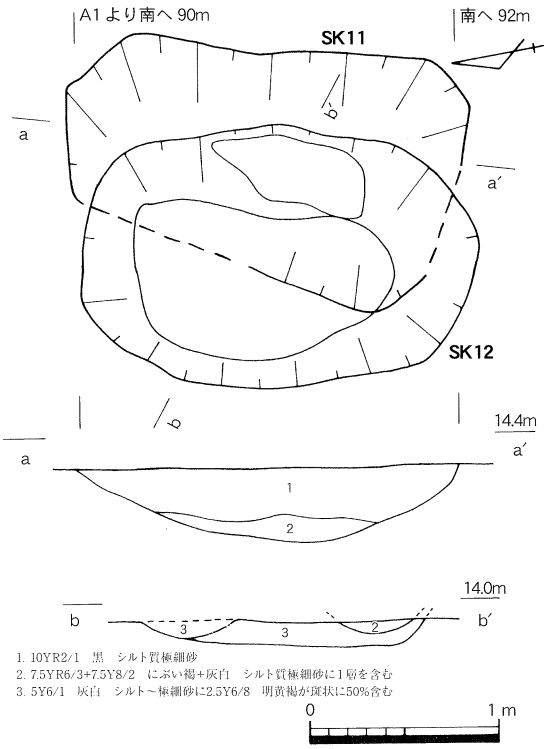


Fig.7　Ａ調査区ＳＫ11･12平・断面図（縮尺１/40）

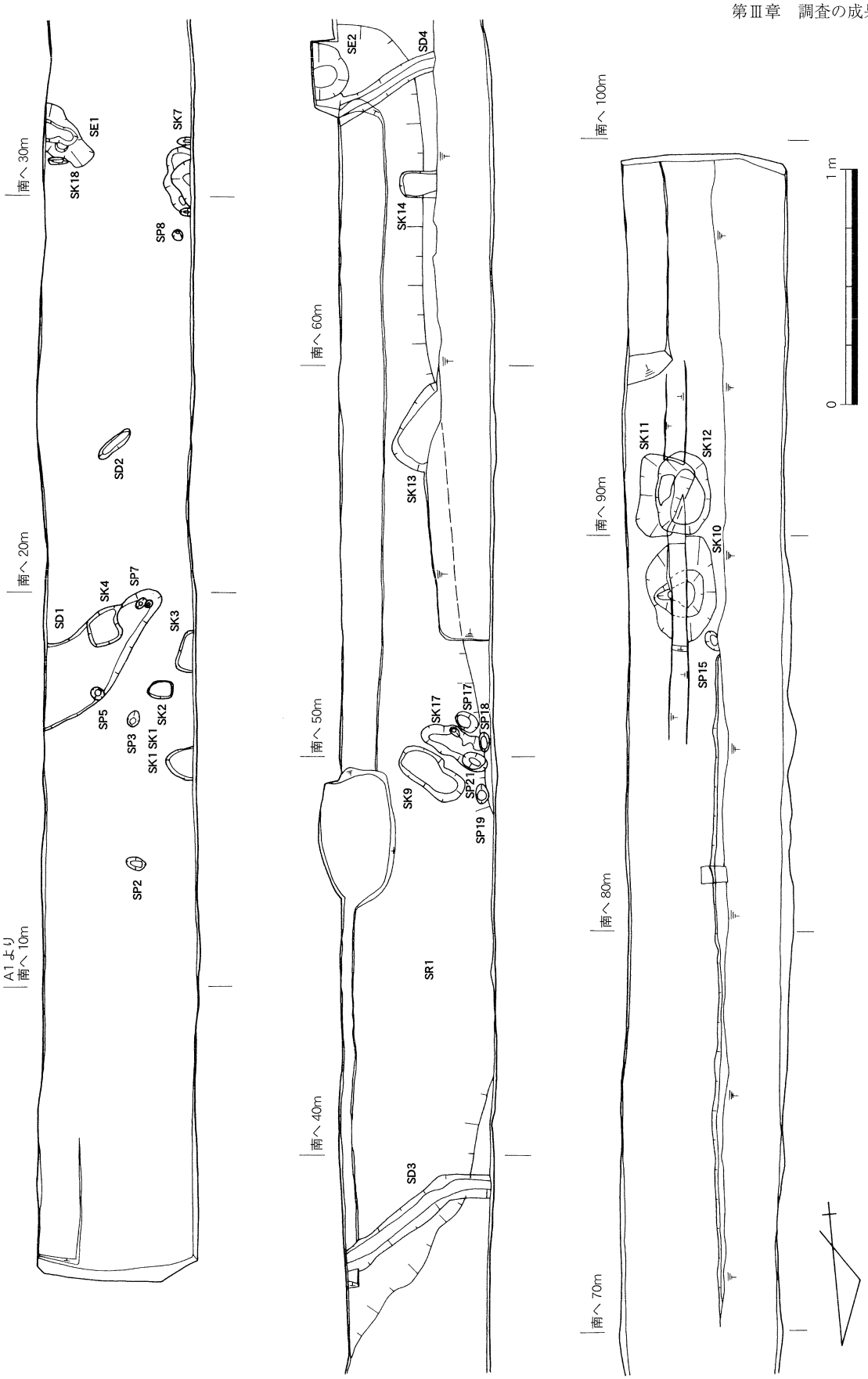


Fig. 8　A調査区平面図（縮尺1/150）

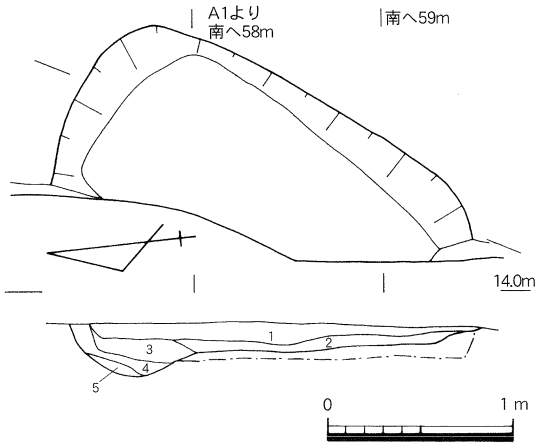
ＳＫ 13（Fig. 9）　Ａ１より南へ 58 mの地点で検出した土坑である。削平により西半が消失している。残存部分の長辺は 2．3 m，深さは最大で 0.3 mを測る。第２遺構面を掘り込んで形成されるが，遺物は出土しておらず，時期は不明である。

（２）溝

ＳＤ１（Fig.10）　Ａ１より南へ 18 mの地点で検出した溝である。南西から北東にのび，調査区外に続く。幅は最大で 2.1 mを測り，深さは約 0.1 mと浅い。第２遺構面を掘り込んで形成される。遺物が出土せず，時期は不明である。

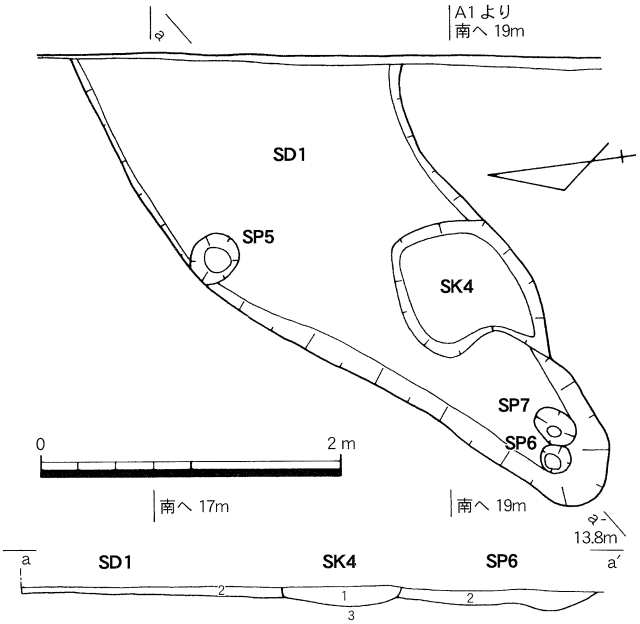
ＳＤ３（Fig.11）　Ａ１より南へ 39 mの地点で検出した溝である。西側では調査区に直行し，角度を変えて北東方向へのびる。第２遺構面を基盤とし，幅は最大で 0.6 m，深さは 0.3 mを測る。土師質の土器片を１点検出した。土器は小片であり，磨耗が著しいため詳細は不明である。

ＳＤ４（Fig.26）　Ａ１より南へ 67 mの地点で検出した溝である。南西から北東方向に直線的に伸び，両端とも調査区外へ続く。第２遺構面を基盤として形成されており，幅は最大で 0.5 m，深さは 0.5 mを測る。遺物は出土せず，時期は不明である。



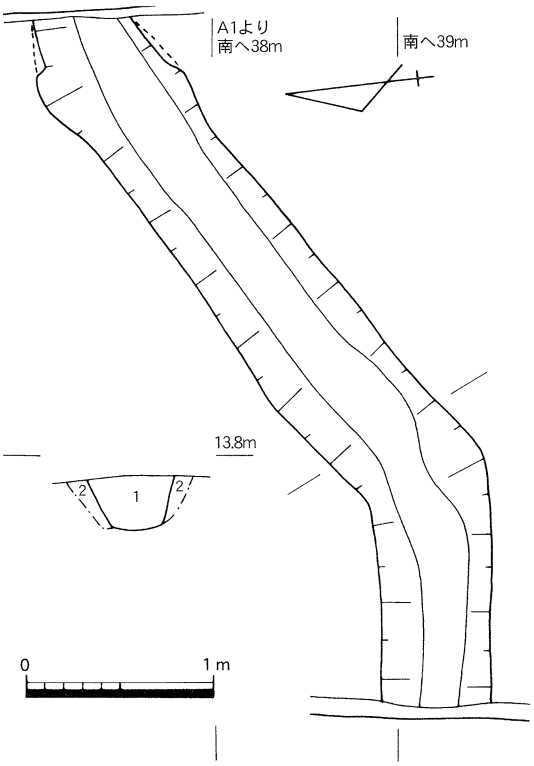
1. 10YR3/1　黒褐　シルト　Fe沈着顕著
2. 10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質細砂に黒褐色シルト混じる
3. 10YR3/1　黒褐　シルトに灰白色砂質土を塊状に含む
4. 10YR2/1　黒　シルトに灰白色砂質土混じる　Fe沈着
5. 7.5YR4/1　褐灰　砂質シルト

Fig. 9　Ａ調査区ＳＫ 13 平・断面図（縮尺１/40）



1. 10YR6/1　褐灰　シルト
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルトに 2.5YR5/8 明赤褐を斑状に 5%含む
3. 10YR6/1　褐灰　シルトに 2.5Y5/6 黄褐を斑状に 50%含む

Fig.10　Ａ調査区ＳＤ１平・断面図（縮尺１/50）

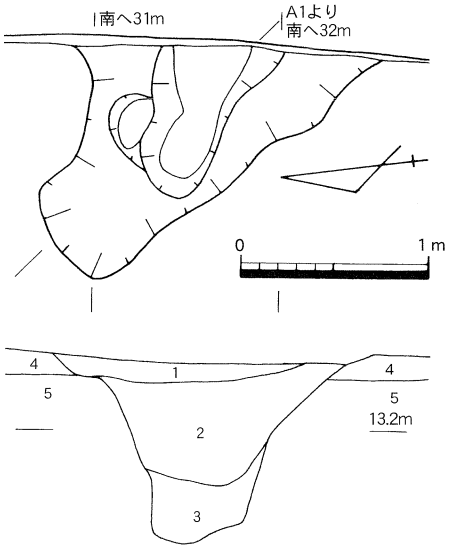


1. 10YR2/2黒褐　粘土～シルト　径10cm程度の礫と5cm程度の土器片を1片含む
2. 10YR5/1褐灰　シルトに10YR6/6 明黄褐を斑状に10%含む

Fig.11　Ａ調査区ＳＤ３平・断面図（縮尺１/40）

（３）井戸

ＳＥ１（Fig.12）　Ａ１より南へ32ｍの地点で検出した井戸である。遺構の東端が調査区外へ続いていたため，全容を確認することはできなかった。検出した範囲での最大幅は0.8ｍ，深さは0.95ｍを測る。埋土はまず黒褐色シルト～極細粒砂が堆積し，その上層ににぶい黄褐色シルト～極細粒砂，さらに黄灰色シルト～極細粒砂が認められる。遺構底部付近からは多量の湧水が認められたため，井戸であると判断した。遺物が出土しておらず，詳細な時期は不明であるが，第２遺構面を掘り込んでいることから，弥生時代から古墳時代にかけての遺構である可能性が考えられる。



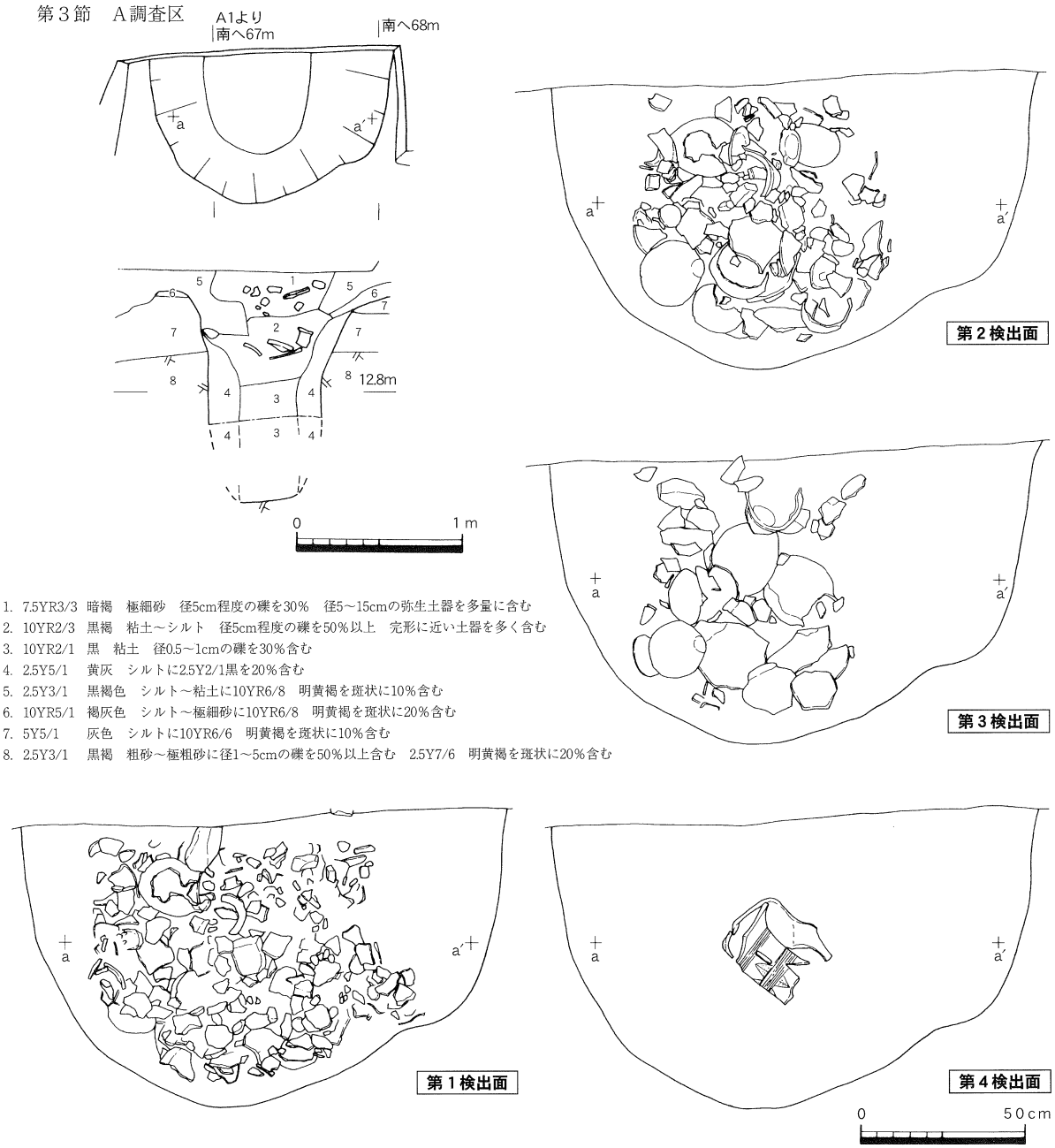
1. 2.5Y4/1　黄灰　シルト～極細砂
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト～極細砂に径2cm以下の白色礫を3%程度含む
3. 10YR2/3　黒褐　シルト～極細砂
4. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト～極細砂
5. 2.5Y6/6　暗黄褐　シルト～極細砂に10YR5/1褐灰を斑状に30%含む

Fig.12　Ａ調査区ＳＥ１平・断面図（縮尺１/40）

ＳＥ２（Fig.13）

〔遺構〕　A1より南へ68mの地点で東壁沿いに検出した井戸である。遺構の東端が調査区外に広がっていたため，部分的に調査区を拡張して調査を行ったが，現代の側溝が隣接しており，全体を検出することはできなかった。検出した範囲では平面円形を呈し，長径約1.5ｍ，深さ約1.3ｍを測る。底に近づくにつれて漏斗状に径が小さくなり，底部付近では直径が約0.4ｍである。第２遺構面を基盤とし，地山の礫層まで掘削が及ぶ。遺構底部付近では断割り調査を行い，堆積状況の確認を試みたが，調査中に崩落してしまったため，詳細な記録を行えなかった。底部付近の堆積は写真と調査時の所見から復元したものである。調査中，第１層からはすでに少量の湧水が見られ，第２層以下では多量の湧水が認められた。井戸枠･井戸側などの痕跡は認められず，素掘りの井戸である。第２遺構面を掘り込んで形成され，礫混の地山層まで掘りぬいている。黄灰シルトの第４層が堆積したのち，第３層，第２層と黒褐色系のシルト層が堆積する。第４層が遺構の壁沿いに垂直に見られるため，掘り返しが行われた可能性も考えられる。第２・３層は土質がほぼ均一で，土器と円礫の有無により二分したが同質の土層であると考えられる。出土遺物は第１・２層から多量の弥生土器片が認められた。

〔遺物出土状況〕　多量の弥生土器片が第１・２層より出土した。第１層最下部および第２層上位では比較的小さな土器片を多数検出した（Fig.13，第１検出面）。これらの遺物を取り上げたのち，平面的に遺物の検出を行い（第２検出面），さらにそれらを取り上げ，遺物の検出を行った（第３検出面）。第２・３検出面からは比較的大きな破片を密集して検出しており，中には完形に近い資料も多く認められた。上位の遺物を取り上げたのち，第２層の最下部から器台（142），直口壺（141）が認められた（第４検出面）。141は検出時縦半分に半裁されたような状態で出土した（PL. ３下段）。また，全ての検出面から，遺物と共に径５～10cmの円礫が多量に検出された。意図的に廃棄されたものと考えられる。



1. 7.5YR3/3　暗褐　極細砂　径5cm程度の礫を30%　径5～15cmの弥生土器を多量に含む
2. 10YR2/3　黒褐　粘土～シルト　径5cm程度の礫を50%以上　完形に近い土器を多く含む
3. 10YR2/1　黒　粘土　径0.5～1cmの礫を30%含む
4. 2.5Y5/1　黄灰　シルトに2.5Y2/1黒を20%含む
5. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト～粘土に10YR6/8　明黄褐を斑状に10%含む
6. 10YR5/1　褐灰色　シルト～極細砂に10YR6/8　明黄褐を斑状に20%含む
7. 5Y5/1　灰色　シルトに10YR6/6　明黄褐を斑状に10%含む
8. 2.5Y3/1　黒褐　粗砂～極粗砂に径1～5cmの礫を50%以上含む　2.5Y7/6　明黄褐を斑状に20%含む

Fig.13　Ａ調査区ＳＥ２平・断面図（縮尺１/40）および遺物出土状況（縮尺１/20）

〔遺物〕　多量の遺物が出土した第２層は検出状況で上から第１～第４検出面に分けて取り上げをおこなった。このうち第２～３検出面より検出した遺物を一括して第２層中位出土資料として扱い，第１検出面を第２層上位，第４検出面を第２層下位として報告する。なお胎土の詳細については遺物観察表（Tab. 9）にまとめたが，本遺構出土土器は９割以上が「角閃石細粒を稠密に含む特徴的な素地粘土を採用する」「香東川下流域産」（大久保 2003）とされる土器である。以下では記述の煩雑さを避けるため，胎土については香東川下流域産以外と考えられる資料についてのみ個別に記述する。

〈参考文献〉

大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社

第２層上位（Fig.14・15）

〈壺〉（1～9）　1～3は広口壺である。1は直立する長い頸部をもち，2は短い頸部をもち口縁端部の肥厚が強い。3は頸部でくの字に屈曲し，口頸部が緩やかに外向する。ともに口縁端部が肥厚し，内上方にやや突出する。端面には2条の凹線が巡る。4～7は直口壺である。5・6は肩部に段を有し，頸部に6本の凹線を施す。8は小型壺である。最大径6.0cmを測り，内面には体部中位から上部までヘラケズリが及ぶ。9は中期的特徴を残す壺である。くの字に屈曲する肩部から口縁部につづく。

〈甕〉（10～18）　10は土師器甕の口縁部である。直線的で長い口縁部である。口縁部のみの出土であり，混入の可能性が考えられる。二次的に付着した可能性の高い赤色顔料が認められる。11は器厚が厚く，比較的長く外反する口縁部をもつ。口縁端部には明瞭な凹線が巡る。13は頸部の屈曲が弱く，短い口縁部がなだらかに外反する。口縁端部は肥厚せずそのまま収める。内面のケズリは体部上半まで及ぶ。14･16は頸部が強く屈曲し，口縁端部が肥厚し，上方へ突出する。口縁端部には2条の凹線が巡る。17は小型の甕である。口縁端部が弱く肥厚する。

〈底部〉（19～29）　19～22は屈曲と立ち上がり角度から壺・鉢の底部であると考えられる。外面へラミガキ，内面へラケズリが認められる。23～29は甕の底部であろう。体部が強く屈曲し立ち上がる。内面のヘラケズリが顕著である。

〈鉢〉（30～32）　30は口縁部が湾曲し，正円に復元できないことから片口鉢であると考えられる。湾曲の形状から，片口部付近であろう。内面は口縁部付近までヘラミガキが及ぶ。31は大型の鉢である。口縁端部が水平に弱く肥厚し，明瞭な端面を有する。内面に赤色含量が付着し，分析の結果水銀朱であることが判明した（第Ⅳ章第1節）。

〈高坏〉（33～43）　口縁部は外反しながら丸く収めるもの（33）と水平に肥厚する端面をもつもの（35・37・39）が認められる。39は口縁部端面に凹線を巡らせる。40・41は脚部である。器壁が厚く，直立する。外面には入念なヘラミガキが認められ，内面はナデで仕上げられる。40は褐色を呈す胎土中に角閃石がほとんど認められず，搬入品の可能性が考えられる。脚端部は直線的にのびるもの（42）と端部が肥厚し，肥厚し下方へ突出するもの（43）が見られる。42には円孔が認められる。端面には1～2条の凹線が施される。

〈その他〉（44・45）　44は器種不明体部である。外面に櫛描波状文が見られる。文様から弥生時代中期にあたる時期の資料と考えられるが，小片でやや磨耗しているため，混入であると判断した。45は口縁部が直線的にのび，正円に復元できないこと，端面が鋭利な工具で平滑に削られ断面方形を見せることから，把手付広片口皿の側縁部であると考えられる。詳細は第Ⅴ章第3節にて述べる。

〈石庖丁〉（S1）　サヌカイト製の打製石庖丁である。背部・刃部が供に弧を描いて湾曲する。側部の突出度合いはやや弱く，丸く収める。背部・刃部ともに細かな敲打によって仕上げられる。完形で出土し，長さ5.5cm，幅5.0cm，厚さ1.2cmを測る。

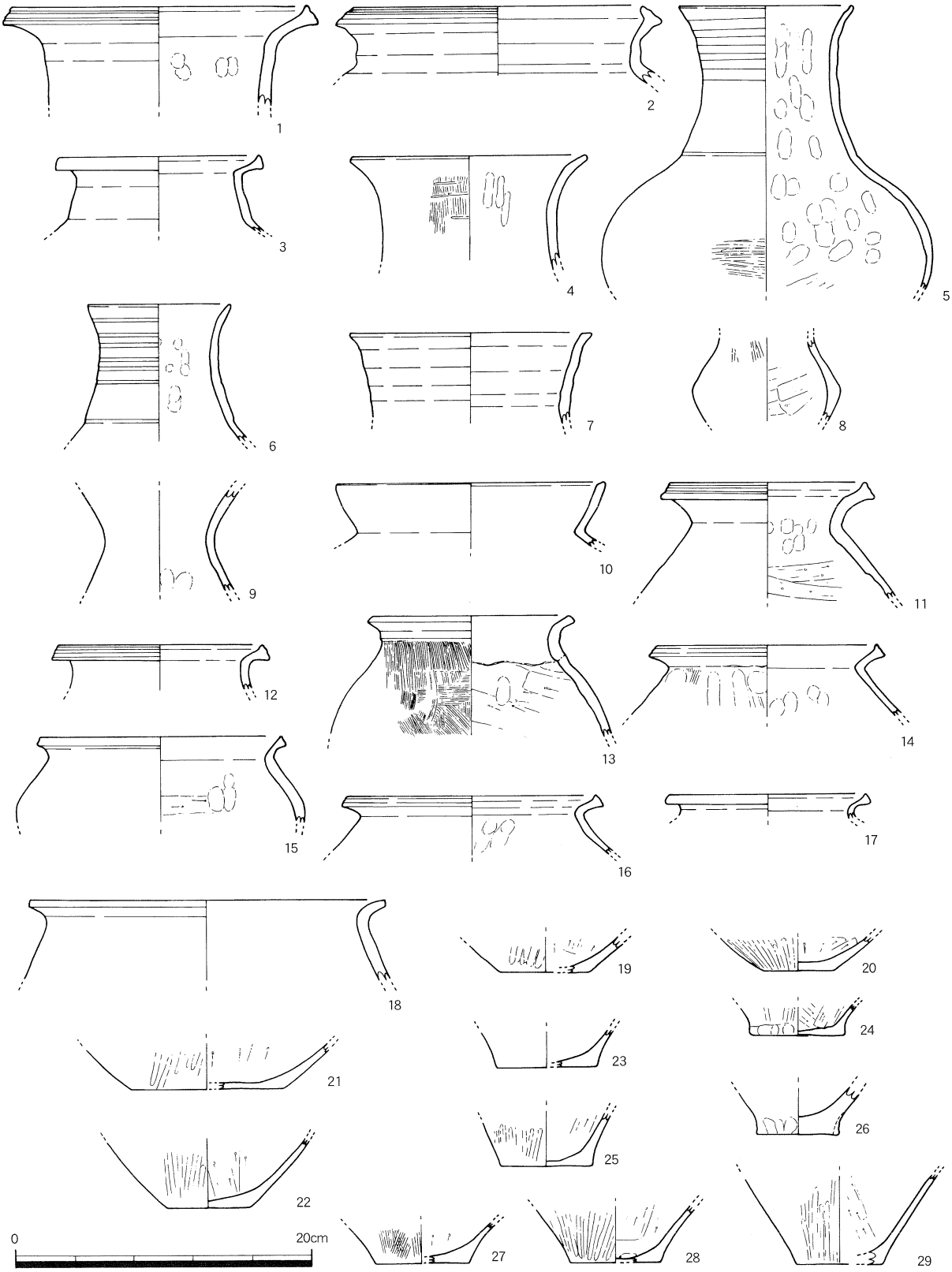


Fig.14　Ａ調査区ＳＥ２第２層上位出土遺物①　（縮尺１／４）

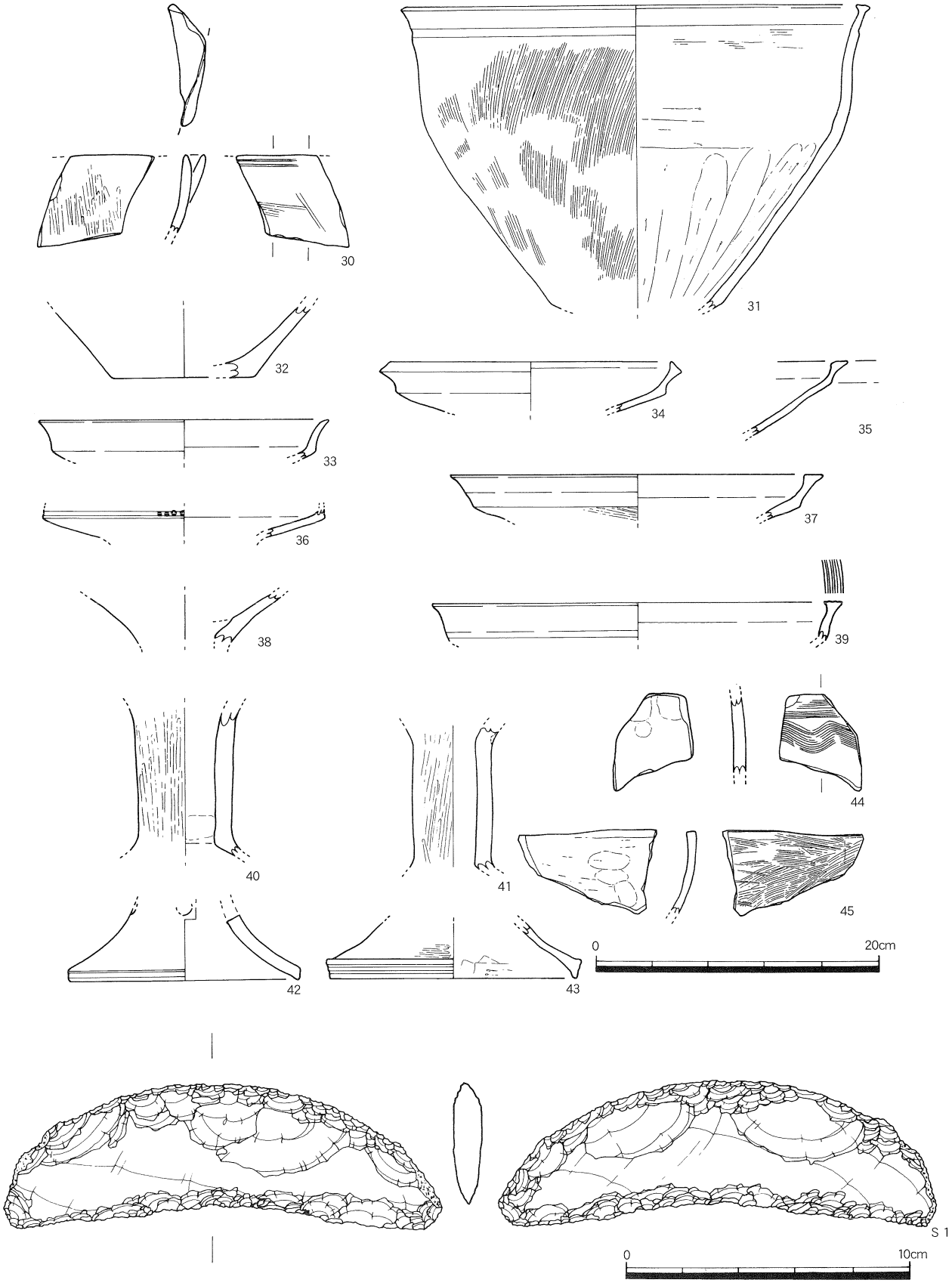


Fig.15　Ａ調査区ＳＥ２第２層上位出土遺物②（縮尺１/４，Ｓ１は１/２）

第２層中位（Fig.16 ～ 22）

〈壺〉（46 ～ 68）　46 ～ 50・54 は広口壺である。47・48 は体部中位に櫛描刺突文がめぐり，47 は口縁部と頸部に複数の凹線が認められる。49 はラッパ状に外に大きく開く長い口縁部をもつ。底部内面にはヘラケズリ後ヘラミガキが施される。50 は直立する長い頸部から口縁部が強く屈曲し，外向する。54 は端部が肥厚せず口縁部がラッパ状に強く外反する。51 ～ 53，55 ～ 59 は直口壺である。52 は底部に脚部の痕跡が認められる脚付の器種である。にぶい橙色を呈する胎土は角閃石を含まず，粒径の大きな白色粒の混入が目立つ。形態と胎土から，搬入品の可能性が考えられる。55・60・63 は肩部に明瞭な段を有する。56 は明赤褐色を呈する胎土に角閃石を含まず，粒径の大きい白色粒が目立つ。口頸部が直立し，口縁端部を四角く収める。外面には弱い段が２段巡るが，退化した凹線なのか，ナデ調整によるものかは不明である。形態と胎土から，搬入品である可能性が考えられる。57・58 は頸部に５～ 11 本の凹線を巡らす。59・60・63 は頸部に櫛描斜線文が斜交して施される。61・65 は無頸壺である。61 は算盤玉形の体部に外反する短い口縁部をもつ。色調は全体的に赤色を呈するが胎土には角閃石も多く含む。64 は短頸壺である。口縁部の折り返しはナデで仕上げられる。内外面ともハケ調整が施されるが，焼成は全体的に粗雑な印象を受ける。体部は球形に近く体部中位で最大径を測る。鈍い黄褐色を呈する胎土には角閃石の混和が認められず，粒径の大きな白色粒がめだつ。いわゆる白色系の胎土とされる資料である。胎土から搬入品であると考えられる。65 は小型の無頸壺である。極めて短い口縁部に２孔×２箇所の計４孔が穿たれる。紐通し孔であろうか。体部内面中位までヘラケズリが及ぶ。66 は細頸壺である。口頸部は欠損し不明であるが，肩部に極めて明瞭な段を持つ。体部は倒卵形を呈する。67・68 は大型の壺体部である。体部中位に円形浮文が巡る。47・49・50・61・64・66 には体部中位から下半に穿孔が認められる。破面の状態から焼成後に意図的に穿孔されたものと考えられる。

〈甕〉（69 ～ 96）　69 は口縁部下に貼付突帯がめぐる。弥生時代前期に属する資料である。小片で磨耗が激しいため，混入であると判断した。70 は短く外反する口縁部である。端面は肥厚せず先細りの形状を呈する。形状から高坏の口縁部である可能性も考えられる。71 ～ 78 は口頸部が頸部状に直立し，強く屈曲して口縁部に続く。また 71 ～ 80 は口縁部端面に１～２条の凹線を巡らせる。凹線は基本的に弱く，極めて不明瞭である。81・82 は体部外面上半にタタキ調整が認められる。81 はタタキ後にハケで，82 はナデでそれぞれタタキ痕を平滑にする意図の調整が認められる。また 82 は口頸部が強く屈曲し，頸部に明確な粘土接合痕が観察できる。83 ～ 92 は口頸部の屈曲が明瞭でなく，また口縁部の肥厚具合も弱い。体部内面上半までヘラケズリが及ぶものが多い。83 は小型の甕である。卵形の体部に，直線的に伸び丸く収める口縁部をもつ。87・90 は口縁部が極めて短く，屈曲も弱い。90 は口頸部内面の屈曲部にハケが施される。91 は内面上半のヨコヘラケズリが口頸部まで及ぶ。角閃石も認められるが，粒径の大きな砂粒を多く含む。93 ～ 96 は強く外反し，上方に突出する口縁部をもつ。93 は内湾気味に延びる口頸部から，弱く上方に口縁部が突出する。94・95 は水平に開く口頸部から口縁部が垂直に立ち上がる。94 はにぶい橙色を呈する胎土に角閃石が含まれず，搬入品の可能性が考えられる。96 は口頸部が短く水平に開

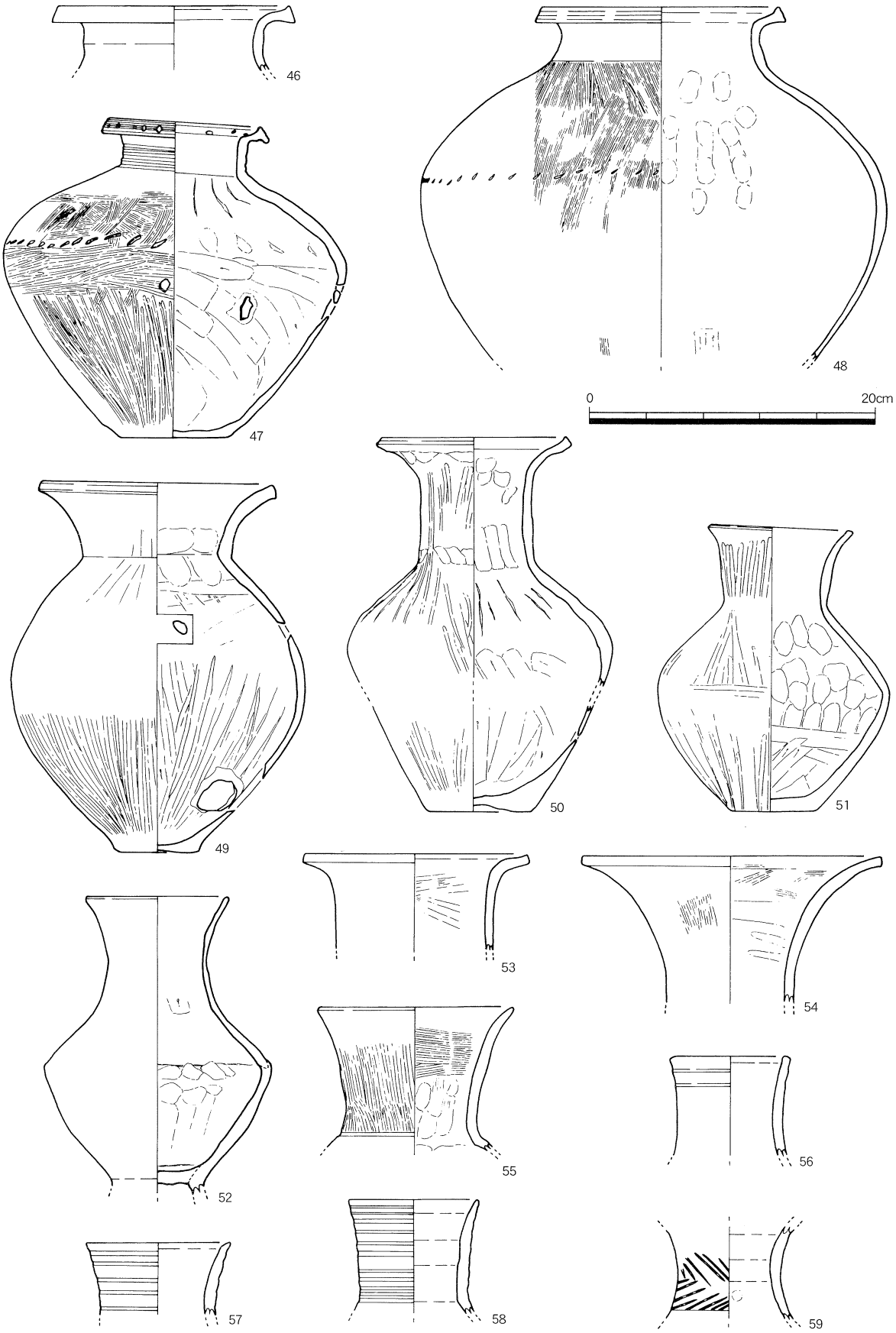


Fig.16　Ａ調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物①（縮尺１／４）

き，肥厚した口縁部が垂直にたちあがる。立ち上がり部は長く，明瞭な凹線が２条施される。

また，壺と同様に 90・91・93 には体部中位から下半に意図的な焼成後穿孔が認められる。

〈底部〉（97 ～ 112）　97 は屈曲から壺の底部である可能性が考えられる。100 ～ 102 は鉢の底部である可能性が考えられる。内面はヘラケズリが認められる。98・99・103 ～ 112 は壺・甕の底部であると考えられる。内面にはケズリ調整が認められる。98 は底部の粘土が剥離した下からハケ調整がのぞき，ハケ調整後に粘土が補充されたことがうかがえる。111 は底面にもヘラミガキが施される。112 は底面に棒状の植物の圧痕が見られる。

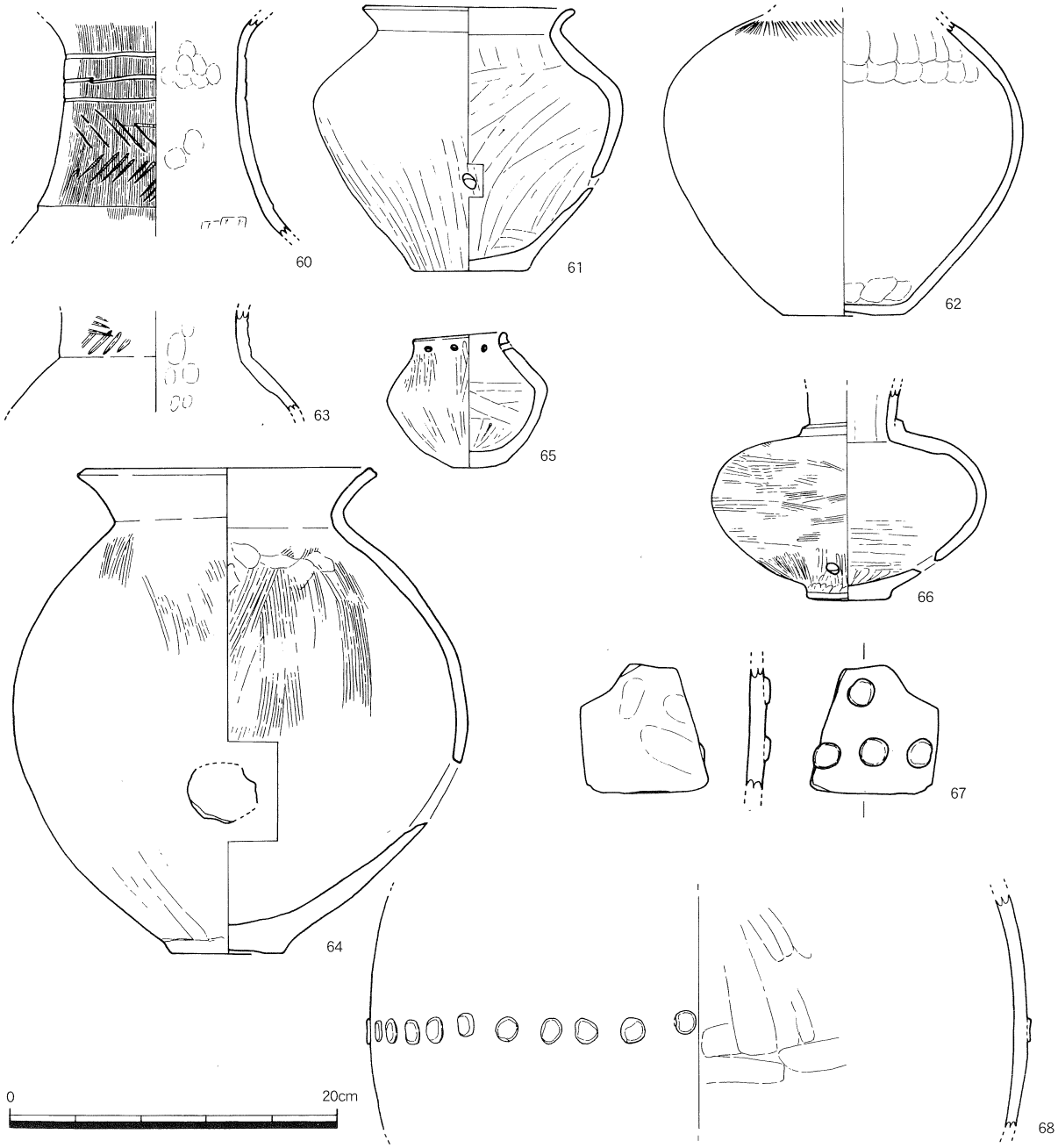


Fig.17　Ａ調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物②（縮尺 1/ 4）

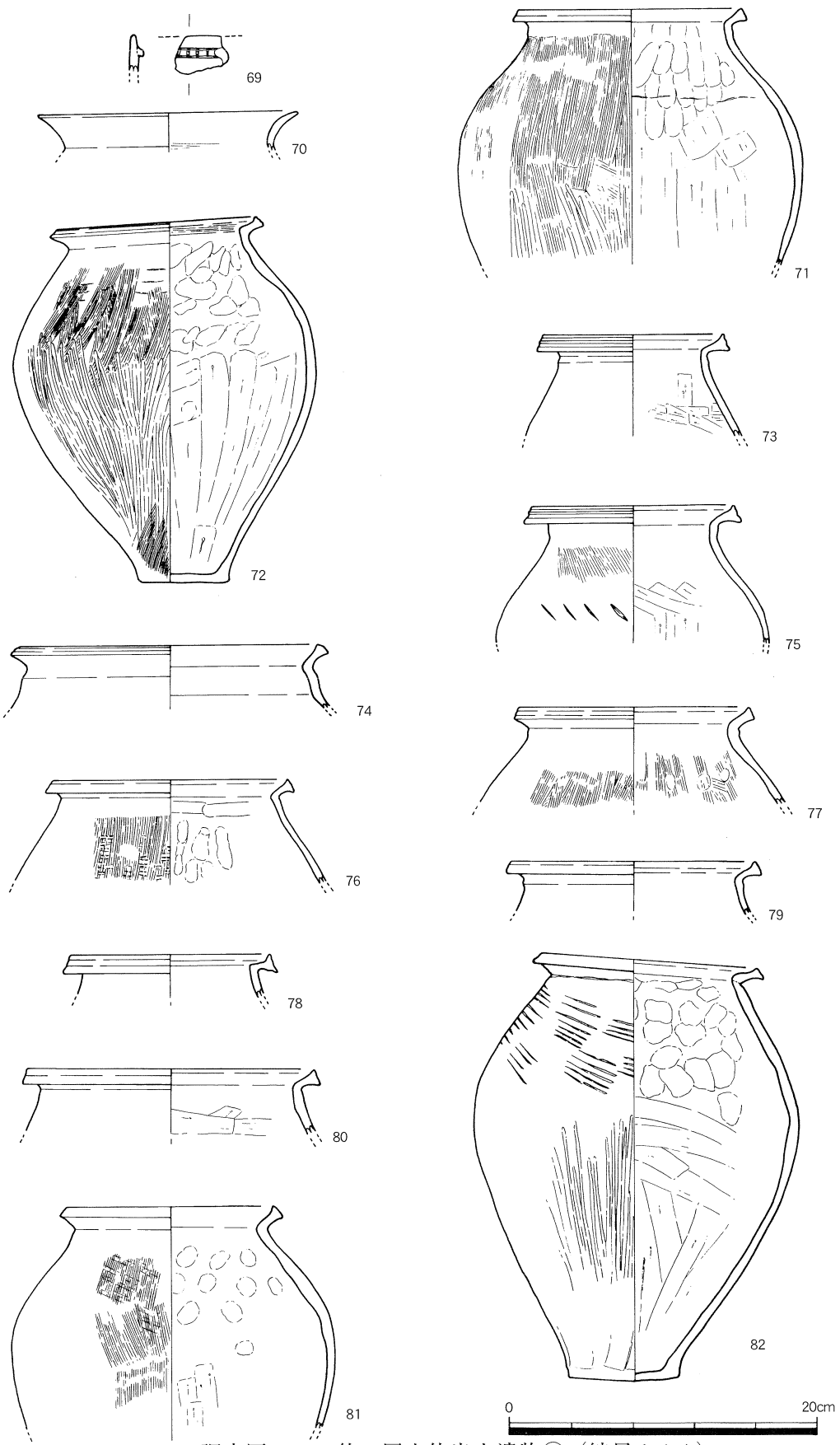


Fig.18　Ａ調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物③（縮尺１／４）

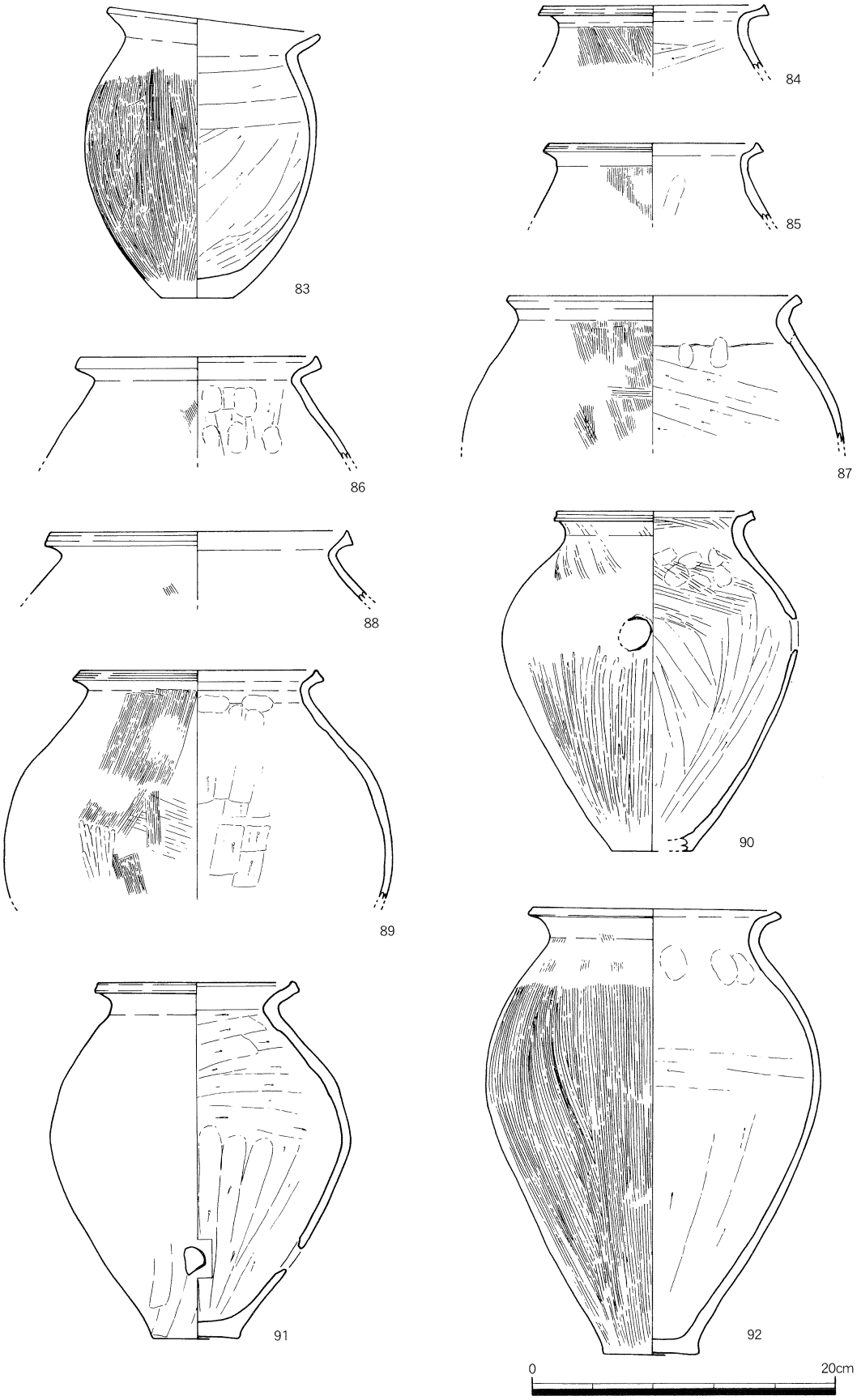


Fig.19　Ａ調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物④（縮尺１／４）

〈鉢〉（113～117）　113･114は大型の鉢である。口縁部はゆるやかに外反しながら次第に直立する。113は口縁部端面を肥厚させず，丸く収める。114は口縁部がやや肥厚し，明確な端面を有する。口縁部から体部にかけて強い凹線がめぐる。115・116は小型の鉢である。緩やかに外反する口縁部を持つ。116は口縁部が水平に肥厚し，端面に２条の凹線をめぐらせる。117は特異な器種である。口径12.2cmと極めて小型で，口縁部が直線的に外反する。ユビオサエによりやや突出する部位が見られる。外面には粗いハケの後に細かいハケが施され，内面には上部までヘラケズリが及ぶ。

〈把手付広片口皿〉（118～120）　口縁部が直線的で正円に復元できず，口縁部端面が四角く収められる資料を少数確認し，形状から把手付広片口皿に分類した。把手部は出土していないが，当遺跡ではかつて香川県教育委員会の調査において本器種が確認されており，隣接する上天神遺跡からも多量に出土していることから，こうした分類名称を与えた。詳細は第Ⅴ章第３節で述べる。118は片口部にあたると考えられる。端面は極めて平滑で砂粒の移動痕が見られることから，鋭利な工具で削り出され，成形されたことがわかる。119は側縁部にあたると考えられる。外面にハケ，内面にはヘラケズリ調整が認められる。内面に水銀朱の付着が認められる。120は内面に精緻なヘラミガキが施されるが，外面は磨耗している。側縁部端面は他と同様ヘラケズリ状の調整により平滑に仕上げられている。

〈高坏〉（121～140）　121はほぼ完形で出土した。口縁部は水平に肥厚し，端面には２条の凹線が施される。内面には分割ヘラミガキが施される。脚部中位に２孔１対と１孔の計３孔，脚部下半に２孔４対の円孔が穿たれる。内外面にベンガラの付着が認められた。122は水平に肥厚した口縁部端面に２条の凹線がめぐる。123は坏部から口縁部にかけての屈曲が弱く，端部の肥厚も明瞭でない。125は坏部底面に円弧状の線刻が認められる。脚部の接合状況からみて，坏部と脚部の接合時に目印として刻まれたものであろう。内外面ともに水平方向のヘラミガキが施される。126～140は脚部である。126・127は器厚が極めて厚く，直立する脚である。外面はタテヘラミガキ，内面はナデないしユビオサエ調整で仕上げられている。128は器厚が薄く，直立する脚部である。内面ナデで仕上げられるが，中位に粘土接合痕が残る。にぶい橙色を呈する胎土には角閃石が含まれない。胎土と形状から搬入品である可能性が高い。129はスカート状に裾が広がる形状を呈する。坏底部との接合部直下にヨコヘラミガキを施す。130は脚部中位に円孔が認められる。131は小型で中空の脚部である。坏部との接合部直下では器厚が非常に厚く，中位から下半にかけて急激に厚みを減ずる。坏底部に脚との接合をよくするために付けられた突起部である可能性が考えられる。本来は131を覆うように脚部がつき，粘土が補充されて接合されたものと考えられる。132は脚部上位と下位にそれぞれ１孔３対の円孔を配する。脚端部は肥厚し上方へ突出する。133は上位に少なくとも１孔，下位に２孔２対の円孔が認められる。脚端部は肥厚し上方に弱く，下方に強く突出する。134は脚端部に強いナデ調整がおよび，凹線は認められない。135～140には脚端部の肥厚がほとんど認められない。136は脚部に５孔の穿孔が認められる。坏部との接合部には粘土の充填が見られる。137～140は脚部が強く外に広がる形状である。137・138は脚部が直線的に伸びるが，139・140は「ハ」の字形にやや屈曲して広がる。端面に巡る凹線はいずれも極めて弱く，痕跡的である。

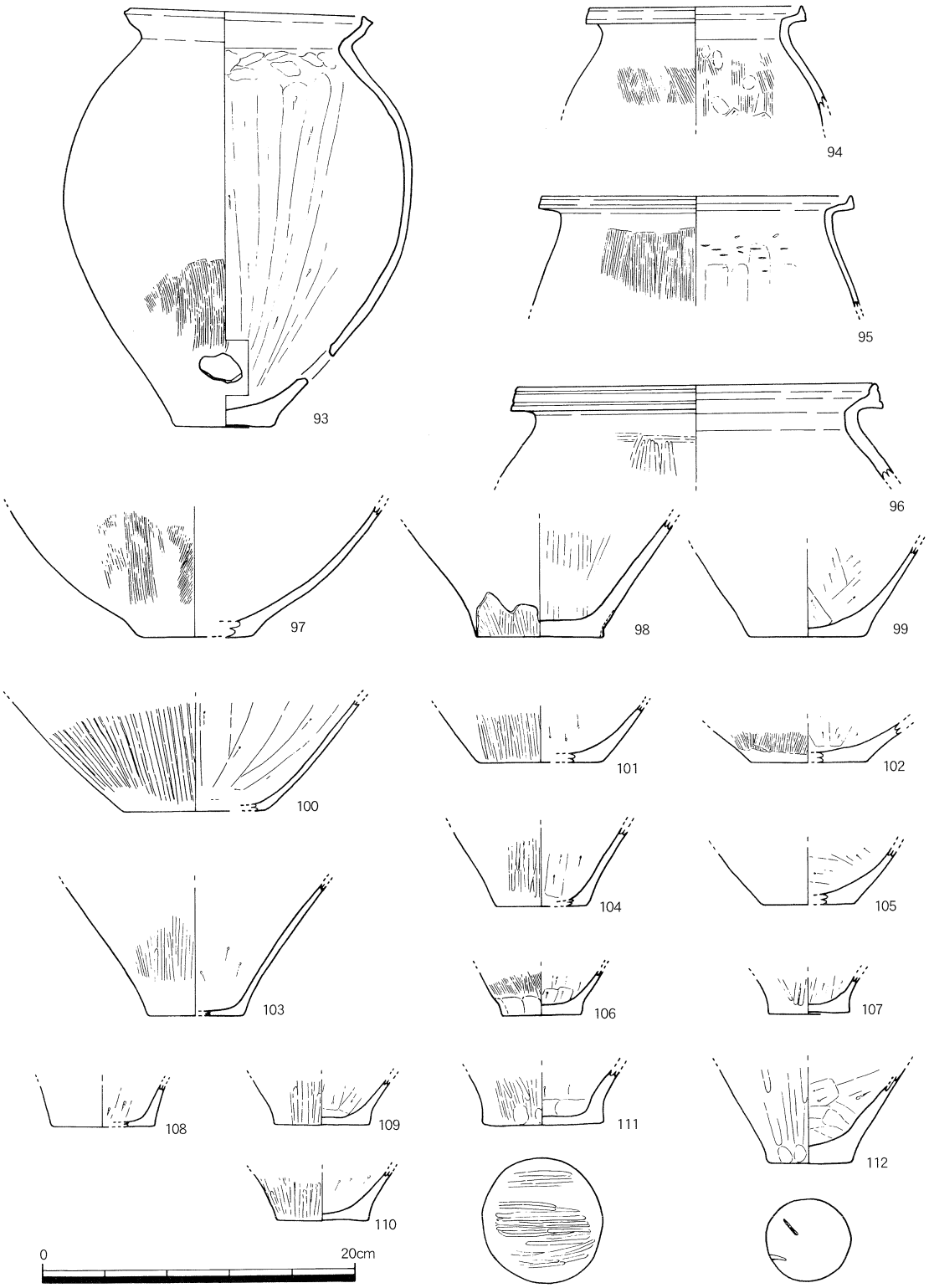


Fig.20　Ａ調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物⑤（縮尺１／４）

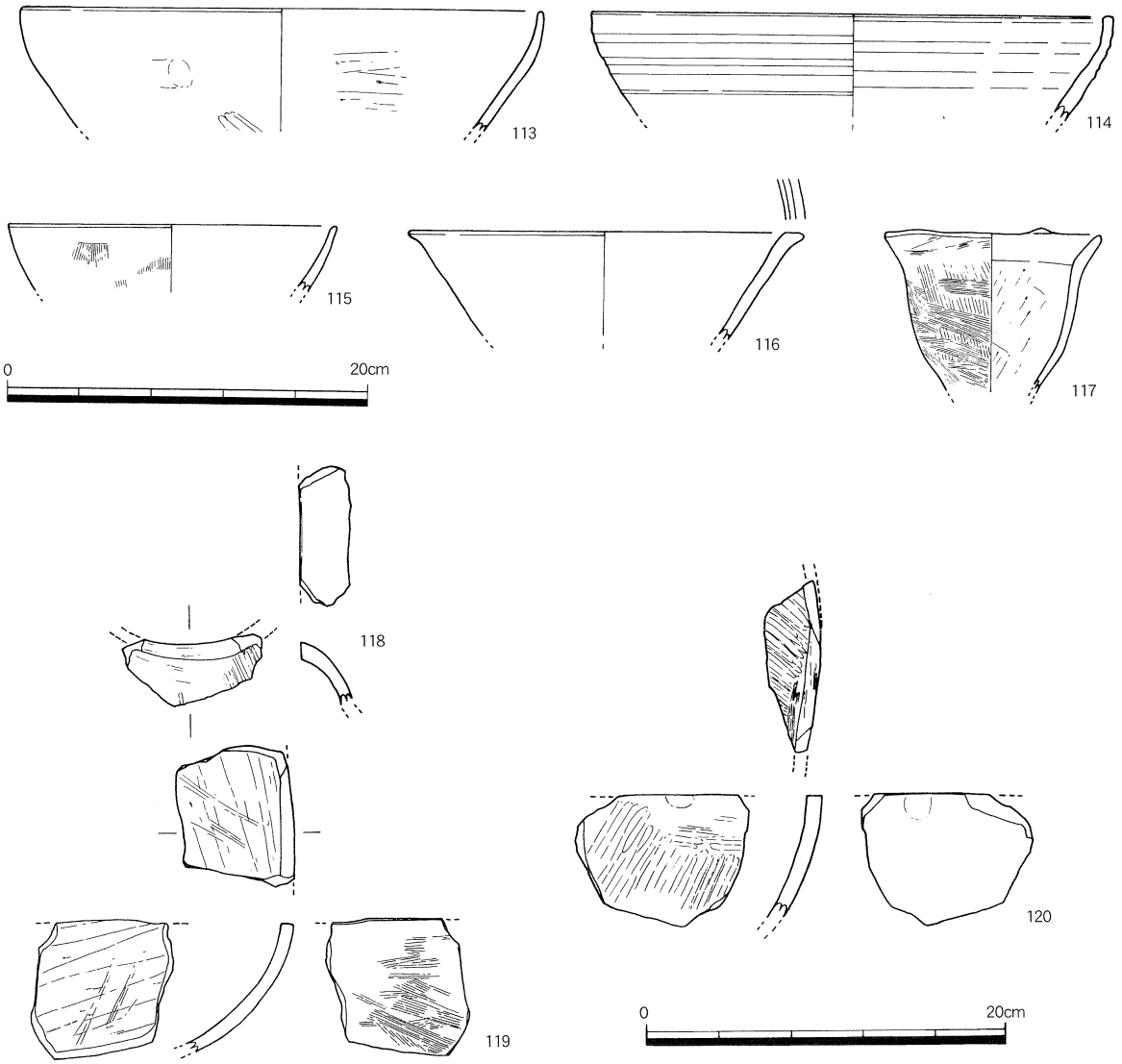


Fig.21　A調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物⑥（縮尺１／４）

第２層下位（Fig.23）

〈壺〉（141）　口縁部が長くゆるやかに外反し，肩部には明瞭な段が認められる。頸部には斜線文がめぐる。体部内面下半までヘラケズリが及び，上半は指頭圧痕が見られる。縦半分に割れた状態で142の器台の下より出土した。

〈器台〉（142）　下半を欠くが，上半はほぼ完形の形で出土した。口径は32.5cm，残存高で22.8cmを測る。ゆるやかに外反する体部から，口縁部が強く水平方向に屈曲する。屈曲部では粘土接合痕も観察される。口縁端部は四角く収め，端面には鋸歯文と竹管文が交互にめぐる。体部は６～11本の凹線からなる凹線帯により上下２段の文様帯に区画され，さらに上段の文様帯は４対の長方形透孔により４区画に分割される。以下ではFig.23の展開図を基準に，上段左から順に第１区画～第４区画と仮に呼称する。また，最も下の凹線帯には長方形透孔と円形透孔の痕跡が認められる。残存状況から配置を推定すると，下段の方形透孔は上段の方形透孔の延長線上に配され，円形透孔

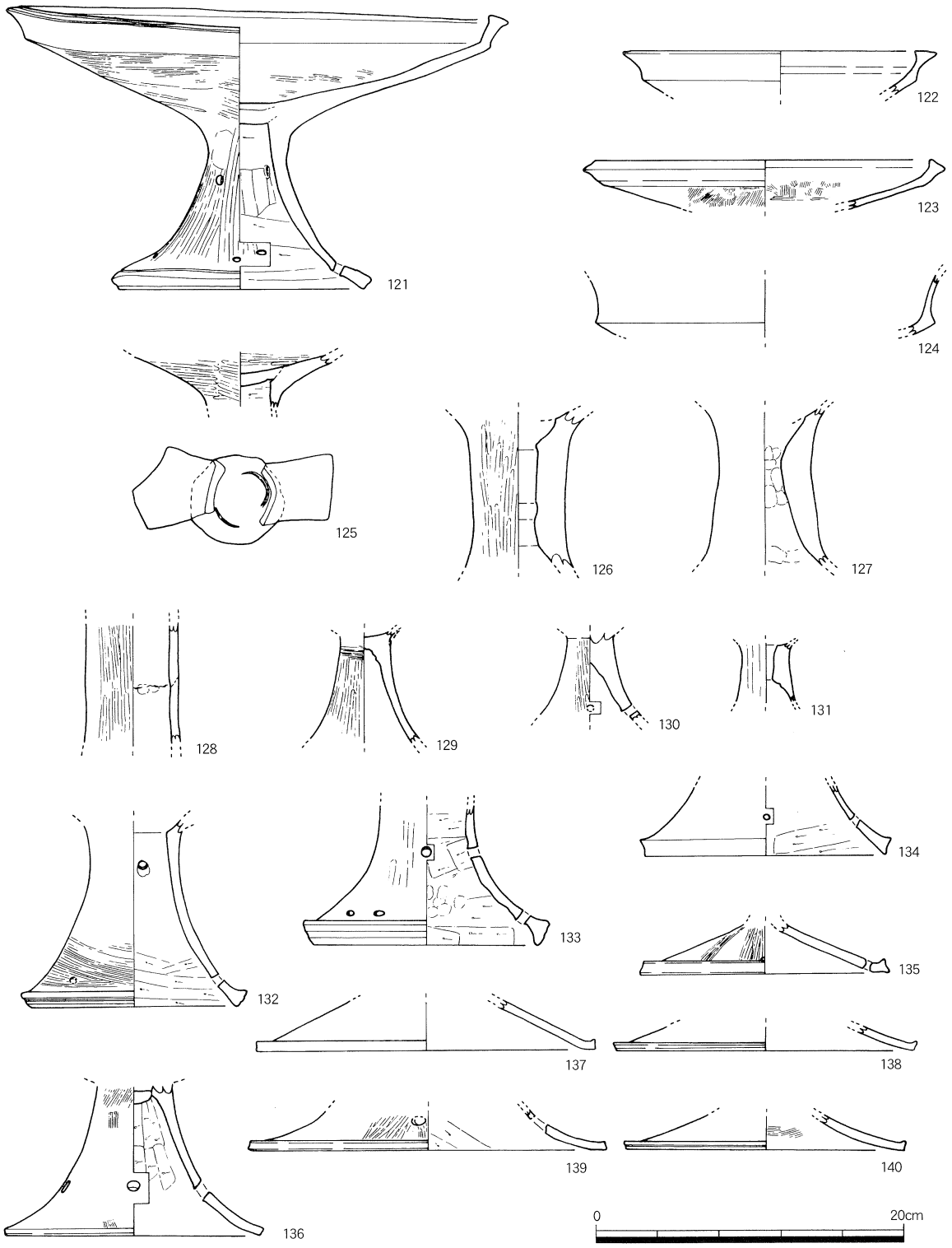


Fig.22　Ａ調査区ＳＥ２第２層中位出土遺物⑦（縮尺１／４）

は方形透孔の間に配置されるようである。上段の文様帯には鋸歯文が全周する。各区画にはそれぞれ1.5～2.5単位の鋸歯文が線刻される。この際長方形透孔と鋸歯文の外縁線との位置関係から，透孔の位置を基準に鋸歯文配置の設定がなされたと考えられる。ただ，各区画で鋸歯文の数が一致しないことからも稚拙な施文であるとの印象を受ける。鋸歯文の各単位内は斜線文・斜格子文・刺突文・無文などさまざまな文様が規則性なく充填される。下段の文様帯にも鋸歯文が全周する。下段は透孔によって分割されていないため，鋸歯文の配置に際しては下部の透孔と上段の透孔をもとに，上段と対応する位置に配置されたものと考えられる。鋸歯文の各単位内にはこちらも斜線文・斜格子文・不定形の線刻・刺突文が不規則に充填される。色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に角閃石をほとんど含まない。肉眼観察によると胎土中に結晶片岩が混和された可能性が高い。器形は本地域にも類例が認められるが，文様と胎土から搬入品である可能性が考えられる。

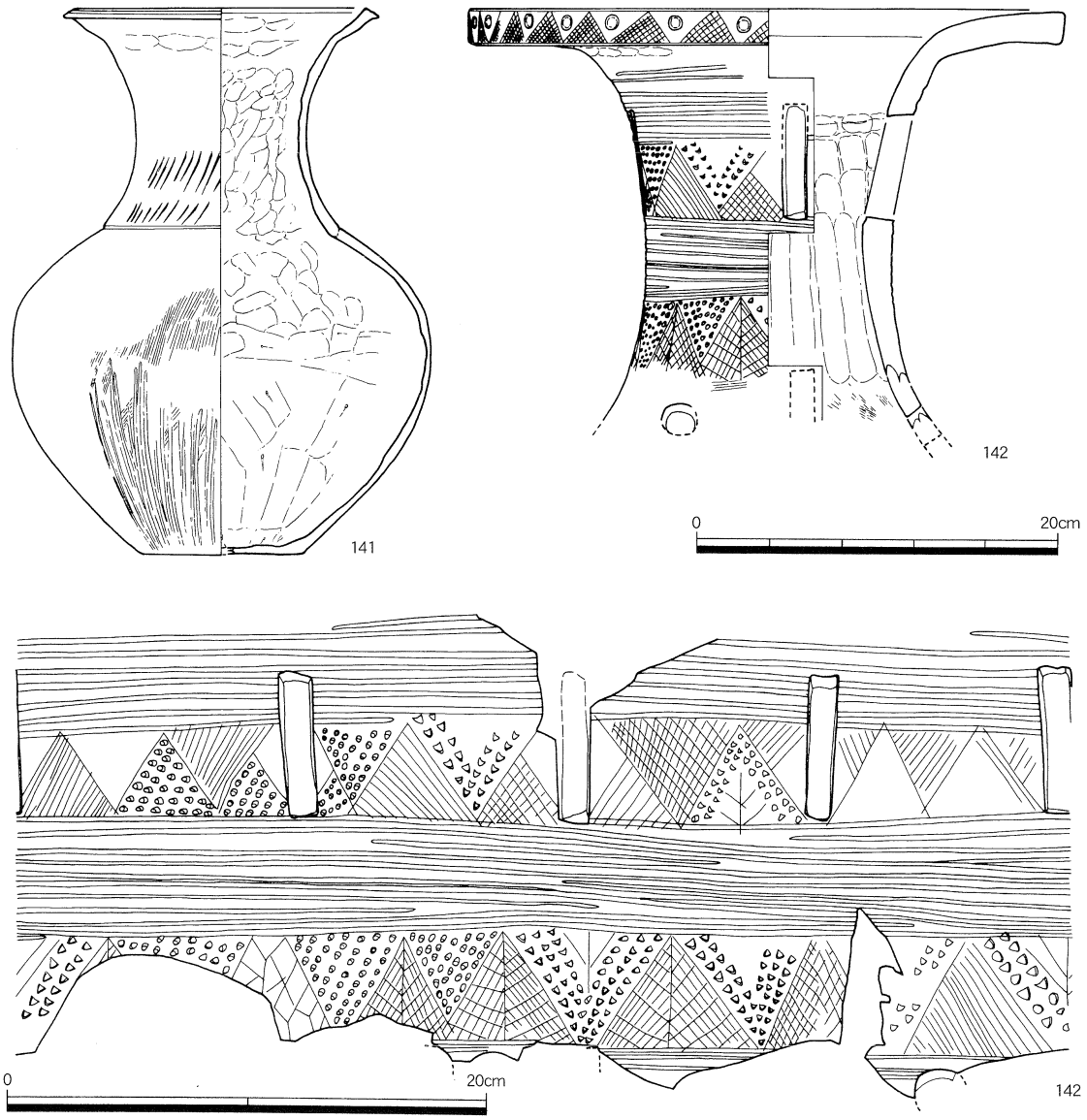


Fig.23　A調査区ＳＥ２第２層下位出土遺物（上段縮尺１／４，下段１／３）

検出面間接合（Fig.24）

ここでは上記の各検出面より出土した遺物のなかから，検出面間で接合関係の認められた資料について報告する。遺物出土状況で述べた通り，各検出面は出土層位の違いによる区分ではなく，あくまでも同一層中の，検出高による任意の区分である。

141 は第２層下位出土遺物で先述した壺である。縦に半裁されたような形状の半身が第２層下位から出土し，それに接合する破片が第２層上位と中位からそれぞれ確認できた。

143 ～ 155 は第２層上位と中位の間で接合関係の認められた資料である。143・144 は広口壺の口縁部である。143 は頸部からやや屈曲を変えて口縁部が伸びる。144 は緩やかに外反する頸部から口縁部に続く。148 は壺の体部である。体部中位に最大径をもち，胴張りの形状を呈す。外面の体部中位には櫛描列点文が巡る。145 ～ 147・149 ～ 153 は甕である。145 は口縁部が肩部から弱く屈曲し，短く折り曲げて仕上げる。胎土はにぶい黄橙色を呈し，角閃石を含まない。いわゆる白色系の胎土であり，搬入品の可能性が考えられる。146 は大型の甕である。口径は 20.4cm を測る。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し，端部はそのまま丸く収める。内外面共にハケ調整が多用され，特に内面では口縁端部付近までハケ調整が及ぶ。147・149 は口縁部が弱く屈曲し，短く外向する。端面は弱く肥厚し，痕跡的な弱い凹線を１条施す。150 は器厚が薄く，直立する頸部上の部位を持つ。口縁部は強く屈曲し，直線的に外向する。端部は上下に弱く肥厚し，端面に２条の凹線が巡る。151・152 は比較的長く厚い口縁部が若干内湾しつつ直線的に伸びる。内面は口頸部の屈曲までヘラケズリが及ぶ。胎土中には角閃石が含まれるが，口縁部形状から阿波地域の影響が考えられる。153 はやや直立する頸部上の部位をもち，口縁部が緩やかに外反する。端部は上方向に弱く肥厚し，痕跡的な凹線が１条認められる。体部外面には櫛描列点文が巡り，これを境に下にはヘラミガキ，上にはハケ調整が見られる。内面は体部下半にヘラケズリがおよぶ。154・155 は大型の鉢である。緩やかに外反する体部から直立する口縁部に続く。端部は肥厚せず，丸くおさめる。体部内面には赤色顔料の付着が確認され，分析の結果水銀朱であることが判明した。

層位不明（Fig.25）

〈壺〉（156）　頸部に斜線文，体部上半に竹管文がめぐる。口縁部外面および内面にも数条の凹線がめぐる。にぶい橙色を呈する胎土には角閃石が認められず，粒径の大きな白色粒の混入が目立つ。胎土から搬入品の可能性が考えられる。

〈甕〉（157 ～ 162）　157・158 は口頸部がやや弱く屈曲し，口縁部に続く。口縁端部は肥厚し，弱く上方に突出する。159 は口縁端部が下方に弱く突出する。にぶい褐色を呈する胎土には角閃石が認められない。胎土から搬入品の可能性がある。160 は口頸部の屈曲が強く，端部が肥厚し上方に強く突出する。端面には２条の凹線がめぐる。灰黄褐色の胎土には角閃石が認められず，搬入品の可能性が考えられる。

〈鉢〉（164）　小型の鉢である。口径 19.8cm を測る。口縁部はやや外反しながら丸く収まる。外面にハケ，内面にはヘラミガキが認められる。

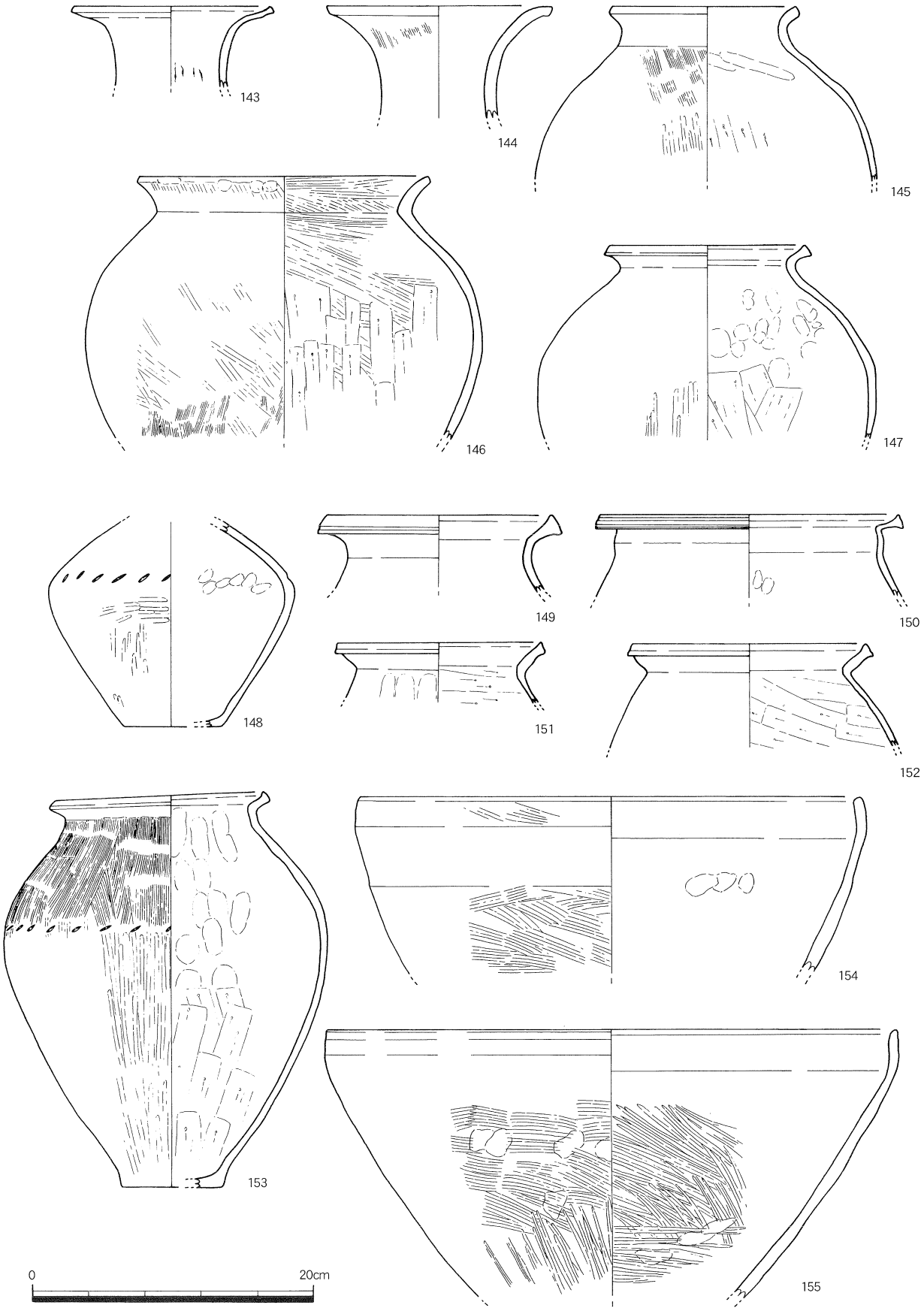


Fig.24　Ａ調査区ＳＥ２検出面間接合遺物（縮尺１／４）

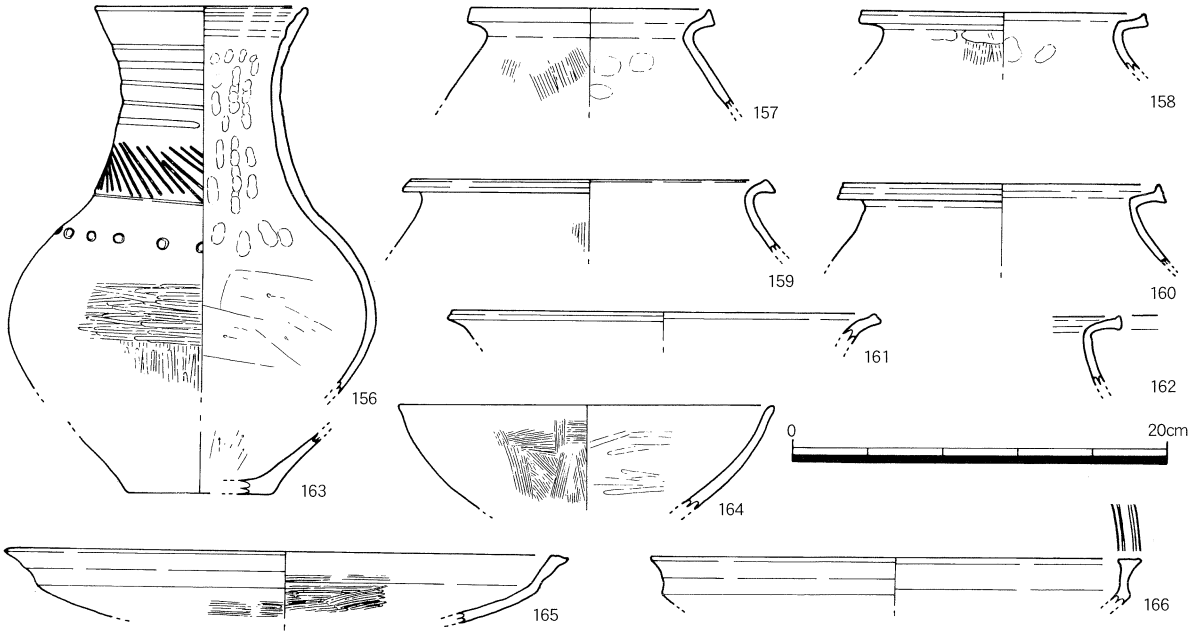


Fig.25　Ａ調査区ＳＥ２出土層位不明遺物（縮尺１／４）

〈高坏〉（165・166）　口縁部が肥厚し水平に伸びる高坏の口縁部である。165 は弱く外に肥厚する口縁部が弱く外傾する。166 は水平に肥厚する端面に２条の凹線がめぐる。

出土した土器から，これらの資料は一定の時期幅を含みながらも，比較的一括性の高い土器群であると評価できる。第２層上位と中位，また上位と下位から出土した資料同士が接合する例が少なからず認められる点からも本資料の一括性の高さが傍証されるであろう。

少数の時期幅をもつ資料を混入とみてよければ，遺構の時期は弥生時代後期前葉であると考えられる。

（４）自然河川 (Fig. 8)

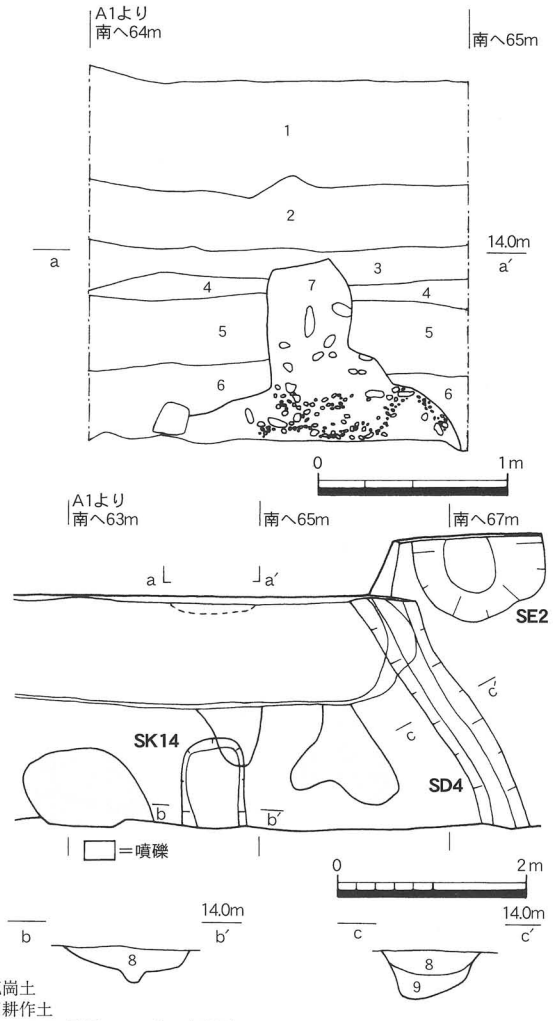
ＳＲ１　　Ａ１より南へ 34 ～ 66 ｍの地点で検出した河川跡である。湧水が非常に多量であり，調査中に壁が崩落し埋没してしまったために堆積状況については詳細な記録を残すことができなかった。東に向かい「ハ」の字状に広がり，調査区外へ伸びる。隣接して行われた香川県教育委員会による工事立会でも対応する位置で河川跡が検出されており（Fig. 4），連続するものと考えられる。遺物は１点も出土せず，所属時期は不明であるが，先述の県教委の検出した河川からは弥生時代後期初頭以前の遺物が検出されており，当河川の時期もそれに対応する可能性が高い。

（５）ピット (Fig. 8)

ＳＰ 11　　Ａ１より南へ 50 ｍの地点で検出した平面円形のピットである。第２遺構面を掘り込んで形成され，直径は 0.2 ｍを測る。埋土は黒褐色シルトで，土器片を１点検出した。土器は土師質の小片で，磨耗が著しく詳細は不明である。

（６）噴礫（Fig.26）

Ａ１より南へ66ｍの地点で，第２遺構面上に多数の円礫を含む層（７層）が面的に広がる地点を確認した。円礫は径５～10cm程度と比較的粒径が大きく，角のとれた川原石である。東壁断面図（Fig.26・PL. 9-3）を見ると，７層が３～６層を切って，垂直方向に堆積する様相が確認できる。また，７層中の礫の長辺が，水平方向でなく垂直方向に向いていることが確認できた。自然に礫がこのように堆積することは考え難く，地震の液状化現象に伴う噴礫である可能性が想定された。また，図化できていないが付近で断割り調査を行ったところ，第２遺構面下で同程度の粒径の礫を主体とする礫層が検出され，この層が円礫の供給源であると考えられた。以上の状況から，香川大学工学部准教授山中稔氏に現地でのサンプリング及び分析を依頼した。分析の詳細は第Ⅳ章第３節に詳しいが，結果をみると，弥生時代以降の内陸直下型地震による液状化で生じた噴脈・噴礫の痕跡であると推察された。高松平野では他にも松林遺跡，凹原遺跡，一角遺跡，西ハゼ土居遺跡などで同様の痕跡が検出されている。



1. 花崗土
2. 旧耕作土
3. 7.5YR3/2　黒褐　シルト～極細砂
4. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト～極細砂
5. 7.5Y4/1　灰色　シルトに2.5Y6/6明黄褐を斑上に10％含む
6. 2.5Y5/1　黄灰　シルトに2.5Y6/6明黄褐を斑上に20％含む
7. 10Y4/1　灰色　シルト～極細砂　T.P＝13.300より上では径10cm程度の礫を20％下では径2～5cm程度の礫を80％程度含む　長径が垂直方向に向く礫あり　噴礫
8. 10YR3/1　黒褐　シルト
9. 7.5YR6/1　褐灰　シルト～細砂

Fig.26　Ａ調査区噴礫およびＳＫ14・ＳＤ４平・断面図
（縮尺：平面1/80，断面1/40）

（７）小結

住居跡などは検出できなかったが，土坑や溝・井戸などを検出した。遺物の出土した遺構が少なく，時期別の変遷は不明瞭だが，ＳＥ２から弥生時代後期前葉の遺物が検出された。西に隣接して香川県教育委員会が行った工事立会では弥生時代後期初頭に属する竪穴住居の可能性がある遺構が検出されており（Fig. 4），本調査区周辺が弥生時代後期前葉に集落域として利用されたことが推定できる。また，調査区の北端付近では遺構の密度が低く，集落域の北端を反映する可能性がある。検出した溝は南西－北東方向にのびるものが多い。後述するがＢ調査区，Ｃ調査区では同方向にのびる自然河川跡を検出しており，付近の自然河川に沿った遺構の配置であると言える。また，自然化学分析によりＳＥ２周辺に水湿地の存在が推定されており，集落の中でも低湿地と，その周辺にあたる地区であると考えられる。

第４節　Ｂ調査区（Fig.27）

Ｂ調査区は幅 4.5 m，長さ 58 mで南北方向に設定した調査区である。調査区北端の現地表面は標高 15.0 m，南端では 15.1 mを測る。地表面下 0.3 ～ 0.5 mは花崗土に覆われ，その下に旧耕作土および床土を挟んで黒色系シルトからなる第１遺構面，さらに黄灰色系シルトからなる第２遺構面を検出した。調査区の北東部から南西端にわたって，調査区を斜めに縦断する範囲では花崗土が特に厚く認められた。断ち割り調査の結果，花崗土下で遺構面が削平されていることが明らかとなった。このため，花崗土を伴う著しい撹乱が及ぶ範囲を避け，遺構面の残存状況のよい範囲で遺構検出を行った。

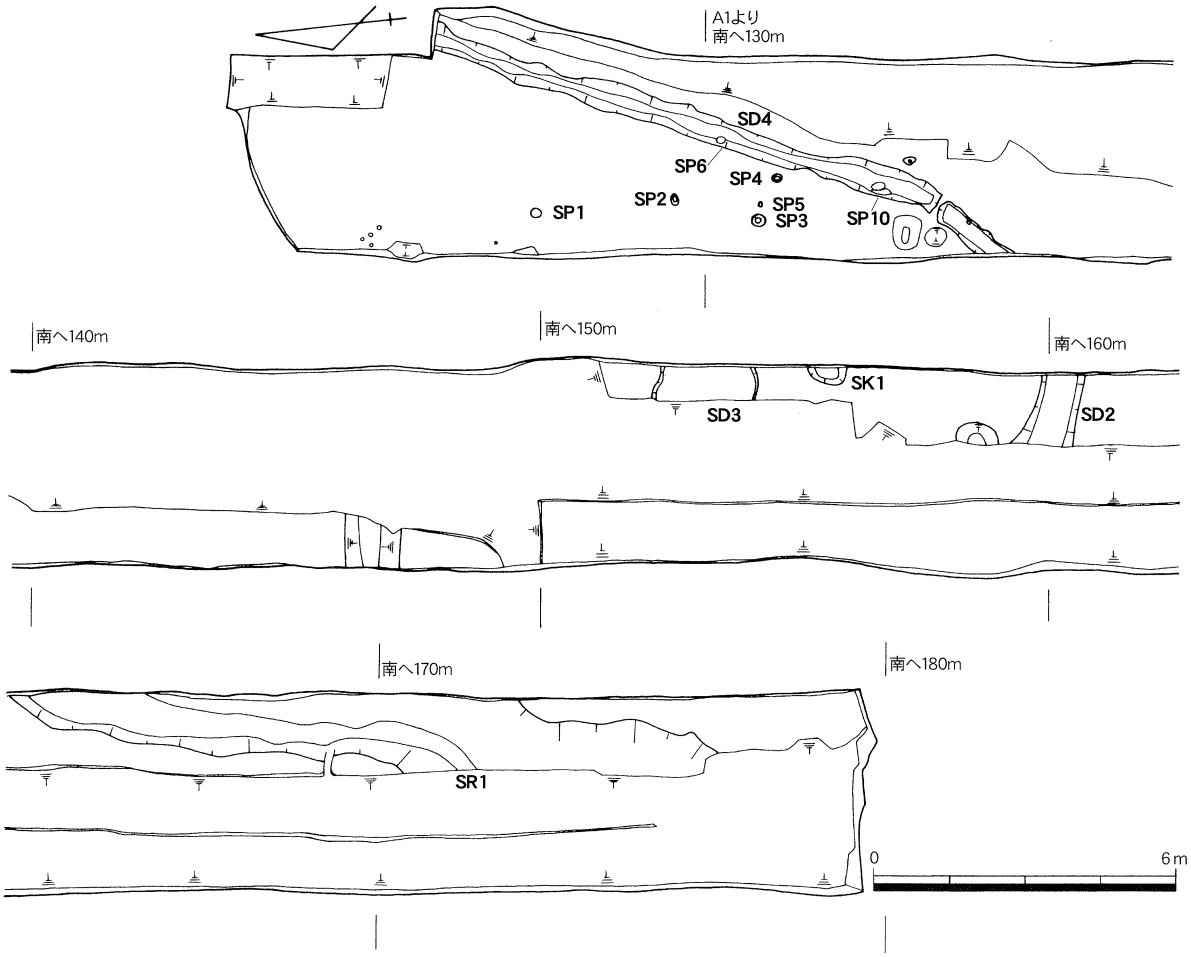


Fig.27 Ｂ調査区平面図（縮尺1/150）

（１）溝

ＳＤ２（Fig.27）　Ａ１より南へ 160 mの地点で検出した溝である。西半部は撹乱を受けており，規模などは不明である。残存した部分では東西方向に直線的に伸び，最大幅で 1.2 m，深さ 0.1 mを測る。埋土は黒色の砂混シルトである。第２遺構面を掘り込んで形成されているが，遺物が出土しておらず，詳細な時期は不明である。

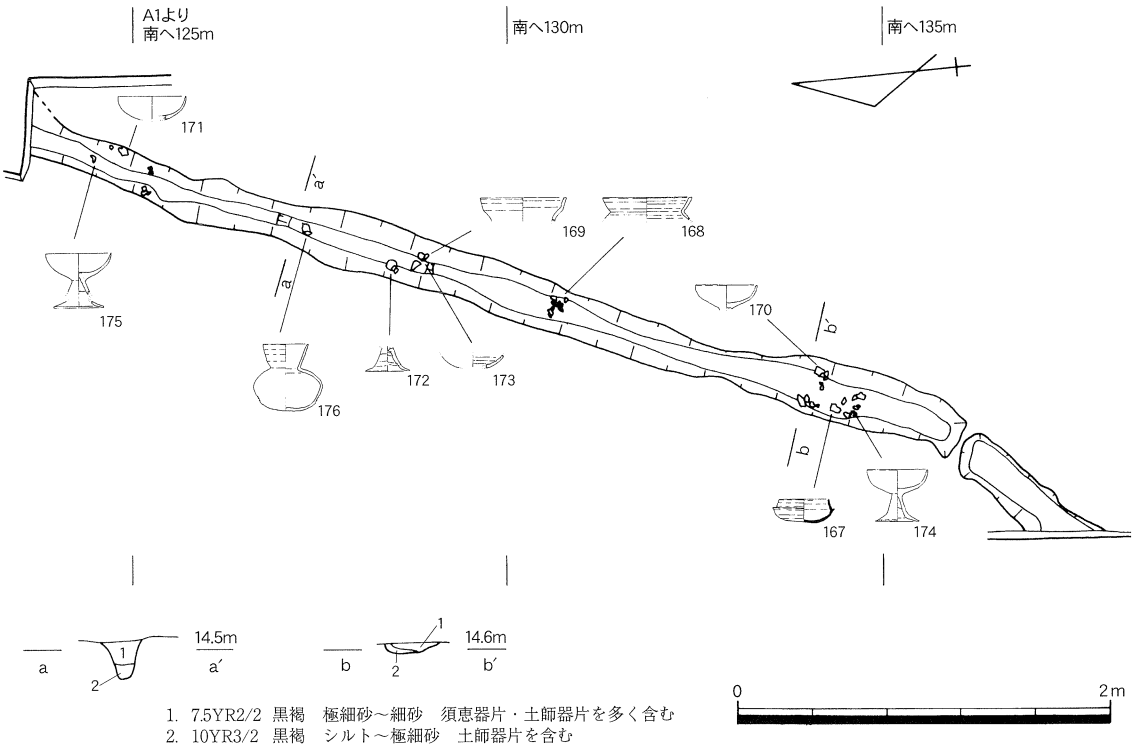


Fig.28　B調査区SD4平・断面図および遺物出土位置図（縮尺1/40）

SD4（Fig.28）　A1より南へ125～135mの地点で検出した溝である。西端付近でやや屈曲を変えるが，南西から北東方向に直線的にのび，両端が調査区外へ続く。幅は最大で0.6m，深さは0.4mを測る。第2遺構面を基盤とし，黒褐色のシルト～極細粒砂が堆積する。

167は須恵器の坏身である。口径10.6cm，器高5.0cmを測る。口縁部がやや内傾しながら立ち上がり，口縁端部には明瞭な段を有する。比較的底部は平坦で，ケズリが底部から体部下半の1/2程度の範囲に及ぶ。これらの特徴から陶邑編年のTK23～TK47型式期に相当すると考えられる。168は土師器甕の口縁部である。肩部からくの字に屈曲し，直線的に外向する。口径は19.6cmを測り，入念なヨコナデ調整が見られる。169は大型の土師器甕の口縁部である。口縁端部に平坦面をもつ。口縁端部から3cmほどは直線的にやや外向きに開き，強く屈曲する。屈曲部以下はゆるやかに内反し，頸部へ続く。170～175は土師器の高坏である。坏部は緩やかに内反する椀形を呈する。口径は170で12.9cm，171で14.4cm，174で13.0cm，175で14.0cmを測り，坏部の深さは170で3.9cm，171・174・175で4.0cmを測る。磨耗が激しく，調整は全体に不明瞭である。172～174に見られるように粘土紐の痕跡が明瞭に観察できる個体が目立つ。175の断面を見ると坏部と脚部の接合痕が観察できる。176は土師器の直口壺である。肩部から直線的に外向する口縁部と，横長楕円形を呈する体部を有する。内外面ともにナデで整形されている。口径9.4cm，器高13.4cmを測る。

出土土師器の大半は高坏である。ここでは片桐孝浩の論考を参考に編年的位置づけを行う（片桐2002）。本遺構出土高坏は坏部の形状から，椀形高坏で坏部に稜の無い，片桐分類B2類にあたる。また，組成がB2類のみで占められ，口径が12.9～14.0cmとやや小型で，坏部深が3.9

～ 4.0cm と浅いことから，片桐編年Ｖ期ないしⅥ期に比定できる。これは陶邑編年の TK23 型式期に相当するとされるため，共伴する 167 の型式とも齟齬がない。従って，本遺構の所属時期は陶邑編年の TK23 型式期に相当すると考えられる。

〈参考文献〉

片桐孝浩 2002「須恵器出現前後の土師器について」『樋端遺跡』 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 43 冊　香川県教育委員会ほか

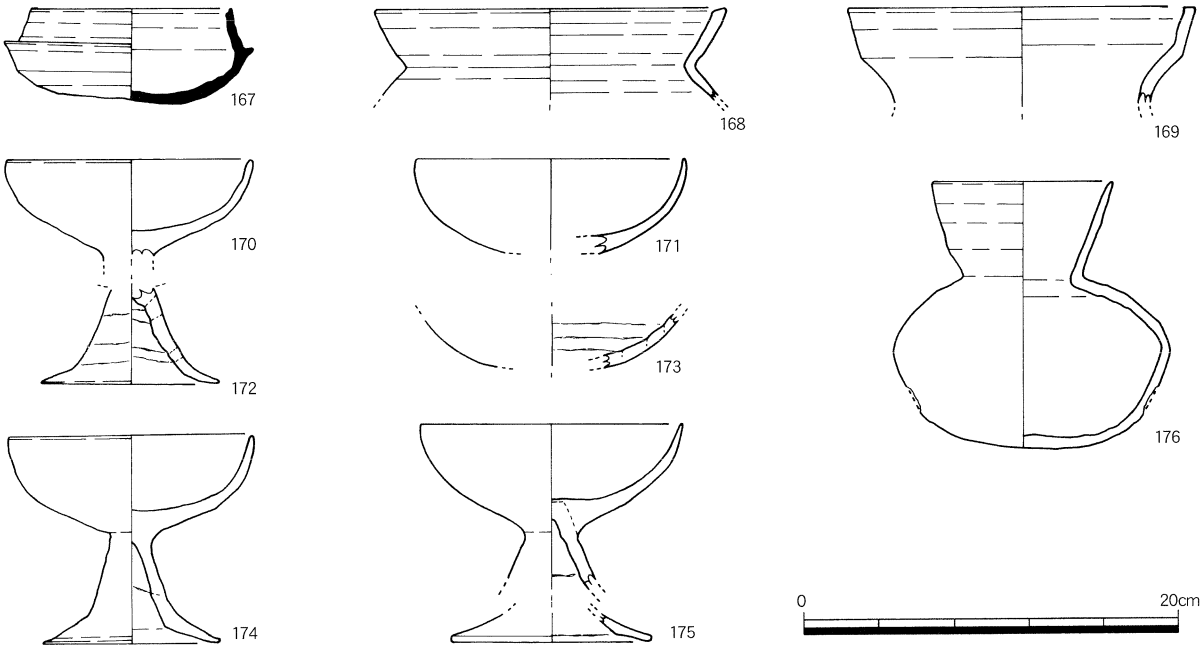
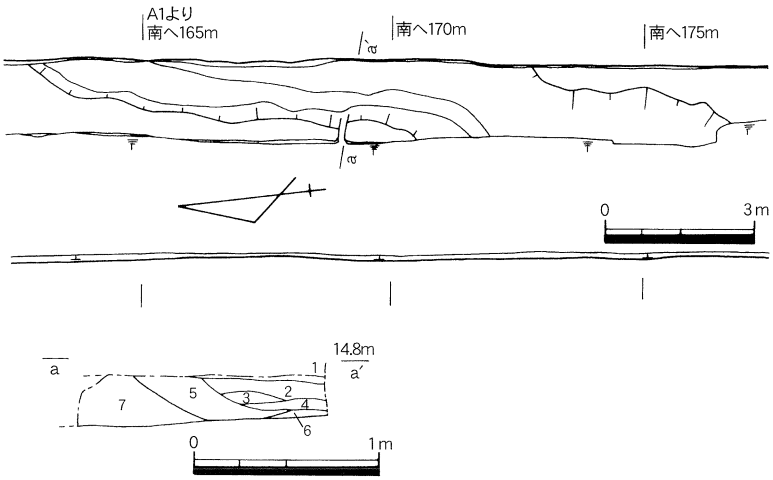


Fig.29　Ｂ調査区ＳＤ４出土遺物（縮尺１/４）

（２）自然河川

ＳＲ１（Fig.30）　Ａ１より南へ 162 ～ 177 ｍの地点で検出した自然河川である。東半は調査区外に続き，西半は現代の撹乱によって削平される。本来は南西－北東方向にのびていたものと考えられる。第２遺構面を基盤とし，黒褐～褐灰色のシルト層が互層をなし堆積する。出土遺物は認められず，所属時期は不明である。



1. 10YR2/2　黒褐　粘土～シルト
2. 10YR3/1　黒褐　シルト～極細砂に10YR7/6 明黄褐を10％含む
3. 10YR4/1　褐灰　粘土～シルト
4. 10YR3/3　暗褐　極細砂～細砂
5. 10YR3/1　黒褐　極細砂～細砂に7.5YR7/6 橙を10％含む
6. 2.5Y6/3　にぶい黄　シルト～極細砂に2.5Y7/6 明褐と3/1黒褐を斑状に30％ずつ含む
7. 2.5Y4/1　黄灰　細砂～中粒砂に10YR7/6 明黄褐を斑状に10％含む

Fig.30　Ｂ調査区ＳＲ１平・断面図（縮尺：上段１/150，下段１/40）

（3）ピット

ＳＰ１（Fig.27）　Ａ1より南へ126ｍの地点で検出した平面円形のピットである。第２遺構面を基盤に掘削され，長径は0.2ｍを測る。埋土は黒褐色シルトで炭化物を少量含む。埋土中より土師質の土器片を３点検出したが，いずれも磨耗が著しく，詳細は不明である。

ＳＰ３（Fig.27）　Ａ１より南へ132ｍの地点で検出した平面円形のピットである。直径は0.25ｍを測り，第２遺構面を基盤とし，底付近で径10cm程度の礫を複数検出した。遺物は土師質の土器の小片が１点出土しているが，磨耗が著しく詳細は不明である。

（4）小結

Ｂ調査区でも住居跡や掘立柱建物跡などの居住の痕跡は認められなかったが，北半において古墳時代中期（陶邑編年ＴＫ23型式期）の溝ＳＤ４を検出した。また南半ではＳＲ１が見られる。ＳＲ１の所属時期は不明だが，これらはＡ調査区で検出された自然河川跡や溝と同様，南西－北東方向にのびている。古墳時代中期には，自然地形に沿って溝が掘削され，機能していたものと考えられる。

第５節　Ｃ調査区（Fig.31）

Ｃ調査区は幅４ｍ，長さ88ｍで南北方向に設定した調査区である。現地表面は調査区北端で標高15.9ｍ，南端で16.9ｍを測る。基本層序は厚い花崗土の下に旧耕作土及び部分的に床土が認められ，その下に灰白色系シルトからなる層が堆積する。この層を基盤とする遺構が極少数だが認められたため，遺構面として理解した。ただし遺物は出土しておらず，時期は不明である。この下に黒褐色系シルトからなる第１遺構面が認められ，さらに下には黄灰色系シルトからなる第２遺構面が見られる点は他の調査区とも共通する。

現地では，Ｂ１から南へ24～34ｍの地点で，調査区東側に隣接して出水および水路が確認できる。水路はコンクリートで舗装され現在も水を湛えている。水路の舗装が調査予定区間内に及んだため，部分的に調査区を縮小して調査を行った。その結果，水路に隣接する区間は特に花崗土の堆積が厚く，地表面から２ｍ近くも花崗土に覆われていることが判明した。一部断ち割り調査を行ったところ，花崗土下では遺構面が削平されていることが分かったため，水路に隣接する部分を境に調査区を二つに分割することとした。また，花崗土で覆われた撹乱は調査区北半の大部分にも及んでおり，遺構面の削平が確認された。そのため，この範囲ではわずかに残った遺構面を検出し，遺構の確認を行ったが，遺構を確認することはできなかった。以下では調査区南半で検出した遺構について記述を行う。

（1）土坑

ＳＫ２（Fig.37）　Ｂ１から南へ76ｍの地点で，ＳＲ１Ａの底から検出した平面隅丸正方形の土坑である。一辺0.9ｍを測り，深さは0.1ｍと浅い。第２遺構面を基盤層としており，埋土には黒褐色シルトが堆積していた。遺物は出土していないが，切り合い関係からＳＲ１Ａに先行することが明らかなため，弥生時代後期後半以前の遺構であると考えられる。

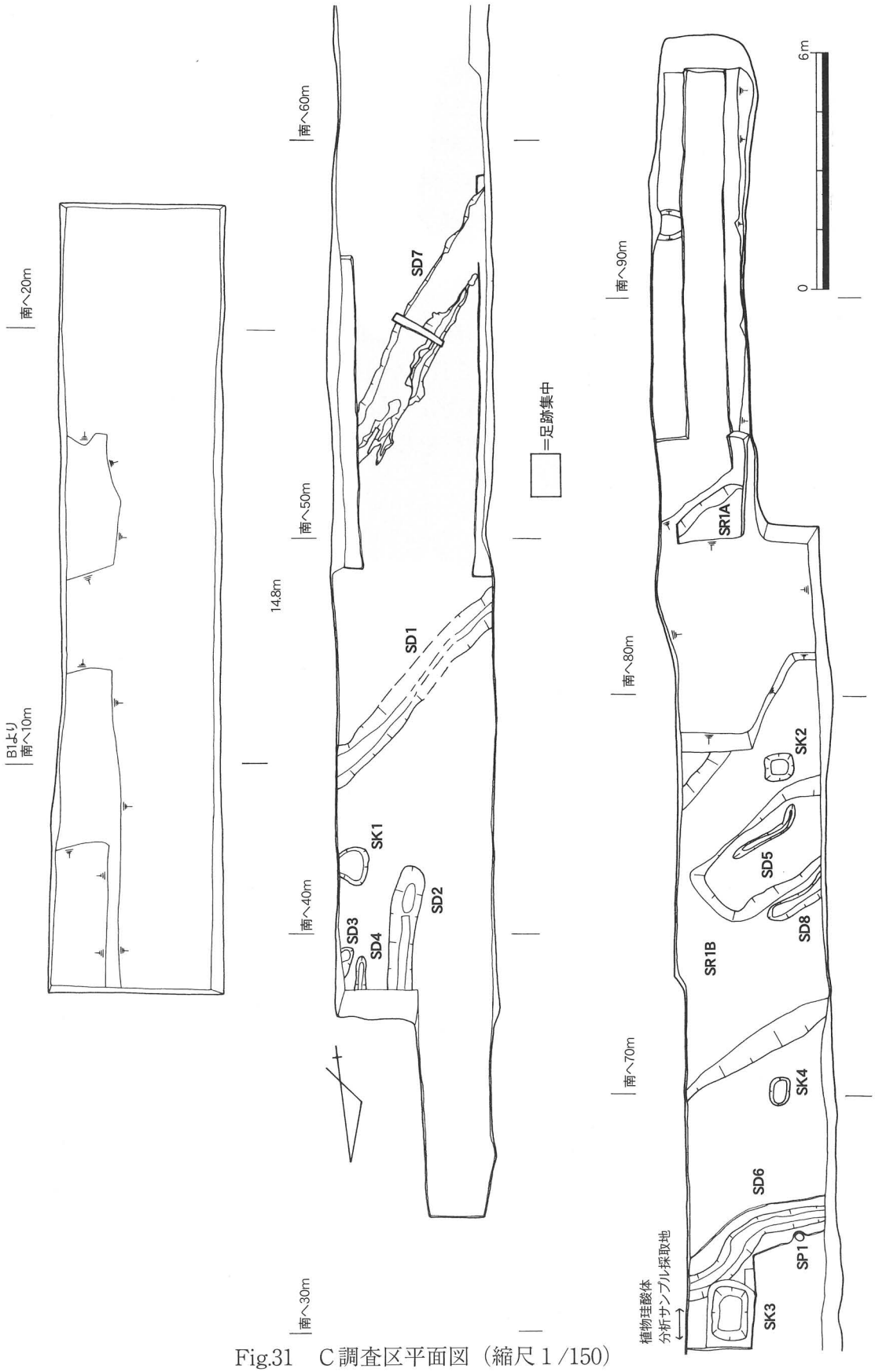


Fig.31　Ｃ調査区平面図（縮尺１/150）

ＳＫ３（Fig.32）　Ｂ１より南へ64ｍの地点で検出した平面長方形の土坑である。長辺1.3ｍ，深さ0.2ｍを測る。埋土は灰白色シルトである。遺物は埋土中より須恵器及び唐津焼と考えられる土器の小片が出土した。第１遺構面を掘り込んで形成されており，出土遺物から所属時期は近世の可能性が高い。

（２）溝

ＳＤ１（Fig.31）　Ｂ１から南へ45～49ｍの地点で検出した溝である。南西－北東方向へのび，両端は調査区外へ続く。最大幅は0.8ｍ，深さは0.4ｍを測る。灰黄色細粒砂層から土器片が数点出土したが，磨耗が激しく詳細は不明である。

ＳＤ２（Fig.33）　Ｂ１より南へ40ｍの地点で検出した溝である。南北方向にのび，北端は撹乱を受ける。幅は0.75ｍ，深さは0.35ｍを測る。第１遺構面を基盤とし，埋土は下層から順に黄灰色砂混シルト，褐灰色シルトが堆積していた。遺物は埋土中より須恵器片が一点出土しているが，磨耗が激しく，詳細は不明である。遺物から遺構の所属時期は古墳時代中期以降と考えられる。

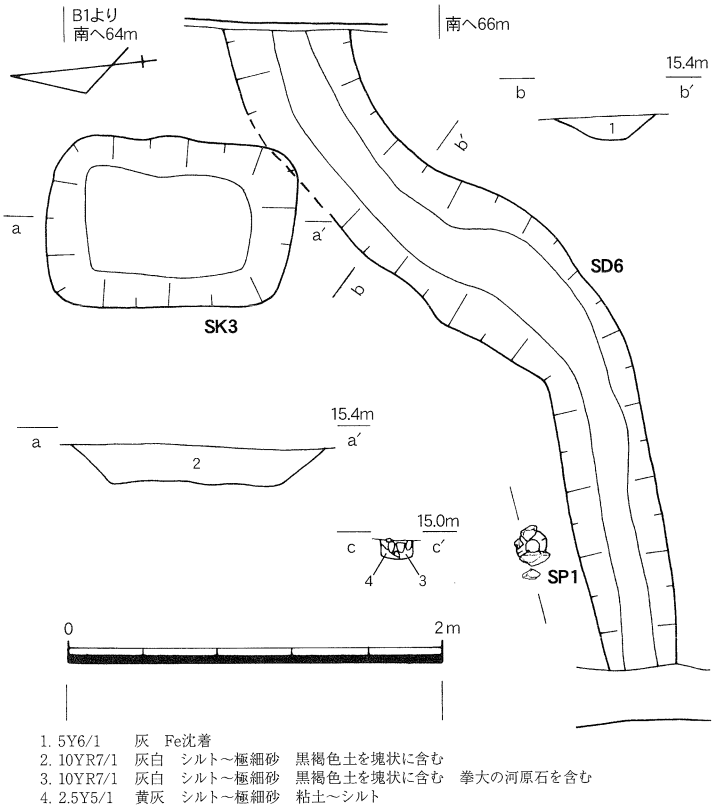


Fig.32　Ｃ調査区ＳＫ３・ＳＤ６・ＳＰ１平・断面図（縮尺１/40）

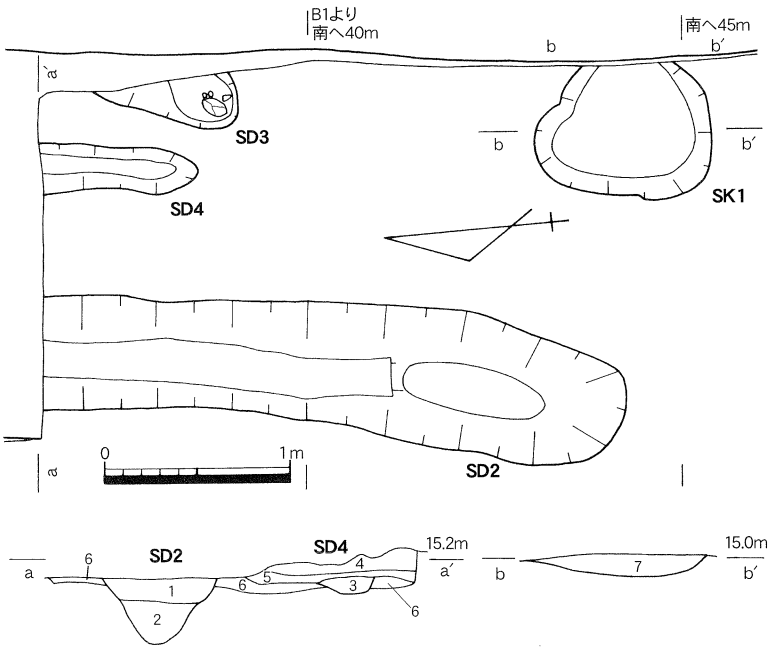
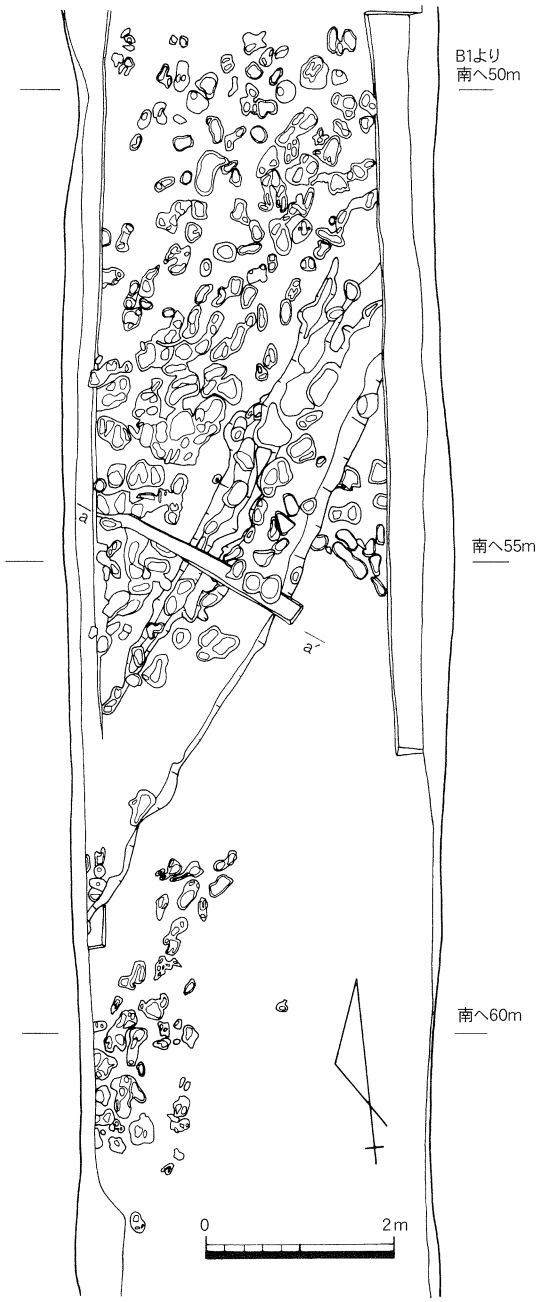


Fig.33　Ｃ調査区ＳＫ１・ＳＤ２～４平・断面図（縮尺１/40）

ＳＤ７および足跡（Fig.34）　ＳＤ７はＢ１から南へ52～59ｍの範囲で検出した溝跡である。南西－北東方向に直線的に伸び，両端が調査区外へ続く。検出範囲での最大幅は1.2ｍ，深さは0.15ｍを測る。埋土は黒褐色シルトで，第２遺構面を掘り込んで形成されている。遺物は土器片を検出している。177は器種不明土器の口縁部である。小片であり，時期は不明である。

また，ＳＤ７を挟んで南北13ｍほどの範囲で足跡の密集を検出した。第２遺構面を基盤とし，黒褐色シルトが堆積している。足跡同士が重複し，一つ一つが不明瞭になっていたが，比較的残存状況のよい部分では足の大きさや方向などを観察することができた。足跡は大きいもので長辺約30cm，幅約12cm，小さいものでは長辺約20cm，幅７～８cmを測る。泥中にめり込んだ足の痕跡であるので，本来の足の大きさは遺構の大きさよりも一回り小さかったものと考えられる。この想定が妥当であれば，ここで検出した足跡のうち，大きなものは大人，小さなものは子供の足跡である可能性が考えられる。また，足跡はＳＤ７の底から検出したものも含めて，ほぼ全ての長辺がＳＤ７に平行する。ＳＤ７が機能していた時期に，溝に平行して当時の人々が移動したことが推測される。足跡より遺物は出土しなかったが，同じ基盤層と埋土であるため，ＳＤ７と同時期であると考えられる。

ＳＤ８（Fig.37）　Ｂ１より南へ75ｍの地点で後述するＳＲ１Ｂの底から検出した溝である。南西－北東方向に伸び，南西端は調査区外へ続く。検出した範囲での最大幅は0.45ｍを測る。埋土は黒褐色極細粒砂～細粒砂であり，第２遺構面を掘り込んで形



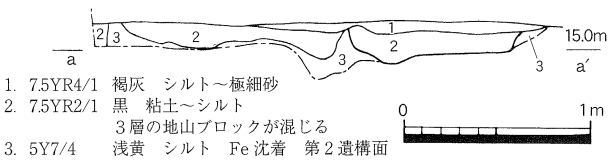


Fig.34　Ｃ調査区ＳＤ７および足跡平・断面図
（縮尺：上段1/80，下段1/40）

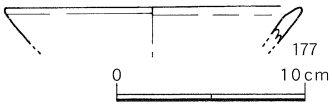


Fig.35　ＳＤ７出土遺物（縮尺1/4）

成される。ＳＲ１Ｂの埋没とともにＳＲ１Ａの下層に埋もれたものと考えられる。遺物は出土していないが，上記の堆積状況よりＳＲ１Ａの堆積に先行する時期が想定できる。

ＳＤ５（Fig.37）　Ｂ１より南へ76ｍの地点で，後述するＳＲ１Ａの底より検出した溝である。南西－北東方向に直線的に伸び，長さ2.0ｍ，幅0.2ｍ，深さ0.12ｍを測る。第２遺構面を基盤に形成され，埋土は灰色の細粒砂である。ＳＲ１Ｂと同時期に機能し，第１遺構面の堆積により埋没したものと考えられる。遺物は出土していないが，遺構の切りあいから時期は弥生時代後期後半以前であると考えられる。

ＳＤ６（Fig.32）　Ｂ１より南へ65ｍの地点で検出した溝である。西から東へ向かって直線的にのび，中央で傾斜を変え，北東方向へと続く。両端が調査区外へ続くために全長は不明である。幅は最大で0.8ｍ，深さは0.15ｍを測る。埋土は灰黄褐色の細粒砂であり，埋土中よりタタキ目を持つ弥生土器片とサヌカイトの剥片を検出した。

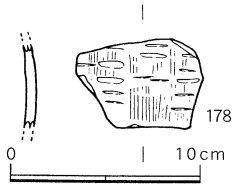


Fig.36　ＳＤ６出土土器（縮尺1/4）

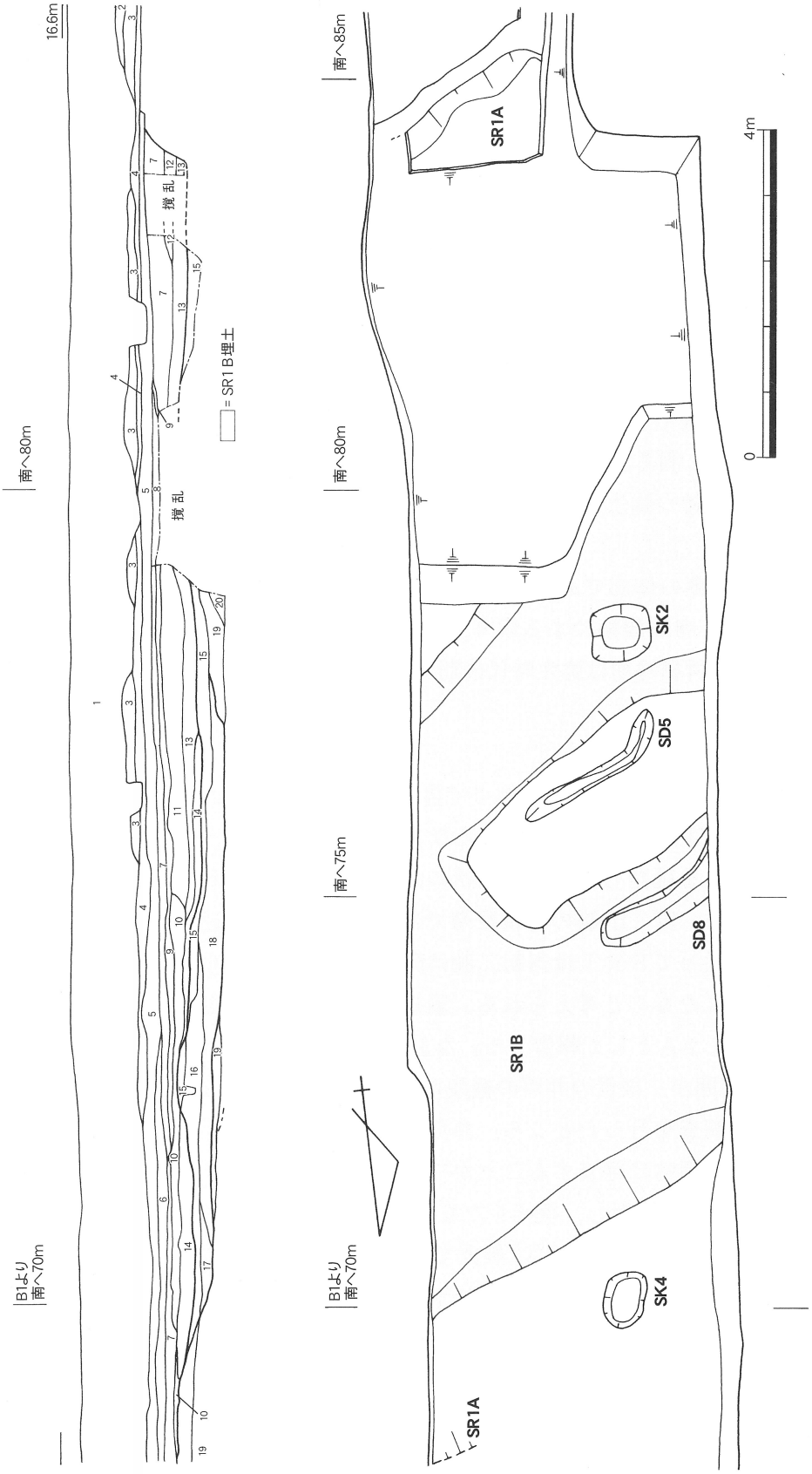
178は弥生土器片である。甕の体部であろう。外面には明瞭なタタキの痕跡が認められる。肉眼観察による限り，胎土中には多量の角閃石が含まれており，在地産の土器と推定できる。所属時期は弥生時代後期である可能性が考えられる。

（３）自然河川

ＳＲ１　（Fig.37）　Ｂ１より南へ69～84ｍの地点で自然河川跡を検出した。調査時は堆積状況から単一の自然河川であると考えていたが，最下層の17・18層を除去中，遺構の中央西寄りで基盤層が島状に高くなる地点を確認した。この島状の高まりとその周辺から先述のＳＫ２，ＳＤ５・８などを検出したため，17・18層の堆積段階では島状の高まり付近が陸地として機能していたことが推測される。従ってＳＲ１は当初二股に分岐して流れており，その後の堆積作用により幅広の河川に集約されたものと考えられる。重複し，連続する河川であるが，以下では前者をＳＲ１Ｂ，後者をＳＲ１Ａとして報告する。なお，Ｂ１より南へ79ｍの地点から，同様に南へ86ｍの地点までの範囲が，後世の井戸の掘削及び井戸の廃絶に伴う現代の撹乱を受けていた。この地点で断ち割り調査を行ったところ，井戸より多量の水が沸き出で，調査の続行が困難となったため，遺構を平面的に精査することができなかった。従って本書で報告するＳＲ１Ａの範囲は調査後に断面図より判断し，復元したものである。

ＳＲ１Ａは概ね南西－北東方向にのび，幅は最大で13ｍを測る。ＳＲ１Ｂの堆積後に重複して機能した自然河川であるが，ＳＲ１Ｂに比べて幅が広くなり，堆積時に先述の島状の高まり及びＳＫ２，ＳＤ５・８などが埋没していることから，ＳＲ１Ｂの埋没とＳＲ１Ａの堆積開始時の間で流量の増加が生じていたものと考えられる。

ＳＲ１ＢはＳＲ１Ａの下層で検出した河川跡である。Ｂ１より南へ70ｍの地点から，同様に南へ77ｍの地点までの範囲で確認した。調査区東側から西側へ向かって二股に分岐し，それぞれが南西－北東方向に直線的に伸び，両端は調査区外へ続く。埋土を見ると，第２遺構面であ



1. 花崗土　2. 2.5Y5/1 黄灰色　シルト～細砂　炭化材を含む　3. 5Y6/1 灰色　シルト～極細砂　4. 2.5Y8/2 灰白色　シルト～極細砂　5. 2.5Y7/1 灰白色　シルト～極細砂　Feが多量に沈着　礫、小石を多量に含む　6. 7.5YR5/1 褐灰　シルト　7. 10YR5/1 褐灰色　シルト～極細砂土器を含む　8. 10YR3/2 黒褐　極細砂～細砂　径５～10cmの礫を30%含む　9. 7.5YR2/1 黒色　極細砂　遺物、礫を少量含む　10. 5Y3/1 オリーブ黒　シルト～極細砂　11. 2.5Y4/2 暗灰褐　シルト～極細砂　12. 5Y7/1 灰白色　細砂　13. 10YR3/2 黒褐　シルト～極細砂　土器片少量　14. 5YR3/1 黒褐　シルト　15. 2.5Y5/3 黄褐　粗砂～細砂　土器片少量　16. 2.5Y3/1 黒褐色　シルト　17. 5YR3/1 黒褐　シルト　18. 2.5Y4/4 オリーブ褐　極粗砂～粗砂　径10cm以下の礫を50%程度含む大きな土器片、木材片を多量に含む　19. 5YR4/2 灰褐　粘土　20. N7/ 灰白色　シルト～極細砂

※8・・・撹乱上層　7・9～14層・・・SR1A堆積層　17・18層・・・SR1B堆積層　19・20層・・・第２遺構面

Fig.37　Ｃ調査区ＳＲ１Ａ・１Ｂ平・断面図（縮尺1/80）

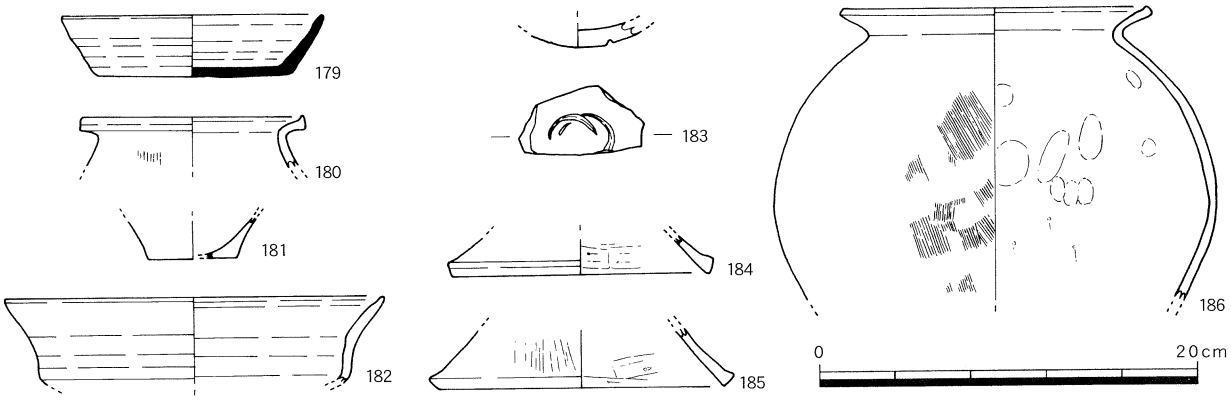


Fig.38　C調査区ＳＲ１上層出土遺物（縮尺１／４）

るにぶい黄褐色シルト層を基盤とし，オリーブ褐色礫混極細粒砂～細粒砂，黒褐色シルトが互層となり川底に堆積していた。川底からは長辺が10cmを超える比較的大きな土器片や木材片を礫に混じって多数検出した。

遺物であるが，調査当初二つの河川の存在を認識して遺物を取り上げることが出来なかったため，ＳＲ１ＡとＳＲ１Ｂの遺物を明確に区分して報告することができない。ここでは調査時にＳＲ１上層，ＳＲ１下層，層位不明としてとりあげた記録に従い，遺物の報告を行いたい。層位と遺構とが明確な対応関係にないが，概ねＳＲ１上層出土遺物は７・９～14層，ＳＲ１下層出土遺物は17・18層に対応する可能性が高いものと考えられる。

ＳＲ１上層出土遺物（Fig.38）　179は須恵器の坏である。口径13.8cm，器高3.2cmを測る。回転ナデで調整され，底部切り離し技法はヘラオコシである。180は弥生土器甕の口縁部である。181は弥生土器甕の底部である。182は高坏の口縁部である。大型で長い口縁部がゆるやかに外反する。183は高坏の坏底部であると考えられる。底面の２条の線刻は脚部との接合部を示すものであろう。184・185は高坏の脚部である。186は土師器甕である。口頸部がくの字に屈曲し，短い口縁部が直線的に伸びる。体部は球形に近い形状を呈す。

ＳＲ１下層出土遺物（Fig.39・40）　187～193は弥生土器広口壺である。188・189・191～193は口縁端部に１～２条の凹線をめぐらせる。190は形状から甕の口縁部の可能性も考えられる。193は端部が肥厚して上下方に突出し，広い端面を作り出す。194～196は弥生土器長頸壺である。194は肩部に明瞭な段を有するが，195には認められない。196は頸部外面に弱い凹線が１条めぐる。197～205は弥生土器甕である。197は器厚が厚く，太く直立する頸部に短い口縁部がつく。198～202は薄く直線的な口縁部が強く外向する。口縁端部の肥厚はほとんど認められない。206～215は底部である。210・211・213は器壁が厚く，丸底に近い形状を呈す。216～222は弥生土器高坏である。216～219は口縁端部があまり肥厚せず，端面にナデによる明瞭な段を有する。218・219は内面に水平ヘラミガキが及ぶ。220は坏部である。内外面ともに分割ヘラミガキが施される。221は脚部である。坏部を接合した際の粘土の補充痕が観察できる。222は脚端部である。端部には痕跡的な凹線がみられる。

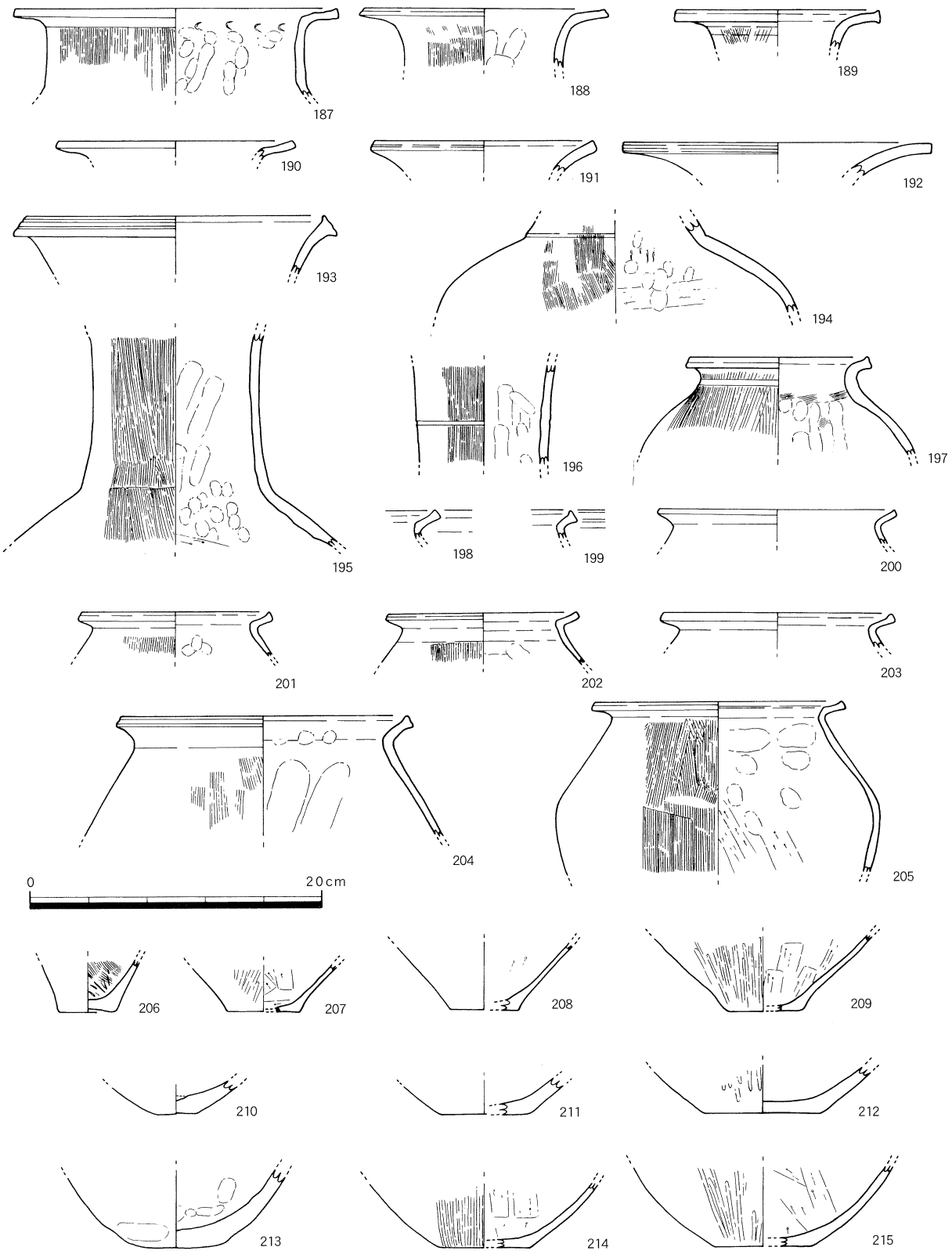


Fig.39　Ｃ調査区ＳＲ１下層出土遺物①（縮尺１/4）

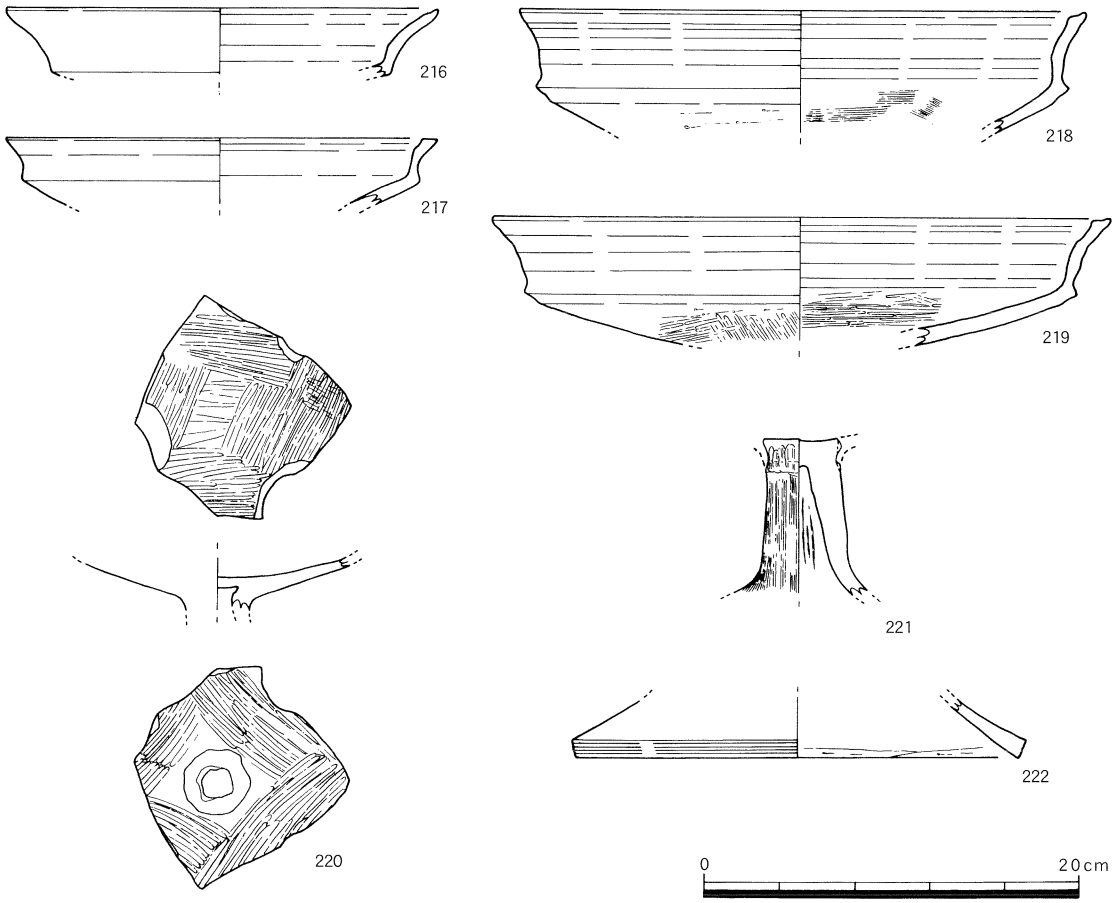


Fig.40　C調査区ＳＲ１下層出土遺物②（縮尺１/4）

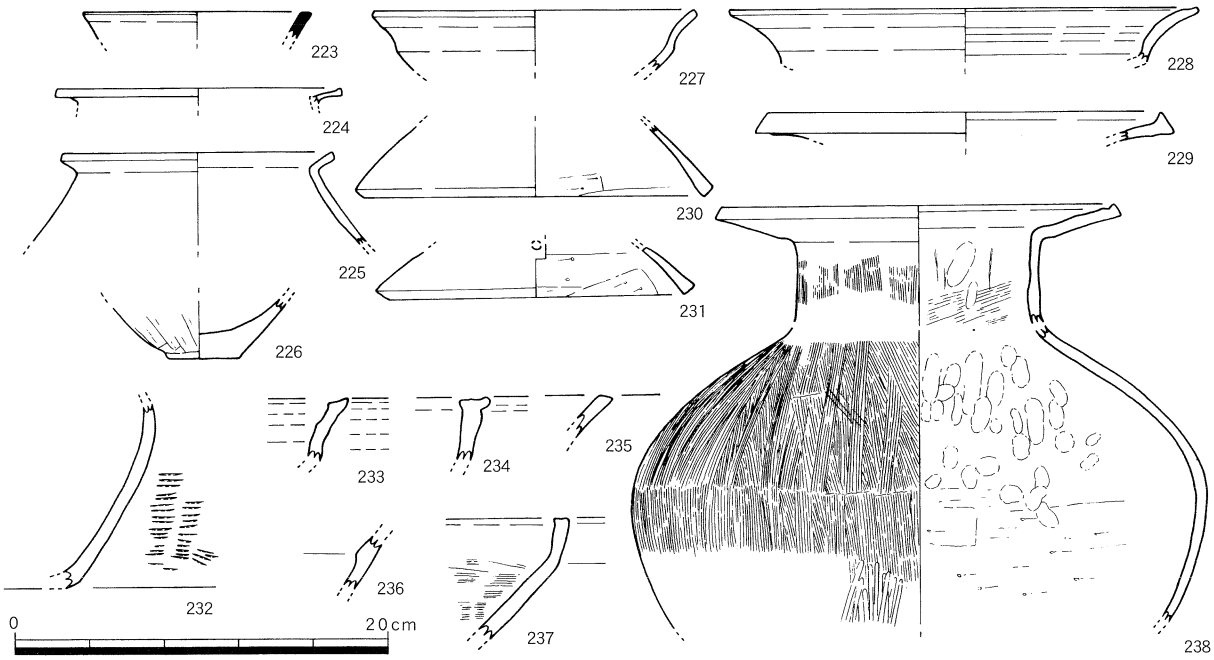


Fig.41　C調査区ＳＲ１出土層位不明遺物（縮尺１/4）

層位不明遺物（Fig.41）　223は須恵器である。椀の口縁部の可能性が考えられる。224・225は弥生土器甕の口縁部である。225は口頸部がくの字に開く。226は底部である。228は弥生土器高坏である。大型で口縁部が強く外反する。229は弥生土器壺の口縁部と考えられる。230・231は高坏の脚部である。ゆるやかに外反し内面にはヘラケズリが見られる。232は壺・甕の体部である。外面にタタキ痕が認められる。233は弥生土器高坏の口縁部である。234は鉢の口縁部であると考えられる。235・236は器種不明である。土師質に焼成されている。237は弥生土器鉢である。口縁部が直立し，明瞭な端面を作り出されている。238は弥生土器広口壺である。頸部が直立し，口縁部が平行に強く屈曲する。体部は胴の張った形状で，内面下半までヘラケズリが及ぶ。

出土土器の型式から，ＳＲ１下層の堆積は弥生時代後期後半に始まり，その中で終わるものと考えられる。ＳＲ１上層は223から上限が古代に下る可能性が考えられるが，１点のみの出土であるため，混入の可能性が高い。中心となる時期は弥生時代後期後半である。ＳＲ１Ａおよび１Ｂが極めて短期間に埋没したことが伺われる。

（４）ピット

ＳＰ１（Fig.32）　Ｂ１より南へ66ｍの地点で検出した平面円形のピットである。直径は0.2ｍ，深さは0.2ｍを測る。埋土は灰白色シルトからなり，径10cm程度の礫を多量に含む。遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明である。

（５）小結

本調査区でも住居跡や水田跡など，居住の痕跡を確認することはできなかったが，溝や土坑に加え幅の広い自然河川跡を検出した。遺物の出土した遺構が限られるため，詳細な時期比定は困難であるが，自然河川跡及び溝は他の調査区と同様，おおむね南西－北東方向にのびており，自然河川に沿った地形利用が伺える。特にＳＤ７では溝に沿って多数の足跡を検出した。これは直接的に当時の人々の生体的行動を示すものであり，自然地形に合わせた土地利用と人々の活動を伺うことができる。また，ＳＲ１出土土器より，弥生時代後期後半には本調査区周辺に土器の供給源となる集落域が営まれていたことが推測できる。それ以降の遺構・遺物がほとんど検出されていないため，ＳＲ１の埋没と共に本調査区周辺は居住域として利用されなくなった可能性が考えられる。

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　　高松市太田下・須川遺跡出土土器に付着した赤色顔料の蛍光Ｘ線分析

徳島県立博物館　魚島純一

香川県高松市所在の太田下・須川遺跡から出土した土器に付着した赤色顔料の同定を目的とした蛍光Ｘ線分析を行ったのでその結果を報告する。

１．試料

太田下・須川遺跡出土　土器片　　17 点

分析した土器片 17 点は，いずれも，内面，外面，あるいは内外面に赤色顔料の付着が確認できるもの，または赤色顔料が付着していると思われるものである。器種は，高坏，器台，壷，甕，鉢，把手付広片口皿などさまざまである。

２．方法

蛍光Ｘ線分析装置を使って非破壊定性分析を行い，試料に含まれる元素の種類を調べ，用いられた赤色顔料を推測することとした。

分析には徳島県立博物館に設置されたテクノス製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 TREX630L を用いた。

測定の条件はつぎのとおり。

Ｘ　線　管	：	Mo	Ｘ線管電圧	：	50kV
Ｘ線管電流	：	0.2m A	検　出　器	：	Si（Li）
分 析 範 囲	：	直径 2mm	測 定 時 間	：	100 秒
測定雰囲気	：	大気			

３．結果と考察

遺物番号 31，45，100，119，154，155，239，240 および 243 からは Hg（水銀）が検出された。これらの土器片に付着した赤色顔料は辰砂（水銀朱，HgS）であると考えられる。いずれも，内面に赤色顔料の付着があるもので，肉眼でもはっきりとその存在が確認できる状態である。遺物番号 31 および 243 の分析結果を Fig.42・43 に示す。遺物番号 45，100，119，154，155，239 および 240 もほぼ同様の結果を示した。

一方，その他の試料においては，Hg（水銀）が検出されなかった。付着した赤色顔料は辰砂以外の赤色顔料，おそらく鉄（Fe）を主成分とするベンガラであると考えられる。遺物番号 139 の分析結果を Fig.44 に示す。遺物番号 139 以外の 10，90，121，132，135，142 も同様の結果を示した。

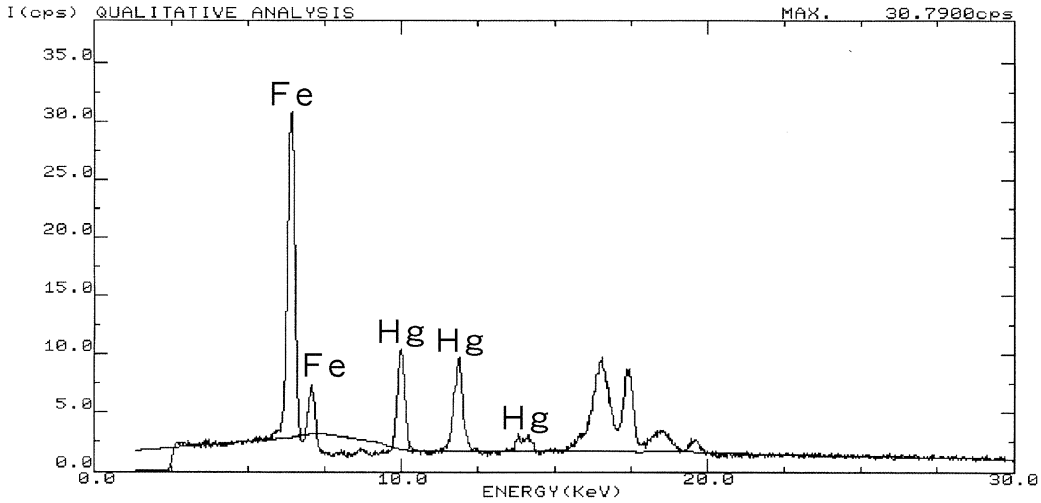


Fig.42　蛍光Ｘ線分析結果の一例（遺物番号 31）

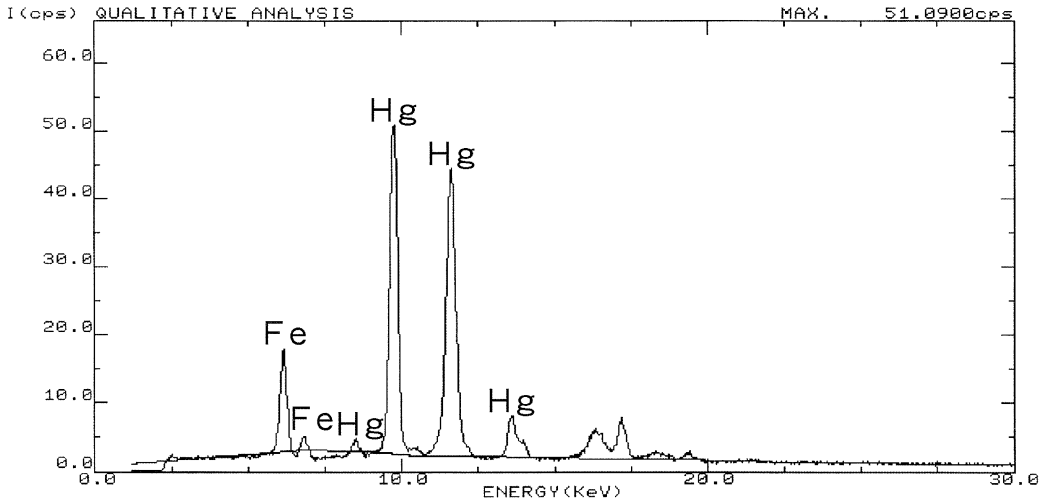


Fig.43　蛍光Ｘ線分析結果の一例（遺物番号 243）

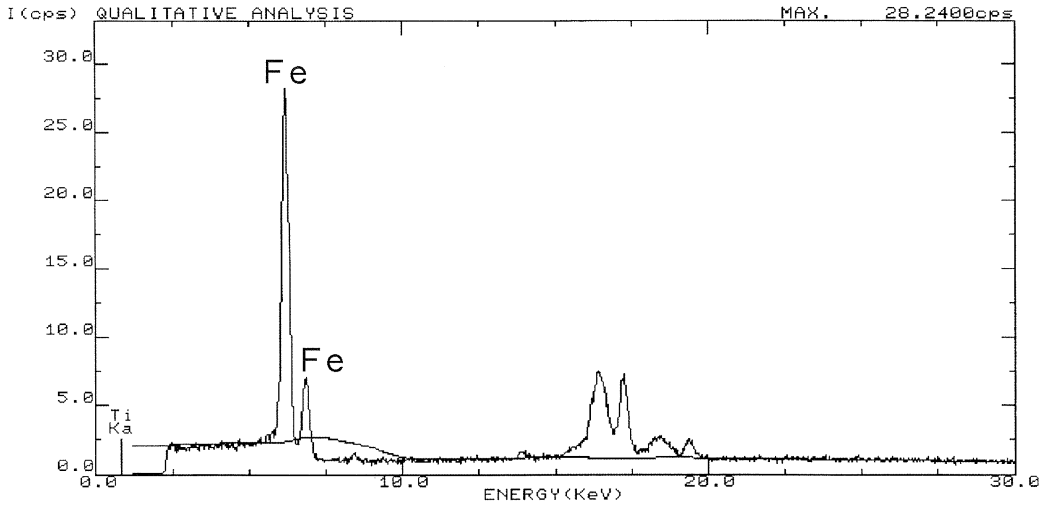


Fig.44　蛍光Ｘ線分析結果の一例（遺物番号 139）

第２節　太田下・須川遺跡における植物珪酸体（プラントオパール）分析及び微細物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
馬場健司・松元美由紀

はじめに

今回の分析調査では，Ｃ調査区における土地利用状況に関する情報を得ることを目的として，調査区の堆積断面より採取された堆積物について，植物珪酸体分析を実施する。また，Ａ調査区の弥生時代後期前葉の井戸ＳＥ２から出土した完形土器内の内容物に関する情報を得ることを目的として，土器内堆積物について水洗選別法による微細物分析を実施する。以下に調査目的別に結果について報告する。

１　Ｃ調査区の植物珪酸体分析

１－１．試料

調査地点が位置するＣ調査区（Fig31）の堆積層の累重状況を模式柱状図としてFig.45に示す。調査地点の堆積層は，発掘調査時の所見によると，５層より下位堆積物が弥生時代後期～古墳時代中期の遺構検出面とされる。

植物珪酸体用試料は，３層・４層・５層・６層から採取された４点である。３層（試料１）は砂質シルトからなり，近・現代の床土と考えられる。４層（試料２）は褐灰色シルトからなり，古墳時代中期以降の堆積土とされる。５層（試料３）は黒褐色を呈する腐植質シルトからなる。５層からは弥生時代後期～古墳時代中期の遺構が多数検出されている。５層の直上には場所によって氾濫堆積物と判断される細粒砂～極細粒砂を挟在する。６層（試料４）は側方級化するシルト～極細砂からなる。

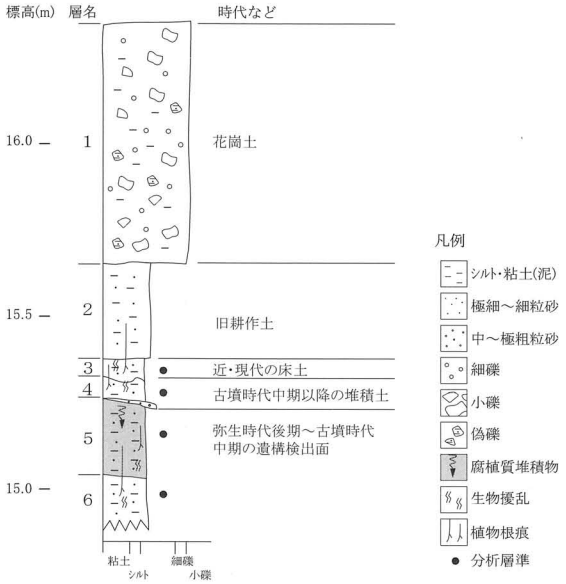


Fig.45　調査地点の堆積層の類重状況

１―２．方法

分析試料の乾燥重量を秤量後，過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下，短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ)を，近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には，分析試料の乾燥重量，プレパラート作成に用いた分析残渣量，検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し，堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算) を求める。

結果は，植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際，100 個 /g 以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする) る。また，各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から古植生や栽培植物について検討するために，植物珪酸体含量を図示する。

１－３．結果

結果を Tab.4，Fig.46 に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの，全般に保存状態が悪く，表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。

植物珪酸体含量は，層位的に変化し，最下位の６層（試料４）で 88,500 個 /g の含量を示し，５層（試料３）で増加し，101,200 個 /g を示すようになる。４層（試料２）になると，62,400 個 /g に減少し，３層ではさらに減少し，48,200 個 /g になる。

産出種類の構成は，全層準を通じて，ネザサ節を含むタケ亜科，ヨシ属，コブナグサ属やスス

Tab.4　植物珪酸体含量

種　類	地区・試料番号			
	C調査区			
	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	2,300	2,000	1,600	－
タケ亜科ネザサ節	4,500	5,600	5,700	10,700
タケ亜科	14,000	19,700	34,300	35,500
ヨシ属	1,200	2,300	2,400	600
ウシクサ族コブナグサ属	200	100	－	100
ウシクサ族ススキ属	200	500	500	600
イチゴツナギ亜科	200	700	400	100
不明キビ型	2,400	3,200	5,800	2,100
不明ヒゲシバ型	800	3,800	5,700	2,200
不明ダンチク型	1,600	3,500	3,100	2,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	1,200	2,300	2,000	－
タケ亜科ネザサ節	7,000	7,500	16,200	10,200
タケ亜科	6,800	5,000	12,400	17,000
ヨシ属	700	800	2,400	300
ウシクサ族	400	200	1,500	600
不明	4,900	5,100	7,300	6,000
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	27,400	41,400	59,500	54,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	20,900	21,000	41,800	34,100
総　計	48,200	62,400	101,200	88,500

数値は含量密度(個/g)を示す。含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

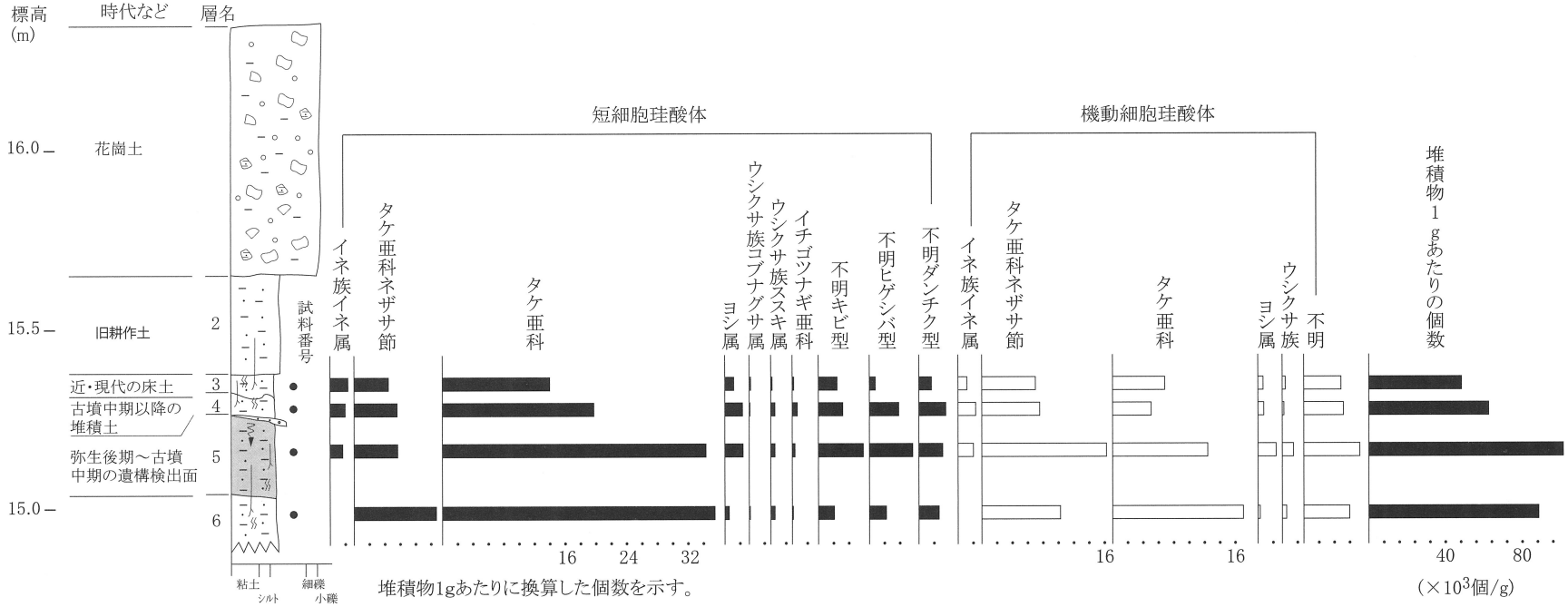


Fig.46　植物珪酸体含量の層位分布

キ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科が産出し，５層（試料３）より上位で栽培植物のイネ属が連続して産出するようになる。

各種類の層位的変化は，６層（試料４）ではネザサ節を含むタケ亜科が多産し，その他の種類は僅かに産出する程度である。

５層（試料３）になると，依然としてネザサ節を含むタケ亜科が多産するものの，栽培種のイネ属が産出するようになり，大型の抽水植物であるヨシ属の珪酸体が増加するなどの変化が認められる。本層準における栽培種のイネ属の含量密度は，短細胞珪酸体 1,600 個 /g，機動細胞珪酸体 2,000 個 /g である。

４層では，ネザサ節を含むタケ亜科が減少し，５層で増加したヨシ属も減少するが，栽培種のイネ属は漸増する。イネ属の含量密度は，短細胞珪酸体 2,000 個 /g，機動細胞珪酸体 2,300 個 /g を示すようになる。

３層(試料1)では，ネザサ節を含むタケ亜科が減少する。栽培種のイネ属は短細胞珪酸体が2,300個 /g，機動細胞珪酸体が 1,200 個 /g となる。

１－４　植物珪酸体の産状について

弥生時代後期以前に形成された６層は，側方級化する細粒砂～シルトからなる層相から，河川の氾濫堆積物と推定される。本層準からはネザサ節を含むタケ亜科が高密度で産出したが，これらは河川の氾濫堆積物とともに運搬堆積したものと判断される。したがって，本層準の植物珪酸体組成は，調査地点の後背の広い範囲の植生を反映しているものと判断される。ネザサ節などのタケ亜科の仲間は，自然堤防や明るい二次林の林床などの開けて乾いた場所に生育する種類が多い。また，ネザサ節は温暖な地域に多いため，寒冷な地域に多いクマザサ属とともに，気候の指標となっている (杉山 ,1999 等)。当時の調査地点の後背地にはネザサ節などが生育する領域が存在したことが窺える。なお，タケ亜科の植物珪酸体は，他のイネ科植物の珪酸体に比較して風化に強く，また生産量も多いことから (杉山・藤原 ,1986 など)，実際には植物珪酸体群集で印象づけられるほどタケ亜科は多く分布していなかったと考えられる。

弥生時代後期～古墳時代中期の遺構が検出されている５層は，黒褐色を呈する，擾乱された腐植質シルトからなり，調査地点の堆積環境が大きく変化し，土壌発達する時期を挟在する後背湿地のような堆積環境へ変化したことが推定される。５層の植物珪酸体の産状をみると，含量密度が６層より増加している。この変化は，堆積環境の静穏化に伴い，堆積物中への植物珪酸体の蓄積量が増加したことを示している。各種類では，依然としてネザサ節を含むタケ亜科が多産している。これは調査地点近辺でネザサ節などのタケ亜科植物が分布を拡げたことを示している可能性もあるが，上記した６層の産状を踏まえると，土壌の母材となっている氾濫堆積物に元々取り込まれていたものに由来するものが多く含まれているものと判断される。これに対して，本層準で増加する栽培種のイネ属や大型の抽水植物のヨシ属は，調査地点近辺で分布を広げた種類であった可能性が高い。

稲作が行われた水田跡の土壌では，イネ属の機動細胞珪酸体が 5,000 個 /g 程度検出されるこ

とが多く，安定した水田稲作が行われたことを示す目安となっている(杉山,2000)。また，現在の耕作土の分析事例では，イネ属短細胞珪酸体が約13.5万個/g，機動細胞珪酸体が約2.4万個/gを示している（辻本ほか,2003)。今回の５層の含量密度は，この目安となる含量より少ない結果となっている。ただし，考古遺跡の植物珪酸体分析事例では，畦畔が検出されている遺構において，イネ属珪酸体がほとんど検出されなかった事例（パリノ・サーヴェイ,2001・2002）や，水田による稲作が行われたと判断される層準を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出された事例（パリノ・サーヴェイ,1996　辻ほか,2004）なども存在する。また，植物珪酸体は，pH値の高い場所や，乾湿を繰り返す場所で風化しやすく（江口,1994,1996)，種類によって溶解性に違いがあることも確認されている（近藤・佐瀬,1986)。これらの事例から，分析結果として得られるイネ属珪酸体の含量は，様々な要因が関係した結果を示していることになる。植物珪酸体などの微化石の多くは，生育場所から何らかの営力を受けて別の場所へ運搬され，遺跡を構成する堆積物や土壌中にマトリクスとして堆積したものであり，堆積後には，様々な続成作用を受ける。そのため，微化石分析の解釈にあたっては，タフォノミーを考慮する必要がある（辻,2000)。

今回の５層は，上記したように土壌発達する時期を挟在する後背湿地のような堆積環境であったと推定されることから，乾湿の繰り返すような場所であったことが推定される。産出した植物珪酸体の保存状態が悪かったのは，このような風化作用に起因するものと判断される。５層のイネ属の含量密度もこのような風化作用を受けた結果であり，初成の堆積構造が著しく擾乱されている層相を踏まえると，５層形成期には調査区ないしその近辺で稲作が行われた時期を挟在していることが推定される。

古墳時代中期以降に形成された４層は，層相から氾濫堆積物が流入する氾濫原の堆積環境で形成された可能性が高く，堆積後に耕作土として利用されていることが発掘調査により確認されている。このような堆積環境から，４層中の植物珪酸体も風化作用の影響を受けていることが推定される。本層準における含量密度の著しい減少は，この風化作用の影響による可能性もあるが，その変化が急激であることから，調査区後背地域におけるイネ科植生の減少を反映している可能性が高い。また，栽培植物のイネ属の含量密度は2,300個/gであったが，風化作用の影響や層相を考慮すると，調査地点において稲作が行われていた可能性は充分考えられる。

近・現代に形成された３層は，人為的撹拌が及んだ床土の可能性がある堆積物である。本層準では植物珪酸体含量は，さらに減少しており，周辺の環境変化が示唆される。また，栽培植物のイネ属の産出と，本層が床土の可能性があることと調和的な結果といえる。

２　井戸出土土器内堆積物の微細物分析

２－１　試料

微細物分析は，Ａ調査区の井戸遺構 SE ２埋土から出土した土器内堆積物５点について実施する。堆積物を採取した土器は，甕３点（遺物番号 82・91・93），壺２点（遺物番号 61・64）である。遺物の時期は，弥生時代後期前葉の比較的短期間の間に収まると考えられている。これらの土器は，井戸遺構 SE ２埋土中の２層（Fig.13）より出土した多量の完形に近い状態の土器の一部であり，意図的な焼成後穿孔が見られることや２層最下位から装飾を持つ器台が出土していることから，水辺の祭祀に関連する遺構と考えられている。

２－２　方法

試料 200cc を水に浸し，粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し，同定可能な種実や炭化材 (主に径 4mm 以上)，昆虫，土器などを抽出する。

抽出した種実を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川 (1994)，中山ほか (2000) 等の図鑑との比較から種類と部位を同定し，個数を数えて表示する。分析後は，種類毎に瓶に入れ，70％エタノール溶液で液浸し返却する。

２－３　結果

各試料 200cc で分析を行ったが，種実等の微細遺物の産出量が著しく少なかったため，試料 800cc を追加して分析を行った。その結果を Tab. 5 に示す。産出した植物遺体は，草本 11 分類群 (オモダカ科，イネ科，ホタルイ属，カヤツリグサ科，カナムグラ ?，ギシギシ属，エノキグサ，チドメグサ属，タカサブロウ，メナモミ属，キク科)56 個，不明２個，計 58 個の種実と，炭化材 30 個 (最大径 6mm)，昆虫 13 個 (最大径 3mm)，土器片 18 個 (最大径 6.4cm) が産出した。遺物番号 61 の壺からは，土器片が１個体検出されただけで，種実や炭化材などの植物片は全く確認されなかった。このように調査を行った５点の土器内堆積物から産出した種実遺体は草本からなり，木本類は全く確認されなかった。種実類の遺存状態は比較的良好であり，イネ科の胚乳とギシギシ属の果実は炭化していた。以下に，同定された種実の形態的特徴等を記す。

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。淡～黒褐色，長さ 1.2 ～ 1.5mm，幅 1mm 程度の倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄く膜状で柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ科 (Gramineae)

胚乳が確認された。炭化しており黒色。長さ 1.2mm，径 0.6mm 程度の楕円体で背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。なお，分析中に破損した。

・ホタルイ属 (*Scirpus*)　カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色，長さ２～ 2.3mm，径 1.8mm 程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り，基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表

Tab.5 微細物分析結果

分類群	部位	状態	地区・遺物番号・器種				
			A地区 SE2				
			91	61	93	64	82
			甕	壺	甕	壺	甕
草本							
オモダカ科	種子	完形	2	−	−	−	−
イネ科	胚乳	完形・炭化	−	−		1	−
ホタルイ属	果実	完形	−	−	2	2	−
		破片	−	−		2	−
カヤツリグサ科	果実	完形	−	−	4	3	2
		破片	2	−		1	−
カナムグラ?	種子	破片	−	−	−	4	−
ギシギシ属	果実	完形・炭化	−	−	1	−	−
エノキグサ	種子	完形	−	−		2	−
		破片	1	−	2	−	1
チドメグサ属	果実	完形	−	−	10	6	2
タカサブロウ	果実	完形	−	−	1	1	−
メナモミ属	果実	破片	−	−	3	−	−
キク科	果実	破片	−	−	1	−	−
不明種実			−	−	2	−	−
炭化材					4(4.5mm)	26(6mm)	
昆虫			4(3mm)			7(3mm)	2(3mm)
土器		破片	4(6.4cm)	1(1.4cm)	2(2.4cm)	4(2.4cm)	7(4.5cm)
		分析量	1000cc 1730.4g	1000cc 1687.8g	1000cc 1610.2g	1000cc 1625.1g	1000cc 1819.5g

括弧内は、最大径を示す

面は光沢があり，不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡 - 黒褐色，レンズ状または三稜状倒卵体。径 0.5 ～ 1.3mm 程度。頂部の柱頭部分はやや伸び，基部は切形。果皮表面は平滑 - 微細な網目模様がある。

・カナムグラ (*Humulus japonicus Sieb.* et Zucc.)?　クワ科カラハナソウ属

種子と思われる破片が検出された。灰褐色，完形ならば径 4mm，厚さ 1mm 程度の側面観は円形，上面観は両凸レンズ形で頂部はやや尖り，縦方向に一周する稜と基部に淡黄褐色，径 1mm 程度のハート形の臍点がある。種皮表面は粗面で断面は柵状。破片は径 3mm 程度。

・ギシギシ属 (*Rumex*)　タデ科

果実が検出された。炭化しており黒色。長さ 2mm，径 1.5mm 程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭で，両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.)　トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色，長さ 1.5mm，径 1 ～ 1.2mm 程度の倒卵体。基部はやや尖り，Y 字状の稜がある。種皮は薄く硬く，表面には細粒状凹点が密布する。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*)　セリ科
果実が検出された。淡 - 灰褐色，径 0.8mm 程度のやや偏平な半月形。一端には太い柄があり，合生面は平坦。果皮は厚く，やや弾力がある。表面には１本の明瞭な円弧状の稜がある。
・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.)　キク科タカサブロウ属
果実が検出された。灰 - 茶褐色，長さ 2.5 ～ 2.7mm，径１～ 1.5mm 程度のやや偏平な三角状倒狭卵体。両端は切形，果皮は海綿状で，両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり，水に浮きやすい。
・メナモミ属 (*Siegesbeckia*)　キク科
果実の破片が検出された。灰黒褐色，完形ならば長さ 2.8mm，径 1.5mm 程度の狭三角状菱形体で腹面方向へ湾曲する。頂部には円形の臍がある。果皮表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し，全体に微細な突起がある。破片は果皮表面の縦溝に沿って割れており，長さ 2mm，幅 0.8mm 程度。

・キク科 (Compositae)
果実の破片が検出された。タカサブロウ，メナモミ属以外の種を一括した。淡灰褐色，長さ 3mm，径 0.5mm 程度の線状長楕円体。頂部は切形で円形の臍がある。破片は頂部から伸びる冠毛を欠損する。果皮表面には微細な網目模様が縦列する。
・不明種実 (Unknown)
遺物番号 93 の B 類甕から検出された２個は，淡灰褐色，長さ 0.7mm，径 0.5mm 程度の倒卵体。基部は嘴状に尖る。背面は丸みを帯び，腹面の正中線は鈍稜をなす。表面は粗面。

２－４　土器内から産出した植物遺体について

弥生時代後期の井戸遺構 A 調査区 SE ２埋土中から出土した５点の土器内の堆積物は，植物遺体などの微細物の産状に多少の差異があるものの，いずれの試料も概して産出数が少なかった。産出した種実遺体の遺存状態は，比較的良好であったことから，風化などの続成作用の影響により分解消失している可能性は低く，元々堆積物中に取り込まれている量が少ないと判断される。この原因として，堆積速度が速かったことが示唆される。発掘調査時の所見では，堆積状況から，遺構の埋没が短期間であったことが推定されており，今回の結果は同調的な結果といえる。なお，産出量の差異については，土器内への堆積物充填に関わるタフォノミーの違いに起因している可能性があるが詳細は不明である。

産出した種実の分類群構成をみると，オモダカ科，イネ科，ホタルイ属，カヤツリグサ科，カナムグラ ?，ギシギシ属，エノキグサ，チドメグサ属，タカサブロウ，メナモミ属，キク科といった草本類からなり，木本類は全く産出しなかった。このうち，オモダカ科やホタルイ属は，抽水植物 (根が水に固着し，植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物) ～湿生植物の種を含む分類群である。タカサブロウも湿生植物であり，田圃や畦，水路壁などに生育する，いわゆる水田雑草の一種である。カナムグラは一年生のツル植物であり，野原や路傍，河原などの荒地

に生育している。エノキグサは一年生草本であり，乾燥する荒れ地から肥沃な場所まで生育地が広く，畑や路傍などで普通に認められる種である。チドメグサ属は多年草であり，路傍ややや湿った野原などに生育するチドメグサなどの種を含む。メナモミ属は，日本にはコメナモミ・メナモミが自生し，いずれも一年生草本であり，山野の荒れ地や道ばたに生育する。ギシギシ属は多年生草本であり，スイバやギシギシなど，あぜ道や路傍などに生育する種を含む。このほかのイネ科・キク科は，様々な環境に生育する種を含む。

このように各分類群の生態性をみると，産出した種実遺体の多くが，明るく開けた場所に生育する，いわゆる人里植物に属する分類群が多いことが窺える。このことから，これら種実は井戸遺構周辺域に分布していた草本植生に由来するもので，遺構が埋積する過程で周囲から堆積物とともに混入したものと考えられる。また，オモダカ科・ホタルイ属・タカサブロウといった抽水植物～湿生植物などが確認されることから，井戸周辺に水湿地の存在も推定される。発掘調査時の所見では，井戸埋土第２層最下部から装飾を持つ器台の出土より，水辺の祭祀に関連する遺構と考えられていることとも矛盾しない。

以上，井戸遺構 SE ２埋土第２層中・上位より産出した植物遺体は，種類構成からみて，いずれも周辺植生を反映するものであり，人為的に甕や壺の中に埋納したと思われる種実 (栽培植物等) はみられなかった。唯一ギシギシ属やイネ科種実は，火熱を受けた痕跡があるが，産出量が少ないことから，意図的に入れたのではなく，炭化材片と同様に当時の生活残渣などが取り込まれたと考える方が自然であろう。また，産出量が著しく少なかったことから，短期間に埋没している可能性が考えられる。

引用文献

江口誠一 ,1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして . 植生誌研究 ,2,19-27.

江口誠一 ,1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物の pH 値 . ペトロジスト ,40,81-84.

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

中山至大・井之口　希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

近藤　錬三 ,1988, 十二遺跡土壌の植物珪酸体分析 . 鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－ , 御代田町教育委員会 ,377-383.

近藤　錬三 ,2004, 植物ケイ酸体研究 . ペドロジスト ,48,46-64.

近藤錬三・佐瀬　隆 ,1986, 植物珪酸体分析 , その特性と応用 . 第四紀研究 ,25,31-64.

パリノ・サーヴェイ ,1996, 珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元 .「北島遺跡の耕作地と古環境－寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書－」,（財）東大阪市文化財協会 ,71-130.

パリノ・サーヴェイ ,2001, 亀里平塚遺跡の自然科学分析 .「亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長瀞線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 ,343-353.

パリノ・サーヴェイ ,2002, 横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析 .「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集 第１分冊（本文編）」,（財）群馬県埋蔵文化財調査事業

団 ,133-155.

杉山　真二・藤原　宏志 ,1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－ . 考古学と自然科学 ,19,69-84.

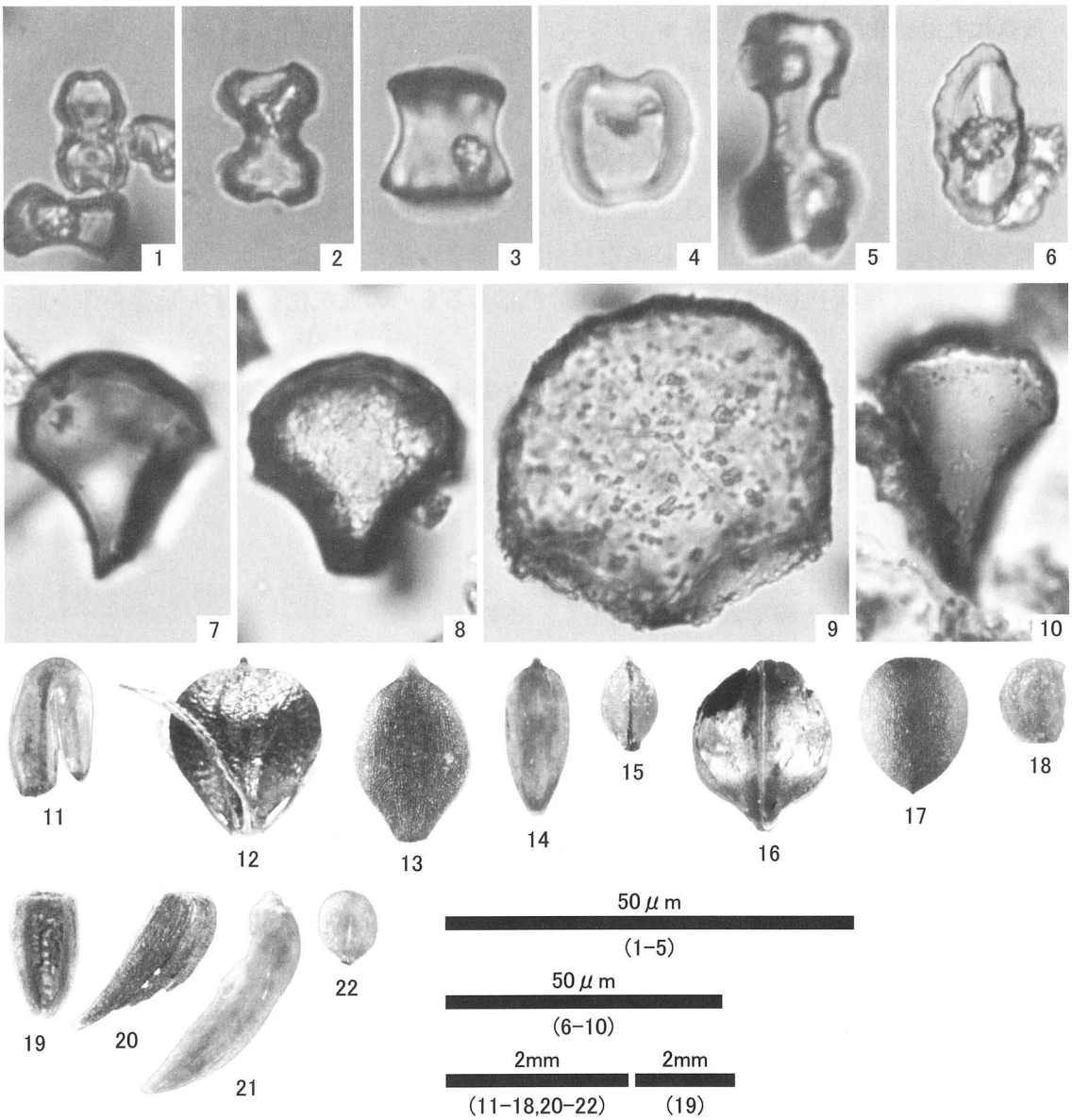
杉山　真二 ,1999, 植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史 , 第四紀研究 ,38,109-123.

杉山　真二 ,2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻　誠一郎 (編著) 考古学と自然科学 3　考古学と植物学 , 同成社 ,189-213.

辻　康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀 ,2004, 付章　前田遺跡の自然科学分析 .「前田遺跡（第 20 地点）発掘調査概要報告書－弥生前期水田跡の構造と水利動態－」, 芦屋市教育委員会 ,1-40.

辻　誠一郎 ,2000, 第二章　植物と植物遺体 .「考古学と自然科学 3 考古学と植物学」, 辻誠一郎編著 , 同成社 ,23-41.

図版　植物珪酸体・種実遺体



1．イネ属短細胞珪酸体(C区;2)
2．イネ属短細胞珪酸体(C区;3)
3．ネザサ節短細胞珪酸体(C区;4)
4．ヨシ属短細胞珪酸体(C区;3)
5．ススキ属短細胞珪酸体(C区;3)
6．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(C区;2)
7．イネ属機動細胞珪酸体(C区;2)
8．イネ属機動細胞珪酸体(C区;3)
9．ヨシ属機動細胞珪酸体(C区;3)
10．ウシクサ族機動細胞珪酸体(C区;3)
11．オモダカ科 種子(A地区 SE2 91 甕)
12．ホタルイ属 果実(A地区 SE2 64 壺)
13．カヤツリグサ科 果実(A地区 SE2 93 甕)
14．カヤツリグサ科 果実(A地区 SE2 93 甕)
15．カヤツリグサ科 果実(A地区 SE2 93 甕)
16．ギシギシ属 果実(A地区 SE2 93 甕)
17．エノキグサ 種子(A地区 SE2 64 壺)
18．チドメグサ 果実(A地区 SE2 93 甕)
19．タカサブロウ 果実(A地区 SE2 64 壺)
20．メナモミ属 果実(A地区 SE2 93 甕)
21．キク科 果実(A地区 SE2 93 甕)
22．不明種実(A地区 SE2 93 甕)

第３節　調査地点の液状化について

香川大学工学部　山中稔

1.　液状化と液状化跡

液状化とは、地震時に地盤の土粒子構造を乱され、間隙水圧が上昇にすることにより、地盤が液体のような挙動を示すことである。液状化しやすい地盤とは一般的に，粒径が揃った砂質土であること，緩く堆積していること，そして地下水位が高いことが挙げられる。このような地盤条件が揃った地形としては，海岸部の砂州や埋立地，内陸部では河川氾濫原や旧河川上が該当する。

当調査地点は，旧香東川の氾濫原にあたり，河川争奪の激しかった場所である。すなわち，礫質土や砂質土が緩く堆積しやすいことから，内陸部にあるものの液状化しやすい地盤条件を揃えていることが推察できる。

このような地盤条件の地点において，遺跡調査実施中に液状化発生の痕跡である噴脈が検出された。写真に、掘削断面で検出された噴脈を示す。掘削断面の土層区分は，上位から表層部の盛土、シルト質の粘性土，液状化を発生したと見られる砂礫質土である。地震時に砂礫質土層で液状化が発生し，この液状化によって生じた高い水圧とともに砂礫が上位の粘性土層を貫入していることが分かる。この粘性土層からは，弥生時代の土器が検出されていることから，この噴脈を生じさせた地震は，弥生時代以降の発生であると言える。

写真　液状化発生跡

2.　噴脈内の噴礫の粒度特性

Fig.47 に，噴脈内の砂礫土と，噴脈が貫く粘性土層の粒度分布を示す。噴脈内の砂礫土の最大粒径は 75mm，平均粒径は 17mm と大きく，粗礫分が卓越する粒径を有する。これまで，液状化噴砂の粒度分布の研究は試料採取の容易さから多くなされているが，噴脈内の粒度を調査した研究はそれほど多くない。1995 年兵庫県南部地震における液状化地点のトレンチ調査が神戸市灘区で実施され噴脈構成土の粒度分布が詳細に調査された 1)。この結果と比較して，当該地で発見された噴礫は最大粒径及び平均粒径共に大きい。すなわち，粒径の大きさから判断する限りでは，揺れの大きな地震の発生により当調査地点で砂礫層において液状化が発生したことが伺える。

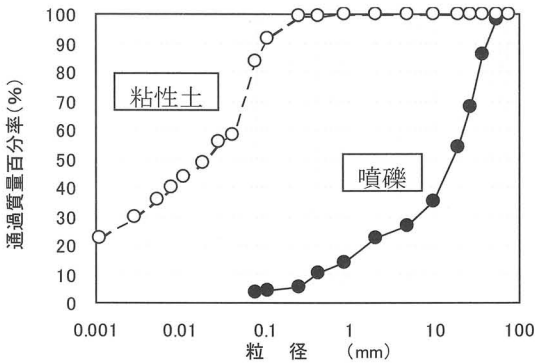


Fig. 47　粒度分布（噴礫と粘性土層）

Tab. 6　粒度分布（粒径区分における質量比）

区分	粒径（mm）	質量比（%） 噴礫	粘性土
粗礫分	19～	46.3	0.0
中礫分	4.75～19	27.0	0.0
細礫分	2～4.75	4.1	0.0
粗砂分	0.85～2	8.5	0.1
中砂分	0.25～0.85	8.8	0.6
細砂分	0.075～0.25	1.4	15.8
シルト分	0.005～0.075	3.8	48.5
粘土分	～0.005	0.1	35.0

3. ボーリングデータよる地質構造

四国地盤情報データベース（四国地盤情報活用協議会）を用いて，調査地を中心とした南北方向の地質断面図を作成した。Fig.48のA - A’ 断面におけるボーリング柱状図をFig.49に示す。

Fig.49より，表層部には埋土もしくは粘性土層が薄く堆積し，その下位にN値が20～40の緩い砂礫層が分布している。調査地点における地表から２m程度トレンチ掘削での観察結果でも，概ねこの土層が確認できている。また，この地質構造からも，調査地点が扇状地形上にあることが分かる。

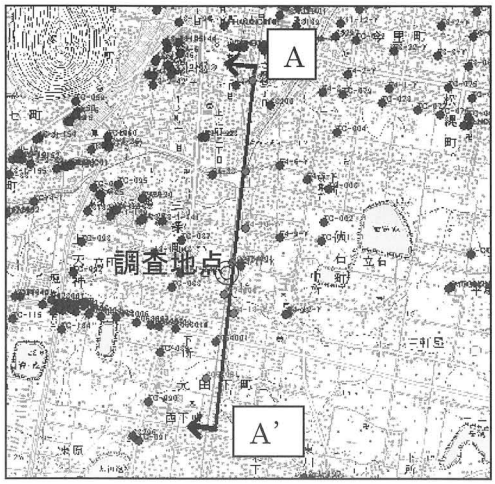


Fig. 48　地質断面線（A-A’断面）

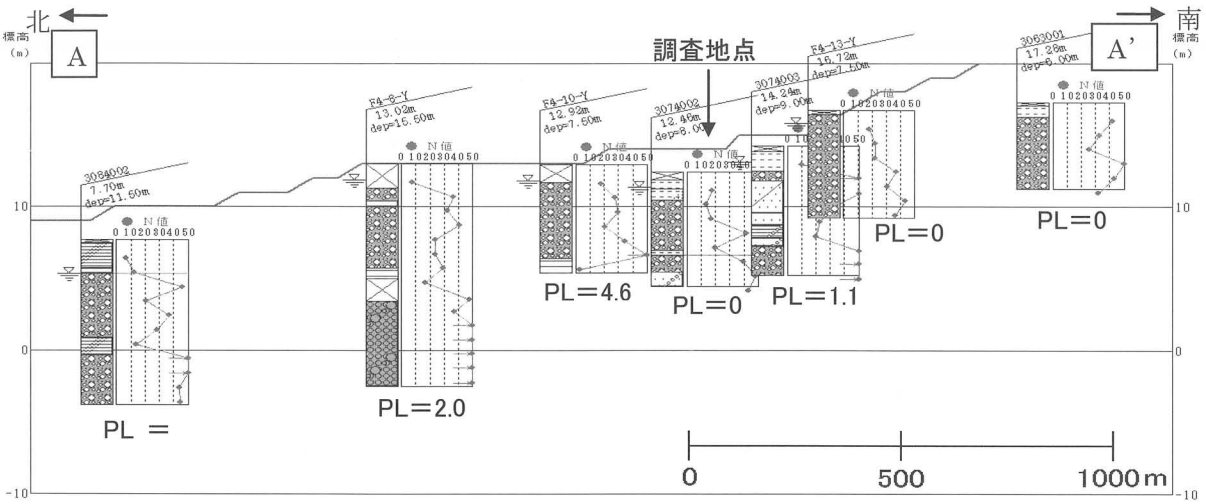


Fig. 49　地質断面図と液状化危険度PL値

4. 液状化判定

ボーリングデータを用いて道路橋示方書・同解説 Ⅴ耐震設計（平成14年3月）によるPL値法に基づき液状化危険度判定を行った。液状化判定における想定地震は，南海地震のような「発生頻度が低いプレート境界に生じる大規模な地震動」タイプ（海溝型）とした。

Tab. 7　PL値による液状化危険度ランク

PL値	ランク	危険度判定
15＜PL	A	液状化危険度は極めて高い
5＜PL≦15	B	液状化危険度は高い
0＜PL≦5	C	液状化危険度は低い
PL＝0	D	液状化危険度はかなり低い

Fig.49の各柱状図の下部に液状化危険度PL値を示している。このPL値より調査地を含む断面上の液状化危険度ランク（Tab. 7）はCもしくはDであり液状化危険度は低いと判定される。

以上のように噴脈構成土の粒径が大きいこと、また海溝型地震でのPL値が低いことから，本調査地で発見された噴脈が発生した地震は，海溝型地震以外の内陸直下型地震によると推察される。

参考文献:1）沼田淳紀，森伸一郎，陶野郁雄，遠藤邦彦:液状化で生じた砂脈と噴砂に関する一考察，土木学会論文集，No.638/ Ⅲ -49，pp.311-324，1999.12.

第Ⅴ章　まとめ

第１節　　遺構の変遷について

本節では今回の調査結果に加え，香川県教育委員会による既往の発掘調査および周辺の工事立会・試掘調査の成果を踏まえて遺構の変遷について検討する。各調査の概要については第Ⅰ章第2節を参照されたい。既往の調査では主に遺跡の東西方向について調査されている。この範囲での遺構の変遷はその発掘調査報告書（北山・森下編 1995）に詳述されているため，ここでは触れない。今回の調査では遺跡の南北方向の広がりを推定する資料が得られたため，この部分を中心に記述を行う。なお，地点の記述については今回の調査区と香川県教育委員会の調査区（北山・森下編 1995）との交点を仮に中心とし，方位と距離で表す。

弥生時代（Fig.51）　中心から北へ約 160 mの地点で後期前葉の土器が出土した（Fig.50）大溝は，直線的に延長すると西へ 160 mの地点に位置する幅広の溝につながる。この溝からは弥生時代前期末葉の土器も出土していることから，大溝の開削時期が前期に遡る可能性が考えられる。ただし，本遺跡で中心となる時期は後期前半である。遺構は，住居跡と溝が中央と西約 120 mの地点で確認されている。また北へ 120 mの地点で後期前葉の井戸（Ａ調査区ＳＥ２），北へ 90 mの地点で竪穴住居も検出されている。Ａ調査区以北の試掘では遺構が認められなかったため，Ａ調査区北半が集落の北限にあたる可能性が考えられる。南側では居住に関する遺構は検出しなかったが，南へ 60 mの河川（Ｃ調査区ＳＲ１）より弥生時代後期後半の土器が多量に出土しており，周辺に供給源である集落の存在を推定できる。また時期は不明瞭だが，堆積状況からＣ調査区ＳＤ７と付近の足跡群も弥生時代後期に併行すると考えられる。このように，弥生時代後期の集落は西側を居住域の中心として南北 300 m程度の範囲に広がっていたと考えられる。

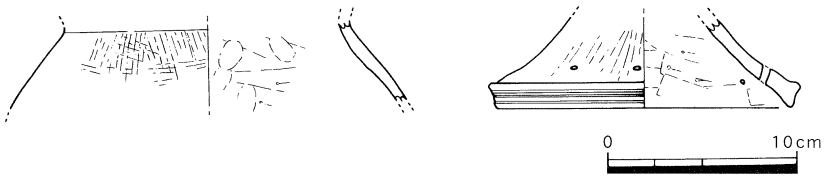


Fig.50　大溝出土遺物実測図（縮尺１／４）

古墳時代（Fig.52）　古墳時代の集落域は東へ 110 mの地点を中心に認められ，弥生時代の集落域から 300 mほど東へ移動している。竪穴住居や掘立柱建物は若干の時期差を持ちながらほぼ同時期に存在していたと考えられており，その時期は概ね古墳時代中期から後期にあたる。北へ 50 mの地点のＢ調査区ＳＤ４を直線的に延長すると，住居群の西端にあたることから，居住域を囲う溝の可能性も考えられる。南側では遺構が検出されなかった。

古代　（北山・森下編 1995）では条里に沿う溝などが確認されるが，今回の調査ではＣ調査区ＳＲ１より古代の須恵器が１点出土したのみで，明確な遺構は認められなかった。

中世以降　（北山・森下編 1995）では掘立柱建物などが確認されるが，今回の調査では明確な遺構は検出されなかった。

Fig. 51　太田下・須川遺跡遺構配置図（弥生時代後期）（縮尺１/1600）

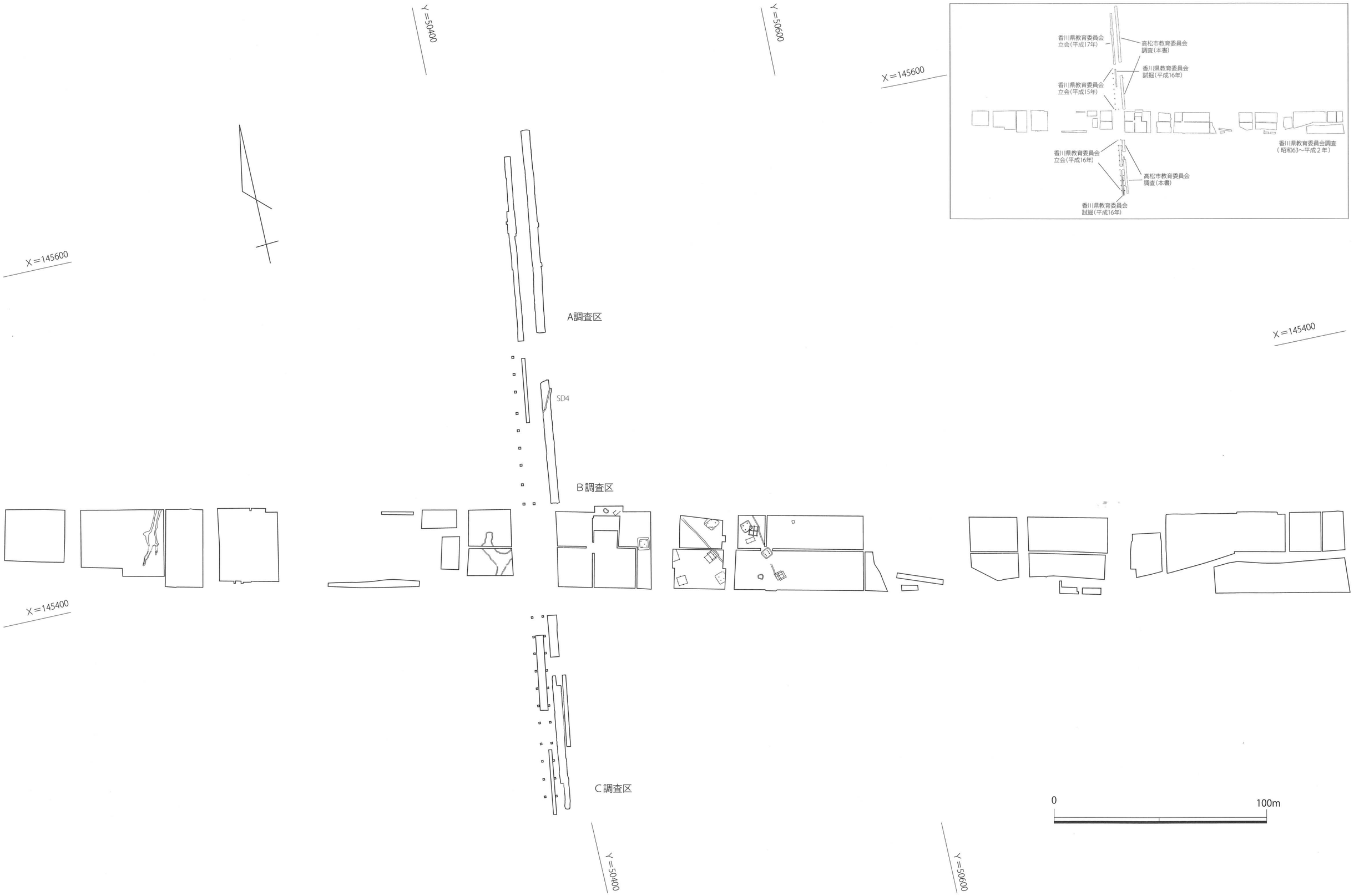


Fig. 52　太田下・須川遺跡遺構配置図（古墳時代中期～後期）（縮尺１/1600）

第２節　　Ａ調査区井戸ＳＥ２について

１．出土土器の編年的位置づけと今後の課題

本文中でも述べたが，Ａ調査区ＳＥ２からは多量の弥生土器が出土した。堆積状況から良好な一括性を有す資料であると評価できる。また，土器中に堆積した土壌の微細物分析を行った結果，植物遺体の産出量が極めて少ない状況から，井戸が極めて短期間に埋没した可能性が示唆されたこと（本書第Ⅳ章第２節）もこの資料の一括性を傍証するものである。また，出土土器の９割以上が「角閃石細粒を稠密に含む特徴的な素地粘土を採用する」「香東川下流域産」（大久保 2003）とされる土器である。太田下･須川遺跡周辺は香東川下流域産土器の製作拠点のひとつにあたる。このような状況から，高松平野における弥生時代後期の土器編年を考える上で重要な資料になると考えられるため，ここではまず先行研究に基づき，当土器群の編年的な位置づけについて考えてみたい。

高松平野を含む香川県域の弥生時代後期土器の編年については，他地域に先行して良好な資料に恵まれた丸亀平野の資料を用いて検討が進み，特徴的な胎土を有する香東川下流域産土器もその中で搬入品として検討された[1]（大久保 1990）。その後，香川県域全域の資料を対象とした検討（真鍋 2001）や，中期から後期初頭の凹線文期を対象にした編年作業（信里 2005）の中で高松平野の資料も検討された。片桐孝浩は高松平野北東部の資料をもとに，後期土器の編年を検討した（片桐 2006）。乗松真也は高松平野の資料の中でも特に香東川下流域産以外の土器に着目し，甕の型式変化を主な手がかりに編年を行った（乗松 2006）。

これらの研究を踏まえて本遺構出土資料を概観したい。まず器種組成であるが，大久保による隣接する上天神遺跡の分類を援用する（大久保 1995）と，甕で大小２形態・６種，壷は広口壺・直口壺・短頸壺・無頸壺・細頸壺の５基本形態がそれぞれ見られ，細分すると 10 種が認められる。高坏では２種，器台１種，鉢は大小２形態５種がそれぞれ認められる。遺構が完掘できず，全ての遺物を回収できたわけではないが，器種組成の多様さは認められるであろう。紙幅の制限から詳述はできないが，それぞれの器種を概観すると，甕では口縁端部が弱く上下に拡張され，端面に弱い凹線を施すものが半数程度を占め，一部沈線状のものや凹線を持たない資料（Fig.18 － 81･82 など）も認められる。また，口縁端部がほとんど拡張せず，直線的に伸びるもの（Fig.19 － 90･92 など）や上方に強く屈曲する，中期的な特徴を残す一群（Fig.20 － 94 ～ 96）も存在する。口頸部の屈曲は「く」の字状を呈するものと，やや直立し頸部状の部位をもつものが認められる。内面調整はヘラケズリが頸部付近までおよぶものと体部中位で終わるものが存在する。壺では多様な器種とそれぞれに細分形態が認められる。高坏をみると，口縁端部は水平に肥厚し，端面に凹線を有する資料が大半を占める。また，第２層上位出土資料であり混入の可能性も考えられるが，後につながる形態である端部が肥厚せず緩やかに外反する資料も見られる（Fig.15 － 33）。大型鉢では口縁部がやや内傾し加飾を施さないものが主体である。口縁部が外傾し，端面を丸く収める小型鉢も同程度認められる（Fig.21 － 13・15）。

これらの型式的特徴から，本資料の所属時期は後期前葉に概ね比定され，中でも甕や高坏・鉢の口縁部形状から，後期初頭の基準資料とされる上天神遺跡 SK04・SD08 よりも若干後出する

ものと考えられる。

ただし，高松平野における弥生時代後期土器の編年については，いくつか解決すべき課題が残っている。当該期の香東川下流域産土器の編年は，現状では主に搬出先の資料を用いた編年であり，生産地である高松平野の資料との間で若干の時期差が生じる可能性が考えられる。また，弥生時代後期の高松平野では香東川下流域産土器と，香東川下流域産以外の土器[(2)]が認められる。これらは同時期に同一遺跡・遺構内で併存しておりながらも製作技法や胎土・色調・調整など，様々な異同要素が認められる。本遺構でも香東川下流域産土器と白色系の土器が共伴している。香東川下流域産以外の土器の編年については分析があるものの（乗松 2006），良好な一括資料の不足から，製作地である高松平野における香東川下流域産土器については未だ十分な検討が及んでおらず，また，香東川下流域産以外の土器との併行関係も不明瞭である。高松平野における弥生時代後期の土器編年には香東川下流域産土器の編年の確立と，香東川下流域産以外の土器との併行関係の検討が必要である。

香東川下流域産土器は特徴的な胎土から識別が容易なため，高松平野内でも製作地と搬出先という関係が明瞭に確認できる。また，遠隔地へ流通する例も知られており，当該期の土器の併行関係や地域間の交流を考える上で，生産地である高松平野の土器編年は非常に重要な意味を持つであろう。筆者の力量不足により本稿で検討は行えなかったが，本遺構資料がこうした問題を考える上で良好な一括資料であることは確かである。昨今の資料の増加を踏まえた上で，上記の問題の解決が望まれる。

２．土器に付着した赤色顔料について（Fig.53・54）

Ａ調査区ＳＥ２から出土した土器には多数の赤色顔料付着個体が認められた。肉眼観察でその可能性の伺える資料だけでも 30 点あまりを数える。Fig.53・54 には肉眼観察で赤色顔料の付着が認められた資料の一部を掲載した。器種の明らかなもので内訳を見ると甕６点，壺４点，鉢４点，高坏６点，広片口皿２点，器台１点である。顔料が剥落し，付着部が極めて判りづらい資料が大半であることを考慮すると，本来はより多くの個体に付着していた可能性が高い。これらのうち残存状況の良好な資料と，器形から赤色顔料付着の可能性が考えられた資料の蛍光Ｘ線分析を徳島県立博物館　魚島純一氏に依頼した（第Ⅳ章第１節）。

分析結果のみ紹介すると，高坏（121・132・135・139）・器台（142）に付着した赤色顔料はベンガラであり，鉢（31・154・155）・広片口皿（45・119）の内面に付着した赤色顔料が水銀朱であることが明らかとなった。本遺構例においては赤色顔料の種類と器種とに相関関係が認められ，意図的な使い分けがなされていた可能性が考えられる。また，ベンガラは高坏や器台を中心に認められる。隣接する上天神遺跡では高坏や器台にベンガラが塗布される資料が多く認められ，装飾を目的としたものであると考えられている。一方，水銀朱は鉢や広片口皿などの内面から主に検出されている。これらの器種は水銀朱の精製あるいは貯蔵に関係すると考えられている。香川県教育委員会による既往の調査でも本遺跡から水銀朱の付着した土器が発見されており（北山・森下編 1995），隣接する上天神遺跡からも水銀朱の付着した土器が多数検出されている（大久保・

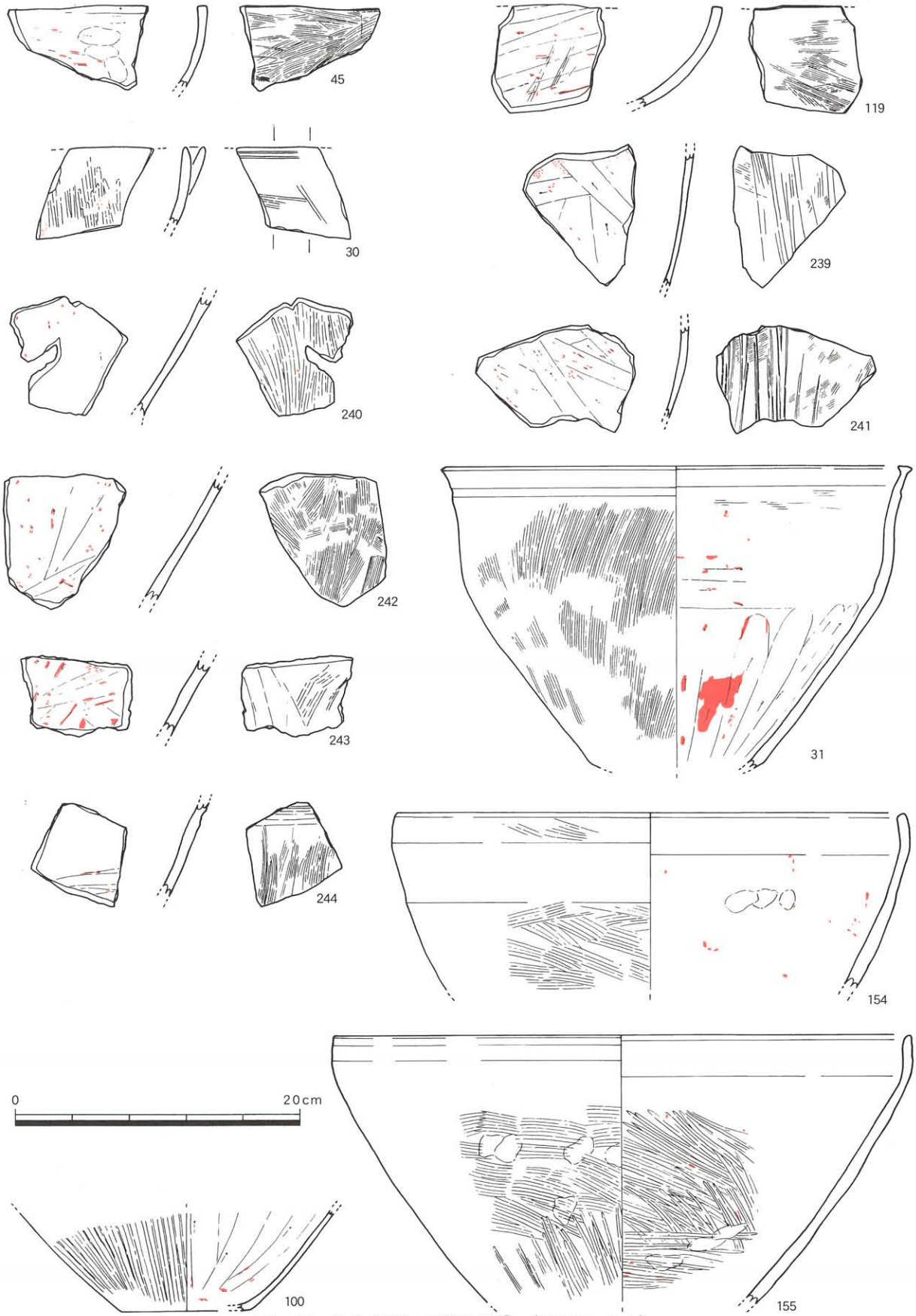


Fig.53　赤色顔料付着資料①（縮尺１／４）

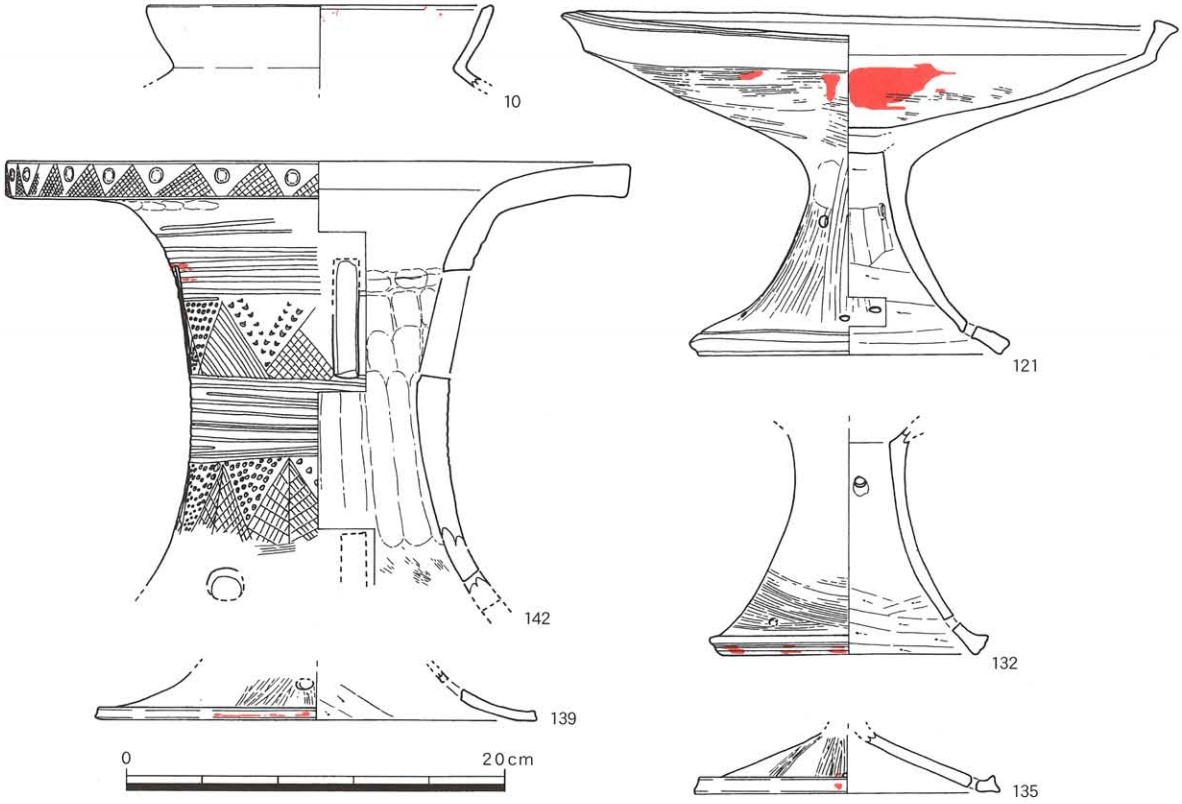


Fig.54　赤色顔料付着資料②（縮尺１／４）

森ほか編 1995)。これらの水銀朱は徳島県若杉山遺跡周辺で採取・精製されたものと考えられ，高松平野が水銀朱の一大消費地であったことがわかる。本遺跡出土の水銀朱付着鉢の付着部位を観察してみると（Fig53)，体部中位から上半にかけての範囲に朱の付着した個体が複数認められる。朱付着個体の多くが口径 30 ～ 40cm を測る大型の鉢であるため，これらに付着の認められる部位まで水銀朱が充填されたと仮定すると，極めて多量の水銀朱の存在が推定できる。水銀朱の付着部位の上限が内容物の上限であると仮定し，内容量の試算を行ってみる。底部付近まで残存している 31 をみると，赤色顔料付着の最上部位までの容積はおよそ 1120cm^3 である。水銀朱（HgS）の比重が 8.09 g /cm^3 とする（地学団体研究会ほか 1996）と，約９ｋｇもの水銀朱が内容されていた可能性が指摘できる。もちろんこれは最大量を示すものであり，精製・貯蔵時の土器の用いられ方などにより変化することは明らかである[(3)] が，こうした大型の鉢が複数存在することからも，当遺跡に多量の水銀朱が持ち込まれていたことがわかる。

ただし，井戸埋土中から水銀朱そのものを確認することはできなかった。堆積環境で水銀朱がどのような変化をするのか不明であるが，流失や化学変化により失われたのでなければ，土器中に水銀朱そのものを大量に充填して廃棄された形跡は認められない。水銀朱の付着した土器が井戸祭祀に際して意図的に用いられたのであれば，内容物である水銀朱を目的として用いられたのではなく，水銀朱を生産・貯蔵する容器自体を用いたことが推測される。

３．把手付広片口付皿について（Fig.55）

Ａ調査区ＳＥ２から，小片であるが把手付広片口皿と考えられる資料が出土した。隣接する上天神遺跡出土資料を参考に（大久保・森ほか編 1995：第２分冊 p. 150）復元を行ったのがFig.55 である。調整および胎土・色調から少なくとも２個体の存在が確認できる。平面形は弥生土器の甕を縦に半裁したような倒卵形に，把手の付く形状に復元した。ただし，把手部は出土していないため，把手の無い型式のものであった可能性も考えられる。

(118・120)　片口端部および側縁端部は工具で鋭利に切断されており，直線的な端面をもつ。内外面共にタテ方向のヘラミガキが精緻に施され，特に片口部内面は調整の単位が認められないほど平滑にヘラミガキ調整が行われる。

(45・119)　こちらも側縁端部は鋭利な工具で削り出される。外面には細いハケ調整が施され，内面にはケズリおよびヘラミガキが認められる。

ともに片口端部に鋭利な工具痕がみられることから，本器種は甕などを縦に半裁して製作された可能性が高いものと思われる。また，外面は比較的磨耗が激しいが，内面の残りは良好である。破片が小さく，全容は分からないが，外面に水銀朱の精製に関連すると考えられる，煤の付着や赤変といった被熱の痕跡（市毛 1998）は認められない。上天神遺跡出土把手付広片口皿は水銀朱の付着が顕著に認められることから，水銀朱の貯蔵・精製に関連する器種であると推定されている（大久保・森ほか 1995）。本遺跡出土資料では 45・119 から水銀朱が検出され，上記の推定を裏付ける結果となった（本書第Ⅳ章第１節）。

４．井戸における祭祀について

ＳＥ２では井戸の中から多数の弥生土器が出土した。遺物出土層中位以下からは完形・略完形の土器が多数検出されており，出土状況から井戸にまつわる何らかの祭祀が行われたものと考えられる。本項ではまず本遺構における祭祀的要素を整理し，報告する。また，香川県内における弥生時代の井戸を集成し，本例の位置づけに関して若干の比較検討を行いたい。

出土遺物から祭祀的であると考えられる要素には，以下の点が挙げられる。

a. 完形ないし略完形の土器（PL.17 ～ 21）。

b. 壺・甕体部の焼成後穿孔

c. 赤色顔料付着土器　内面に水銀朱の付着した鉢や，水銀朱の貯蔵・精製用と考えられる把手付広片口皿が見られる。また，器台・高坏の外面にはベンガラの塗布が見られる。

d. 最下層の器台と壺　器台は搬入品の可能性が考えられる資料で，鋸歯文を中心とした複雑な文様を施す。壷は器台の下で縦に半裁されたような状況で検出した（ＰＬ．３下段）。また，接合作業の結果，Fig.13 － ２層上位・中位出土の破片と接合関係が認められた。廃棄の段階で偶然破損した可能性も否定できないが，破損状態と出土状況が特異であるため，意図的な破砕および廃棄が行われた可能性も考えられる。類例の増加を待ち判断したい。

e. 器種組成（Fig.56）　隣接する上天神遺跡の分類を援用し，器種組成を算出した[(4)]。甕と壷がそれぞれ４割程度を占め，鉢・高坏がそれぞれ１割程度を占める。壺の比率がやや高いと思わ

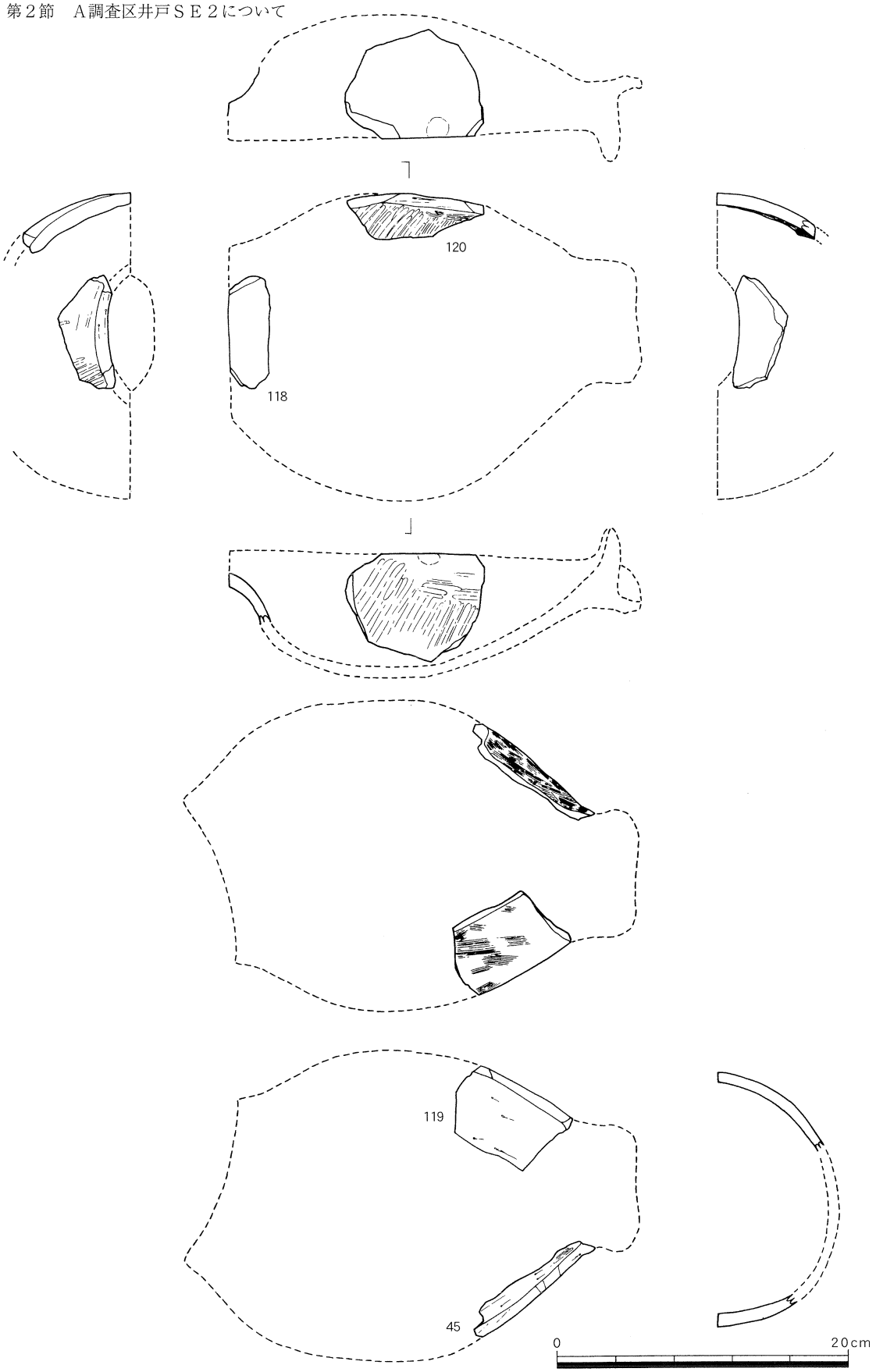


Fig.55 取手付広方口皿推定復元図（縮尺＝１／４）

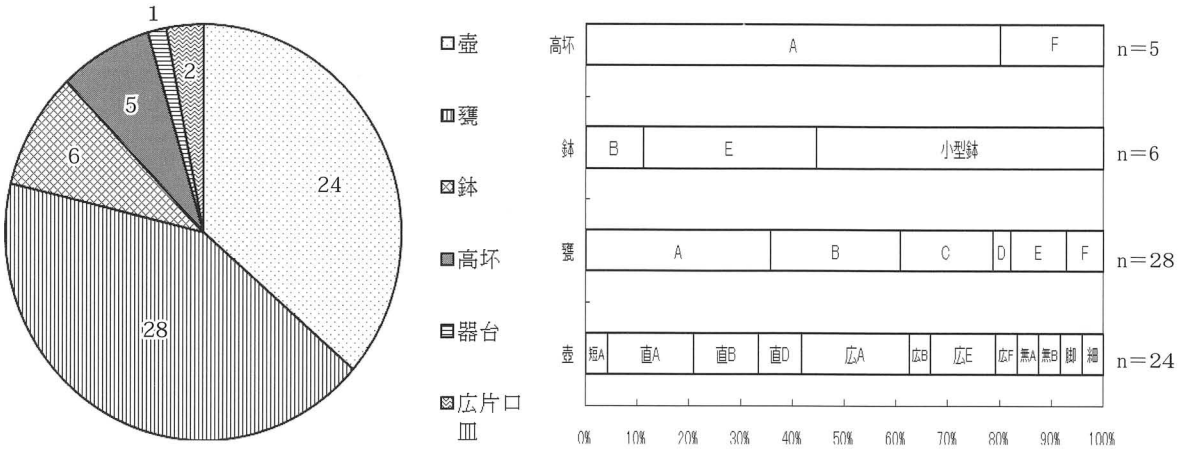


Fig.56　A調査区ＳＥ２出土土器器種組成

れ，器台や把手付広片口皿など，特異な器種が一定量認められることが特徴として挙げられる。

一方，堆積状況で特筆すべきことは，

ｆ．堆積層　下層部分は調査時に十分な検証が行えなかったが，堆積層が少なく，１層ずつが厚い。こうした堆積状況から人為的な埋没の可能性が考えられる。また，最下層（Fig.13 － 3層）と中層（Fig.13 － 2層）はほぼ同質の土であり，間層を挟まないため，堆積に時間差はほとんど無く，極めて短期間で埋没したものと考えられる。こうした見解は微細物分析の結果によっても傍証されている（第Ⅳ章第２節）。

ｇ．遺物の出土位置　最下層であるFig.13 － 3層からは全く遺物が出土せず，Fig.13 － 2層より完形を含む多量の土器が出土した。こうした状況から，出土した遺物は井戸の廃絶に際して投棄されたものと考えられる。

ｈ．円礫の混入　中層であるFig.13 － 2層からは径５～ 10cm 程度の円礫が多数検出された。井戸底に浄水を目的として礫を敷く例が認められるが，本例では土器群と混在しており，完形の土器の内部からも多数検出されることから，浄水を目的とした礫敷とは考えがたい。井戸の廃絶の際，土器と共に意図的に投棄されたものと考えられる。

続いて，研究史の概略をまとめ，集成作業の結果を述べる。香川県域の弥生時代の井戸に関する研究は少ない。佐藤竜馬は，弥生時代の水利遺構である出水状遺構を検討し，弥生時代後期に灌漑に伴う遺構として掘削されたこと，出土遺物中に祭祀的な遺物が認められることを指摘した（佐藤 1993）。清水渉は平池南遺跡の井戸出土遺物と井戸祭祀との関連を検討した（清水 1995）。近藤玲は四国の弥生時代から古墳時代にかけての井戸を検討する中で香川県の井戸についても論及しており，旧練兵場遺跡や上天神遺跡例を挙げ，後期に金属器など，専業的な手工業生産の展開に伴い出現すると位置づけた（近藤 2008）。

集成作業を行うにあたり問題なのは，井戸の認定条件についてである。すでにいくつかの具体的条件が提示されている（堀 1999・2008）が，ここで挙げられた条件を各報告書で確認するこ

Tab.8　香川県内弥生時代井戸集成表

	遺跡名	遺構名	所在地	立地・標高(m)	時期	規模(長径×深さ)	構造	出土遺物	出典	備考
1	北内	Ⅳ区SE01	丸亀市綾歌町	谷・36.8	中期中頃	0.9×0.8	素掘り	壺・甕	1	
2	北内	Ⅳ区SE02	丸亀市綾歌町	谷・36.7	中期中頃	1.2×0.6	素掘り	壺・甕	1	
3	成重	Ⅰ区SE03	東かがわ市白鳥	扇状地・11.4	中期中葉	1.6×0.8	素掘り	壺・甕・鉢・高坏・柱状片刃石斧	2	砂岩礫の投下・完形土器
4	成重	Ⅱ区第2検出面SE02	東かがわ市白鳥	扇状地・12.8	中期中葉	1.2×0.7	素掘り	壺・甕・敲石	2	
5	成重	SX11	東かがわ市白鳥	扇状地・12.6	中期中葉	5.9×1.1	素掘り	壺・甕・高付・鉢・石鏃・スクレイパー・砥石・刀子	3	
6	成重	Ⅱ区第2面SX01下層SE01	東かがわ市白鳥	扇状地・10.8	中期後葉	1.5×1.0	素掘り	壺・甕・高坏・玉	2	
7	上天神	4区SK04	高松市上天神町・三条町	扇状地・15.3	後期初頭	1.0×0.4	素掘り	壺・甕・高坏・器台・取手付広方口皿	4	朱付着土器
8	上天神	4区SK05	高松市上天神町・三条町	扇状地・15.8	後期初頭	1.9×0.9	素掘り	壺・甕・高坏・鉢・器台・取手付広方口皿	4	朱付着土器
9	上天神	4区SK06	高松市上天神町・三条町	扇状地・15.8	後期初頭	1.7×0.9	素掘り	壺・甕・鉢	4	
10	林下所・木太中村上所	SK03	高松市林町	扇状地・7.4	後期初頭	1.0×？	素掘り	壺・甕・高坏	5	
11	太田下・須川	A調査区SE2	高松市太田	扇状地・13.5	後期前葉	1.2×1.1	素掘り	把手付広片口皿・壺・甕・器台	本書	朱付着土器・完形土器・体部穿孔
12	空港跡地	SEc01	高松市林	扇状地・17.4	後期前半	(1.2×0.5)	素掘り	壺・甕・高坏・鉢	6	削平を受ける
13	平池南	SK216	丸亀市金倉町	扇状地・？	後期前葉	1.8×1.2	素掘り	壺・甕・高坏・石鏃	7	
14	平池南	SK220	丸亀市金倉町	扇状地・？	後期前半	0.8×1.1	素掘り	壺・甕・台付鉢・削器・木片	7	底部で完形壺。底に木の皮を敷き詰める
15	前田東・中村	C区SE01	高松市前田	扇状地・18.6	後期前半なかごろ	3.6×1.1	素掘り	(底)二股鋤鍬・棒状木製品・壺・甕・鉢・高坏・製塩土器	8	完形土器。体部穿孔
16	天満・宮西	SE02	高松市松縄町	微高地・5.6	後期前半中葉	1.1×0.7	素掘り	壺・甕・高坏・	9	付近の溝から水銀朱付着土器
17	空港跡地	SKh012	高松市林	扇状地・14.4	後期中葉	1.2×0.6	素掘り	甕・壺・高坏・鉢	10	礫含む
18	空港跡地	SXh01	高松市林	扇状地・14.5	後期中葉	1.8×0.5	素掘り	曲柄又鍬・甕・壺・高坏・製塩土器	10	出水状遺構
19	空港跡地	SKh034	高松市林	扇状地・14.2	後期中葉	1.1×0.9	素掘り	壺・甕・高坏・鉢	10	出水状遺構
20	小山・南谷	SE501	高松市新田町	緩丘陵・30.9	後期中葉	2.0×0.2	素掘り	壺・甕・鉢・高坏・製塩土器・器台・鉄器	11	出水状遺構
21	小山・南谷	SE502	高松市新田町	緩丘陵・23.4	後期中葉	1.5×0.2	素掘り	甕・鉢・製塩土器	11	出水状遺構
22	旧練兵場	SK08	善通寺市	微高地・22.8	後期後半古相	2.0×1.6	素掘り	支脚・壺・甕・鉢	12	付近で朱精製容器・青銅器・鍛冶遺構 体部穿孔の完形土器
23	成重	Ⅰ区SE02	東かがわ市白鳥	扇状地・12.2	後期後半古段階	2.0×0.8	素掘り	壺・甕・高坏・鉢	2	短期間で埋没・完形土器
24	川岡	Ⅱ区SX03	高松市岡本町	微高地・45.5	後期後半	2.6×0.6	素掘り	壺・甕・石鏃	13	出水状遺構
25	羽間	SE01	仲多度郡まんのう町	段丘上・78.2	後期後半	2.9×1.1	素掘り	壺・甕	14	
26	羽間	SE02	仲多度郡まんのう町	段丘上・77.8	後期後半	2.3×0.8	素掘り	壺・高坏	14	
27	原間	SEⅤ01	さぬき市大内町	微高地・11.3	後期後半	2.3×0.8	素掘り	壺・甕・鉢・高坏・製塩土器	15	
28	原間	SEⅢ01	さぬき市大内町	微高地・12.2	後期終末	2.4×0.7	素掘り	壺・甕・鉢・製塩土器	15	短期間で堆積・完形土器
29	川津一ノ又	SE01	坂出市川津町	扇状地・8.4	終末期	2.5×0.8	素掘り	壺・甕・小丸壺・高坏	16	完形土器。体部穿孔。出土土器に朱付着
30	天満・宮西	SE01	高松市松縄町	微高地・4.7	終末期	1.1×1.1	素掘り	壺・甕・袋状鉄斧柄	9	土器にベンガラ
31	凹原	SE01	高松市多肥下町	扇状地・17.0	後期末～古墳前期初	1.8×0.5	素掘り	甕	17	
32	日暮・松林	SE01	高松市多肥下町	微高地・20	後期	7.0×0.8	素掘り	小型壺	18	
33	キモンドー	SE02	高松市伏石町	扇状地・9.6	弥生時代	1.8×0.6	素掘り	石鏃・壺？	19	

※時期比定は各報告書に拠る

とができない場合も多い。従って本稿では各報告書中で井戸と記載された資料を中心に集成した。また，土坑や不明遺構とされた遺構のうち，井戸の可能性があると明記されたものについても可能な限り併せて掲載した。後者については遺漏も多かろうと思うが，ご指摘していただき，集成が充実すれば幸いである。今回の集成作業の結果，香川県で弥生時代に属する井戸は13遺跡21例が確認された(5)（Tab. 8）。また，報告書中で井戸の可能性があると記載されたものを含めると19遺跡33例を数える。紙幅の関係から，香川県における井戸の変遷と掘削の契機などについては別稿を用意することとし，以下では本遺構例との比較検討を行うこととする。

完形土器の廃棄は中期中葉の成重遺跡から見られ，終末期まで比較的多くの例が認められる。体部に意図的な焼成後穿孔を行う例は本例のほか，前田東・中村遺跡，川津一ノ又遺跡，旧練兵場遺跡などで見られる。これらは他地域でも広く認められる現象であり，井戸の廃絶に際した儀礼の一つとして広範囲で共有されていたものと考えられる。

注目される事象として，赤色顔料，特に水銀朱付着土器の出土が挙げられる。本例をはじめとして，上天神遺跡，川津一ノ又遺跡で水銀朱付着土器が検出されているほか，天満宮西遺跡では井戸周辺の溝より朱の付着した土器が見られ，旧練兵場遺跡では井戸周辺の住居から水銀朱精製用具と考えられている把手付広片口皿が出土している。近藤が井戸との関連を想定した手工業生産の中でも，水銀朱との関連性が高かった可能性が考えられる。

ただし，井戸の用途は手工業生産に限定されず，日常生活における水の需要を満たすためにも用いられたと考えられる。他地域に比べて井戸の少ない四国地域では，井戸の掘削に特殊な契機が想定できる可能性も考えられるが，手工業生産を主たる目的として井戸が掘削されたと判断するのは，現状の資料からは困難である。類例の増加を待ち判断したい。また，本遺跡例を見ても，水銀朱そのものが井戸の祭祀に用いられた形跡は今のところ認められておらず，あくまでも水銀朱の精製・貯蔵に関連する土器が井戸に廃棄されているという状況が認められるのみであることには注意が必要である。

第２層下位出土器台の存在も特殊な例であり，注目される。最下部からの完形に近い器台の出土は，現在のところ香川県内では類例が認められない。器台の用途については「用途の少なくとも１つが水にかかわる祭祀であった」（宇垣 2000）とする見解が提示されており，本遺構出土の器台も井戸の祭祀に選択的に用いられたことが考えられる。周辺地域の状況を見ると，吉備地域では井戸底から完形の器台が出土する例がある程度認められることが指摘されている（河合 2008）。井戸の廃棄に伴う儀礼に関して，吉備地域と１つの規範が共有された可能性も考えられる。本遺構出土の器台が胎土・色調・文様などから搬入品であると考えられる点も示唆的である。

以上，香川県域の資料との比較から本遺構の位置づけを概観した。弥生時代の四国では井戸が掘削されることは少なく，検出数も少ないことが知られており，香川県も例外ではない。しかし中期中葉以降，確実に井戸は掘削されており，一部では特殊な手工業生産との関連が想定される例もあるなど，集団にとっての井戸の重要性は決して低くなかったものと考えられる。今後は集落の中での配置や住居との関連，さらには井戸掘削の契機などの問題について，検討を重ねる必要があるだろう。

註

（１）下川津遺跡出土の香東川下流域産土器のうち，後期中葉から古墳時代初頭の土器について「下川津Ｂ類」と呼称された。また，森下友子はこの種の胎土を「胎土１類」と呼称し，岩清尾山西南麓を粘土の採取地と推測した（森下 1995）。

（２）「香東川下流域産とは明瞭に区別できる灰白色～黄橙色の胎土を有し，つくりがやや粗雑な土器群」とされる白色系の土器（乗松編 2004）などがある。本遺構からもこうした資料は認められる。

（３）31 をはじめとして，大型鉢は残存状況が最大で１／８程度と悪く，完形品が多数検出された甕や壷とは対照的である（PL. 4- 2）。水銀朱の精製に関連するとされる把手付広片口皿は甕を縦に半裁したような形状を見せることが知られる。遺構の完掘ができておらず，本来は完形に近い形状に復元できる可能性も否定できないが，大型鉢の残存部の形状は皿としての使用も可能な形状であり，破砕されたのち，水銀朱の精製容器として転用された可能性も考えられる。こうした場合には，今回行った試算よりも水銀朱の容量は少なく見積もられるだろう。また，把手付広片口皿を用いた水銀朱の精製の際，加水し，加熱することで不純物を取り除く手法が想定されている（市毛 1998）。内面水銀朱付着位置がこうした行為の結果であるとすれば，内面朱付着部位から導いた水銀朱の容量よりも，加えた水の嵩だけ本来の容量は少なかったことが想定される。

（４）器種組成の算出にあたっては，口縁部残存個体全てを対象にし，（大久保 1995）を参考に器種分類を行い，口径と残存率をもとに組成比を算出した。この際，各細分分類で口径を２cm ごとに分けて残存率の合算を行った。また，100％未満の端数は繰り上げて１個体にカウントした。ただし，本遺構は調査時に遺物全てを取り上げることができたわけではないため，本来の組成比を厳密に反映した数字ではない。

（５）香川県教育委員会の森下英治氏のご教示によると，旧練兵場遺跡に弥生時代後期初頭に属する井戸がもう１基存在するとのことである。報告書の刊行を待ち，集成に追加したい。

〈Tab. 8　香川県弥生時代井戸集成参考文献〉

１．山元素子編 2008『住吉遺跡　渡池跡　北内遺跡　池下遺跡』一般国道 32 号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　香川県教育委員会ほか

２．森格也ほか編 2004『成重遺跡』Ⅰ　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 冊　香川県教育委員会ほか

３．森格也・長井博志編 2005『成重遺跡』Ⅱ　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 54 冊　香川県教育委員会ほか

4. 大久保徹也・森格也編 1995『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第６冊　香川県教育委員会ほか

５．小川賢編 2004『津内・東井坪遺跡，中森遺跡，林谷遺跡，林下所遺跡，林下所・木太今村上所遺跡，林下所，六条乾遺跡，六条上川西遺跡，六条西村遺跡』四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松市教育委員会

６．廣瀬常雄・西岡達哉編 1996『空港跡地遺跡』Ⅰ　空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　香川県教育委員会ほか

７．蔵本晋司編 1995『平池南遺跡』陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　香川県教育委員会ほか

８．森格也・古野徳久編 1995『前田東・中村遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告第３冊　香川県教育委員会ほか

９．川畑聰編 2002『天満・宮西遺跡～集落・水田編～』太田第２地区画整理事業に伴う埋蔵文化財

発掘調査報告第６冊　高松市教育委員会
10. 乗松真也編 2004『空港跡地遺跡』Ⅷ　空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第８冊　香川県教育委員会ほか
11. 片桐孝浩編 2006『小山・南谷遺跡』Ⅱ　県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　香川県教育委員会
12. 森下英治編 2003『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報』1　平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告　（財）香川県埋蔵文化財調査センター
13. 山元素子編 2004『川岡遺跡』県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　香川県埋蔵文化財センター
14. 宮崎哲治編 2007『羽間遺跡」一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　香川県埋蔵文化財センター
15. 片桐孝浩編 2002『原間遺跡』Ⅰ　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第39冊　香川県教育委員会ほか
16. 古野徳久編 1998『川津一ノ又遺跡』Ⅱ　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊　（財）香川県埋蔵文化財センター
17. 川畑聰編 2002『凹原遺跡』太田第２地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　高松市教育委員会
18. 山本英之・中西克也編 1997『日暮・松林遺跡』都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松市教育委員会
19. 山本英之・中西克也編 1999『キモンドー遺跡』太田第２土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松市教育委員会

〈主要参考文献〉

市毛勲 1998『新版　朱の考古学』雄山閣出版
宇垣匡雅 2000「鋸歯文をもつ土器－吉備の農耕儀礼と葬送儀礼」『考古学研究』第47巻第２号　考古学研究会
梅木謙一 2004「四国の弥生中期中葉～後期前葉の土器」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会
大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会ほか
大久保徹也 1995「上天神遺跡における弥生後期土器の構成」『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第６冊　香川県教育委員会ほか
大久保徹也 1998「弥生時代の内面朱付着土器」『考古学ジャーナル』No.438　特集■考古資料としての赤色顔料
大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社
岡山真知子 1998「弥生時代の水銀朱の生産と流通」『考古学ジャーナル』No.438　特集■考古資料としての赤色顔料
片桐孝浩 2006「弥生時代後期初頭～中葉の土器」『小山・南谷遺跡』Ⅱ　県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　香川県教育委員会ほか
鐘方正樹 2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧　同成社
佐藤竜馬 1992「出水状遺構について」『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成４年度（財）香川県埋蔵文化財調査センター

河合忍 2008「岡山県における弥生から古墳時代前期の井戸」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第 57 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会ほか

北山健一郎・森下友子編 1995『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　香川県教育委員会ほか

清水渉 1995「弥生時代の井戸出土遺物について」『平池南遺跡』 陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　香川県教育委員会ほか

地学団体研究会・新版地学事典編集委員会編 1996『新版地学事典』平凡社

信里芳紀 2004「讃岐地方における弥生中期の土器編年 - 凹線文期を中心にして - 」『弥生中期土器の併行関係』第 53 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会

信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年 - 凹線文期を中心にして - 」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ｉ　香川県埋蔵文化財センター

信里芳紀 2006「太田下・須川遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成 17 年度　香川県教育委員会

乗松真也編 2004『空港跡地遺跡』Ⅷ　空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第８冊　香川県教育委員会ほか

乗松真也 2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』第２号　香川県歴史博物館

古野徳久 2002「コトデン高架建設」『埋蔵文化財試掘調査報告』ＸＶ　香川県内遺跡発掘調査　香川県教育委員会

堀大介 1999「手工業生産に伴う井戸について」『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志社大学考古学シリーズⅦ

堀大介 2008「井戸の総論と諸問題」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第 57 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会ほか

松原聰 2003 『フィールドベスト図鑑』15　日本の鉱物　学習研究社

真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社

森下友子 1995「胎土１類土器について」『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　香川県教育委員会ほか

Tab. 9　太田下・須川遺跡　出土遺物観察表

＊法量の( )は，残存値を示す。

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒斑	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
1	A区	SE2	弥生土器	広口壺	19.8	(6.7)	-	口縁端部:凹線2 ナデ	ナデ，指押え	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/3	やや粗	3mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	赤色顔料付着
2	A区	SE2	弥生土器	広口壺	19.4	(5.7)	-	口縁端部:凹線2 ナデ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	黒褐 10YR3/1	やや密	2mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
3	A区	SE2	弥生土器	広口壺	13.4	(5.0)	-	口縁部:磨滅 頸部:ナデ	磨滅	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	やや粗	1～2mmの石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
4	A区	SE2	弥生土器	直口壺	15.6	(5.9)	-	縦方向のハケ後横方向のヘラミガキ	ナデ	鈍い黄橙 10YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	
5	A区	SE2	弥生土器	直口壺	11.9	(19.1)	-	頸部:凹線4，口縁～体部上半:磨滅，体部中位:横方向のヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ，頸～体部上半:板ナデ，指押え，体部下半:ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	有	無	
6	A区	SE2	弥生土器	直口壺	9.6	(9.3)	-	凹線6	指押え，爪形圧痕	鈍い黄褐 10YR4/3	鈍い黄褐 10YR4/3	密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良好	無	有	爪圧痕有り
7	A区	SE2	弥生土器	直口壺	15.0	(6.1)	-	ナデ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや粗	1mm以下の石英，長石，金雲母，角閃石を含む	良	無	無	
8	A区	SE2	弥生土器	小型壺	-	(5.6)	-	ヘラミガキ	ナデ，ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR6/3	鈍い黄褐 10YR6/3	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	
9	A区	SE2	弥生土器	壺 頸部	-	(6.9)	-	磨滅	指ナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	黒N2/0	粗	3mm以下の石英，長石，雲母，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
10	A区	SE2	土師器	甕	18.0	(4.0)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄橙 10YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	胎土中に角閃石を含まない，内面に赤色顔料付
11	A区	SE2	弥生土器	甕	13.4	(7.8)	-	ナデ 口縁端部:凹線2	口縁部:ヨコナデ，頸～体部上端:指押さえ，体部上半:ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
12	A区	SE2	弥生土器	甕	13.6	(3.1)	-	口縁端部:凹線2 ナデ，磨滅	ナデ，磨滅	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	角閃石を含まない
13	A区	SE2	弥生土器	甕	14.0	(8.1)	-	口縁部:ナデ，体部上半:横方向のハケ後縦方向のハケ	口縁部:ナデ 体部上半:指押さえ，ヘラケズリ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	やや粗	3mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	有	無	
14	A区	SE2	弥生土器	甕	15.0	(3.5)	-	口縁端部:凹線2，口縁部下端:粘土接合痕，体部上半:ハケ後ナデ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:指押え	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	赤色顔料？付着
15	A区	SE2	弥生土器	甕	16.4	(5.8)	-	口縁～体部上半:ヨコナデ	口縁～体部上端:ヨコナデ 体部上半:ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良好	無	無	
16	A区	SE2	弥生土器	甕	16.8	(4.0)	-	口縁端部:凹線2，口縁部:ヨコナデ，体部上半:ナデ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:指押え，ナデ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良好	無	無	
17	A区	SE2	弥生土器	甕	13.2	(1.7)	-	磨滅	磨滅	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
18	A区	SE2	弥生土器	甕	24.0	(5.4)	-	磨滅	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	2mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
19	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.4)	6.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	褐灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR5/2	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
20	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.3)	4.8	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/3	灰黄褐 10YR4/2	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
21	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(3.1)	10.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	有	無	
22	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(5.6)	-	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い黄橙 10YR6/4	粗	5mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	胎土がかなり粗い，角閃石を含まない
23	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.5)	6.8	ナデ，磨滅	磨滅	鈍い赤褐 2.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR6/3	やや粗	1～2mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
24	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(2.1)	6.6	ヘラミガキ，指押え	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR4/3	鈍い黄褐 10YR5/3	密	1mm以下の石英，長石，金雲母，角閃石を含む	良	有	無	
25	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(3.7)	6.2	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1～2mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
26	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(3.0)	5.6	指押え	磨滅	鈍い橙 2.5YR6/4	灰白 2.5Y7/1	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	不良	有	無	角閃石を含まない
27	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(2.7)	6.4	ハケ，ナデ	ヘラケズリ	鈍い赤褐 5YR5/3	褐灰 7.5YR4/1	やや粗	1～2mmの石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	有	無	
28	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(3.9)	6.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ，指押え	鈍い褐 7.5YR5/4	黒褐 10YR3/2	やや粗	3mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
29	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(6.0)	6.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	黒褐 10YR3/1	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
30	A区	SE2	弥生土器	片口鉢か	－	(6.0)	－	凹線2，ハケ，ナデ	ヘラミガキ	鈍い褐 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	内面に赤色顔料付着
31	A区	SE2	弥生土器	鉢	32.8	(21.2)	－	口縁端部:凹線2，口縁部:ヨコナデ，体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ，体部上端:ハケ，体部:ヘラケズリ，磨耗或はヘラミガキ？	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや粗	3mm以下の長石，雲母，角閃石，金雲母，赤褐色粒を含む	良	無	有	内面に赤色顔料付着
32	A区	SE2	弥生土器	底部	－	(4.9)	10.0	磨滅	磨滅	鈍い黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	粗	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
33	A区	SE2	弥生土器	高杯杯部	20.4	(2.8)	－	磨滅	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い橙 7.5YR7/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
34	A区	SE2	弥生土器	高杯杯部	19.8	(3.5)	－	磨滅	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
35	A区	SE2	弥生土器	高杯杯部	－	(5.2)	－	磨滅	磨滅	明赤褐 5YR5/6	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	3mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
36	A区	SE2	弥生土器	器台or高杯	－	(2.0)	－	磨滅 端部:凹線1，竹管文	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR6/2	密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
37	A区	SE2	弥生土器	高杯杯部	26.4	(3.1)	－	ナデ 杯部:ヘラミガキ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
38	A区	SE2	弥生土器	高杯杯部	－	(3.5)	－	磨滅	ナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	密	1mm以下の石英，長石，金雲母，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	金雲母が顕著，円盤粘土が剥離
39	A区	SE2	弥生土器	高杯杯部	29.0	(2.7)	－	磨滅 口縁端部:凹線3	ナデ	灰褐 7.5YR6/2	鈍い褐 7.5YR5/3	やや粗	1mm以下の石英，長石，金雲母，角閃石を含む	良	無	無	
40	A区	SE2	弥生土器	高杯脚部	－	(10.5)	－	ヘラミガキ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	褐灰 10YR4/1	粗	1～2mmの石英，長石，雲母を含む	良	無	無	赤色顔料？付着，角閃石含まない
41	A区	SE2	弥生土器	高杯脚部	－	(10.0)	－	縦方向のヘラミガキ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや粗	2mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	有	無	
42	A区	SE2	弥生土器	高杯脚部	－	(5.2)	16.0	円孔，ナデ 裾端部:凹線1	ナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR6/3	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	
43	A区	SE2	弥生土器	高杯脚部	－	(3.9)	18.0	ヘラミガキ 裾端部:凹線2	ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/3	やや粗	3mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
44	A区	SE2	弥生土器	体部	－	(7.0)	－	櫛描波状文，櫛描直線文	指押え	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	赤色顔料？
45	A区	SE2	弥生土器	広片口皿	－	(6.0)	－	ハケ	指押え，ヘラケズリ，磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/4	密	1mm以下の石英，長石，雲母，角閃石を含む	良好	無	有	内面に赤色顔料付着
46	A区	SE2	弥生土器	広口壺	15.8	(4.5)	－	ナデ	ナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
47	A区	SE2	弥生土器	広口壺	10.7	22.1	7.3	口縁端部:凹線3～4，竹管文 頸部:凹線3～4，体部上半:ハケ，体部中位:横方向のヘラミガキ・櫛描刺突文，体部下半:縦方向のヘラミガキ底部磨滅	口縁部:竹管文 口～頸部:ヨコナデ 体部上半:絞り目，指押え 体部下半～底部:ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/4	密	2mm以下の石英，長石，雲母，角閃石，赤褐色粒を含む	良好	有	有	体部中位に焼成後の穿孔2

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
48	A区	SE2	弥生土器	広口壺	16.6	(24.6)	-	口縁端部:凹線3, 口縁部:ヨコナデ, 体部:ハケ, 体部中位:列点文	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:指押え, 体部下半:ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/3	黒褐 7.5YR3/2	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	内外面に赤色顔料付着
49	A区	SE2	弥生土器	広口壺	16.0	25.8	5.0	口縁端部:凹線2, 口縁～頸部:ヨコナデ, 頸部～体部上半:板状工具による押圧, 体部下半:ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ, 頸部～体部上半:指押え, 体部中位:板状工具による押圧, 体部下半:ヘラケズリ後ヘラミガキ	鈍い赤褐 5YR4/4	鈍い赤褐 5YR4/4	密	2mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	体部に焼成後の穿孔2
50	A区	SE2	弥生土器	広口壺	12.7	25.4	7.0	口縁部:ヨコナデ, 頸部との境に指押え, 頸部:粗いヘラミガキ, 体部との境に指押え, 体部:粗いヘラミガキ, 底部:指	口縁部:ヨコナデ, 頸部:指押え, ナデ, 体部上半:絞り目, 体部下半:ヘラケズリ 底部:未調整	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR4/3	密	3mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	体部下半に焼成後の穿孔1
51	A区	SE2	弥生土器	直口壺	9.7	19.8	5.6	口縁部:ヨコナデ 頸部～体部上半:ヘラミガキ 体部下半:ヘラケズリ後ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:指押え, 体部中位:指ナデ, 体部下半:ヘラケズリ	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/4	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	
52	A区	SE2	弥生土器	脚付直口壺	9.8	(19.9)	-	磨滅	口～頸部:磨滅, 頸部～体部上半:ナデ, ヘラケズリ, 体部中位:指押え, ナデ, 体部下半:ナデ, 底部:接合痕(円	鈍い橙 7.5YR7/4	褐灰 10YR4/1	やや粗	2～3mmの石英, 長石, 赤褐色粒を含む	良	無	無	角閃石を含まない
53	A区	SE2	弥生土器	直口壺	15.6	(6.8)	-	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
54	A区	SE2	弥生土器	広口壺	20.8	(10.2)	-	ナデ, ハケ	ナデ, ハケ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	有	無	
55	A区	SE2	弥生土器	直口壺	13.4	(10.0)	-	口縁部:ヨコナデ 頸部:粗い縦方向のハケ	指ナデ, 横方向のハケ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	有	無	
56	A区	SE2	弥生土器	直口壺	7.4	(6.9)	-	ナデ 口縁端部:凹線1 頸部:凹線2	ナデ	明赤褐 2.5YR5/6	鈍い赤褐 5YR5/3	粗	3mm以下の石英, 長石を含む	良	無	無	角閃石を含まない
57	A区	SE2	弥生土器	直口壺	10.0	(5.0)	-	凹線5	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	やや密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	無	無	
58	A区	SE2	弥生土器	直口壺	9.0	(7.9)	-	凹線11	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	黒褐 10YR3/1	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	有	無	
59	A区	SE2	弥生土器	直口壺	-	(6.4)	-	斜線文	ナデ, 指押え	鈍い赤褐 5YR5/3	鈍い赤褐 5YR5/4	やや粗	1～2mmの石英, 長石, 金雲母を含む	良	無	無	角閃石を含まない
60	A区	SE2	弥生土器	直口壺	-	(13.2)	-	頸部:タテハケ後3条の凹線文と斜線文	頸部:指押え, ナデ 体部上端:ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/4	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
61	A区	SE2	弥生土器	無頸壺	12.4	16.0	6.6	口縁部:ヨコナデ 体部:磨滅, ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:板ナデ(指押え, ハケ) 体部下半:ヘラケズリ	赤7.5R4/8	赤7.5R4/8	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	外面に破裂痕, 体部下半に焼成後の穿孔1
62	A区	SE2	弥生土器	壺底部	-	(18.2)	7.4	ナデ, 上端に斜線文	体部上半:指押え, 体部下半:ナデ, 底部:指押え	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/3	密	2mm以下の長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	
63	A区	SE2	弥生土器	壺頸部	-	(6.2)	-	斜線文	指ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	角閃石の含有量少ない
64	A区	SE2	弥生土器	短頸壺	17.2	29.3	6.7	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:ハケ後ナデ, 体部下半:ヘラケズリ後ナデ, 底部:ハケ(板ナデ)	口縁部:ヨコナデ 体部上半:ハケ後ナデ, 指押え 体部下半:ナデ	鈍い黄橙 10YR7/4	鈍い黄橙 10YR7/3	密	4mm以下の石英, 長石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	胎土中に雲母・角閃石をほとんど含まない, 体部下半に焼成後の穿孔1
65	A区	SE2	弥生土器	無頸壺	5.5	8.0	2.7	口縁部:ヨコナデ, 2個1組の穿孔2箇所 体部:ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:ナデ, 体部中位:粘土紐接合痕, 体部下半:ヘラ	鈍い褐 7.5YR5/4	黒褐 10YR3/1	密	2mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良好	有	有	体部外面に破裂痕
66	A区	SE2	弥生土器	細頸壺	-	(12.7)	4.5	頸部:ナデ 体部:ヘラミガキ, 中位にハケ	頸部:板ナデ 体部:ヘラミガキ, 指ナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	黒褐 10YR3/1	密	3mm以下の長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	無	無	口頸部欠損, 体部下半に焼成後の穿孔1
67	A区	SE2	弥生土器	壺体部	-	(7.8)	-	円形浮文	ナデ	鈍い黄褐 10YR4/3	褐灰 10YR4/1	やや密	2mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
68	A区	SE2	弥生土器	壺体部	-	(14.2)	-	円形浮文, ナデ	ナデ(板ナデか)	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/3	やや粗	3mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	外面に赤色顔料?付着
69	A区	SE2	弥生土器	甕	-	(2.5)	-	刻目突帯	摩滅	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄褐10YR7/2	やや粗	1mm以下の石英, 長石を含む	良	無	無	

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
70	A区	SE2	弥生土器	甕	16.6	(2.5)	-	ヨコナデ或はヘラミガキ	ヨコナデ或はヘラミガキ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	無	無	
71	A区	SE2	弥生土器	甕	14.6	(16.4)	-	口縁端部:凹線1 体部:縦方向のハケ, ナデ, ヘラミガキ	体部上半:指ナデ 体部下半:ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR7/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	無	無	
72	A区	SE2	弥生土器	甕	12.7	23.2	5.6	口縁端部:凹線2, 口縁部:ヨコナデ, 体部上半:タタキ後ハケ？, 体部下半:ハケ後ヘラミガキ	口縁部:ハケ, 体部上半:指押え, 体部下半:ヘラケズリ, 底部:ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 5YR6/3	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良好	有	有	
73	A区	SE2	弥生土器	甕	11.8	(6.5)	-	口縁端部:凹線2	体部:ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR6/3	密	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	
74	A区	SE2	弥生土器	甕	19.0	(4.1)	-	口縁端部:凹線2 ナデ	ナデ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	無	無	
75	A区	SE2	弥生土器	甕	13.8	(8.2)	-	口縁端部:凹線2 体部:ハケ, 列点文	体部:ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	褐 7.5YR4/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	有	有	
76	A区	SE2	弥生土器	甕	15.0	(6.2)	-	口縁端部:凹線1, 口縁部:ヨコナデ, 体部:タタキ後縦方向のハケ	口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ, 指押え	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	
77	A区	SE2	弥生土器	甕	15.0	(6.2)	-	口縁端部:凹線2, 口縁部:ヨコナデ, 体部上半:ハケ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:縦方向のハケ後指押え	鈍い褐 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR5/2	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	
78	A区	SE2	弥生土器	甕	13.0	(2.7)	-	ナデ 口縁端部:凹線2	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	
79	A区	SE2	弥生土器	甕	16.0	(3.3)	-	口縁端部:凹線1, 磨滅	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	
80	A区	SE2	弥生土器	甕	18.6	(4.2)	-	口縁端部:凹線1 口縁部下端～体部上半:ナデ	ナデ 体部上半:ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや粗	1～3mmの石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	無	無	
81	A区	SE2	弥生土器	甕	13.3	(14.8)	-	体部:タタキ或は横方向のハケ後縦方向のハケ	指押え, ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	有	
82	A区	SE2	弥生土器	甕	14.0	27.1	7.0	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:タタキ後ナデ, 体部下半:ヘラミガキ, 底部:ナデ	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:指押え, 体部中位:板ナデ, 横方向のヘラケズリ, 体部下半:縦方向のヘラケズリ, 底部:	明褐 7.5YR5/6	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	有	有	
83	A区	SE2	弥生土器	甕	13.9	18.9	4.7	口縁部:ナデ 体部:ハケ	口縁部～体部上端:ナデ 体部:ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/4	灰黄褐 10YR6/2	密	1mm以下の長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	有	
84	A区	SE2	弥生土器	甕	14.3	(4.2)	-	口縁端部:凹線2, 口縁部:ヨコナデ, 体部上半:ハケ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:ヘラケズリ	暗褐 7.5YR3/4	黒褐 7.5YR3/1	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
85	A区	SE2	弥生土器	甕	13.6	(5.0)	-	口縁端部:凹線4 体部上半:ハケ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
86	A区	SE2	弥生土器	甕	15.6	(6.6)	-	ナデ 体部:ハケ	口縁部:ナデ 体部:ヘラケズリ後指押え	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
87	A区	SE2	弥生土器	甕	19.0	(9.8)	-	口縁部:ナデ 体部上半:ハケ	口縁部:ナデ, 体部上端:粘土接合痕, 体部上半:指押え後ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
88	A区	SE2	弥生土器	甕	19.6	(4.7)	-	口縁端部:凹線2 体部上半:ナデ, ハケ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/4	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	赤色顔料？付着
89	A区	SE2	弥生土器	甕	15.6	(15.0)	-	口縁端部:凹線3, 体部上半:縦方向のハケ, 体部下半:縦方向のヘラミガキ	指押え, ナデ, ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い黄橙 10YR5/3	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	赤色顔料？付着
90	A区	SE2	弥生土器	甕	12.7	22.2	5.4	口縁部:ヨコナデ, 頸～体部上半:ハケ(工具ナデ)後ナデ, 体部下半:ヘラミガキ, 底部:磨滅	口縁部:ヨコナデ, 頸部:ハケ(工具ナデ), ナデ, 体部上半:指押え, ハケ(工具ナデ), 体部下半:ヘラケズリ	鈍い橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	有	有	体部中位に焼成後の穿孔1, 内面に鉄分沈着
91	A区	SE2	弥生土器	甕	12.8	23.2	5.7	口縁部:ヨコナデ, 体部:磨滅, 下端に板ナデ, 底部:ナデ	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:横方向のヘラケズリ, 体部下半:縦方向のヘラケ	鈍い黄橙 10YR5/4	鈍い黄橙 10YR5/4	やや粗	4mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	胎土中に砂礫を多く含む, 体部下半に焼成後の穿孔1
92	A区	SE2	弥生土器	甕	16.0	29.1	6.3	口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:指押え, ナデ, 体部下半:ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/4	密	2mm以下の長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	
93	A区	SE2	弥生土器	甕	15.0	26.5	6.1	口縁部:ヨコナデ, 磨滅 体部:磨滅, 下半にハケ	口縁部:ヨコナデ, 体部上端:指押え, ナデ, 体部:縦方向のヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR5/4	暗灰黄 2.5Y4/2	やや粗	3mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	有	体部下半に焼成後の穿孔1
94	A区	SE2	弥生土器	甕	13.6	(7.7)	-	口縁端部:凹線2, 口縁部:ヨコナデ 体部上半:ハケ	口縁部:ヨコナデ, 体部上半:ハケ, 指押え, 体部中位:ヘラケズリ	鈍い橙 7.5YR7/4	鈍い橙 7.5YR7/3	やや密	1mm以下の石英, 長石を含む	良	無	無	内面に付着物, 赤色顔料か, 角閃石を含まない

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
95	A区	SE2	弥生土器	甕	19.6	(7.0)	-	体部:ハケ	体部:指ナデ, 爪形圧痕	鈍い赤褐 5YR5/3	鈍い赤褐 5YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	有	
96	A区	SE2	弥生土器	甕	22.9	(6.1)	-	口縁端部:凹線2 体部上半:縦, 横方向のヘラミガキ	ナデ	鈍い黄褐 10YR5/4	黒褐 10YR3/2	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
97	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(8.2)	7.0	ハケ	磨滅	鈍い橙 5YR6/4	鈍い黄橙 10YR7/2	やや密	1mm以下の石英, 長石を含む	良	無	無	角閃石を含まない
98	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(7.4)	8.2	ハケ	ハケ後ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い黄橙 10YR7/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	有	
99	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(5.6)	7.4	磨滅	ヘラケズリ	鈍い橙 5YR7/3	黒褐 10YR3/1	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	有	
100	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(7.0)	9.1	ヘラミガキ	ヘラケズリ	灰褐 7.5YR4/2	黒褐 7.5YR3/1	密	2mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	有	内面に赤色顔料付着
101	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(3.6)	8.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	有	無	
102	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.5)	7.4	ハケ, ナデ	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
103	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(8.4)	6.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	無	無	
104	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(4.9)	5.8	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/3	黒褐 2.5Y3/1	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	有	
105	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(3.6)	5.8	磨滅	ヘラケズリ	褐 7.5YR4/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	有	無	
106	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.8)	5.1	ナデ,ハケ	ヘラケズリ	鈍い赤褐 5YR4/2	鈍い赤褐 5YR4/3	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	
107	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.3)	5.2	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い赤褐 2.5YR4/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
108	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.7)	6.4	磨滅	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	有	無	
109	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(2.8)	6.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
110	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(3.1)	5.8	ヘラミガキ	ヘラケズリ	灰褐 7.5YR4/2	鈍い赤褐 5YR4/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	有	
111	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(3.5)	7.6	ヘラミガキ, 指押え	ヘラケズリ, ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	有	無	
112	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(6.2)	5.2	ヘラミガキ, 指押え	ヘラケズリ, ナデ	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	底部外面に藁？の押圧痕
113	A区	SE2	弥生土器	鉢	28.7	(6.7)	-	指押え, ナデ, ヘラミガキ	ヘラケズリ, ナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石を含む	良	有	無	
114	A区	SE2	弥生土器	鉢	29.0	(5.9)	-	凹線4	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	密	1mm以下の長石, 雲母, 角閃石を含む	良	無	無	
115	A区	SE2	弥生土器	鉢	18.2	(3.7)	-	ハケ, 横方向のナデ或はヘラミガキ	磨滅	鈍い黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	有	
116	A区	SE2	弥生土器	鉢	22.0	(5.9)	-	口縁端部:凹線2 ヘラミガキ？	ナデorヘラミガキ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	有	無	
117	A区	SE2	弥生土器	小型鉢	12.2	(8.7)	-	粗いハケ後細かいハケ	粘土接合痕, ヘラケズリ	灰褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR4/2	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	有	無	
118	A区	SE2	弥生土器	広片口皿 片口部	-	(3.5)	-	口縁端部:ケズリ　体部上半:ヘラミガキ	ヘラミガキ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	内面ヘラミガキ精緻で単位見えず
119	A区	SE2	弥生土器	広片口皿	-	(7.4)	-	ハケ	ヘラケズリ, 磨耗或はヘラミガキ	鈍い黄橙 10YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良好	無	有	内面に赤色顔料付着
120	A区	SE2	弥生土器	広片口皿	-	(6.8)	-	口縁端部:ケズリ　体部上半:指押え	ヘラミガキ	褐10YR4/1	鈍い褐 7.5YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
121	A区	SE2	弥生土器	高杯	30.4	18.2	15.9	口縁端部:凹線2, 口縁部:ナデ, 杯部:分割ヘラミガキ, 脚部:指押え, ヘラミガキ, 上段に3箇所, 下段に2個1組で4箇所の円孔, 裾部:ナデ, 裾端部:凹線1	口縁部:ナデ 杯部:分割？ヘラミガキ 脚部:ヘラケズリ	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	密	2mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	有	無	杯部内外面に赤色顔料付着
122	A区	SE2	弥生土器	高杯 杯部	20.4	(2.8)	－	ナデ 口縁端部:凹線2	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	赤色顔料付着
123	A区	SE2	弥生土器	高杯 杯部	22.0	(3.1)	－	ナデ 杯部:ハケ	杯部:ハケ後ヘラミガキ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い黄褐 5YR5/4	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
124	A区	SE2	弥生土器	高杯 杯部	－	(3.8)	－	ナデ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	
125	A区	SE2	弥生土器	高杯 杯部	－	(3.4)	－	ヘラミガキ 杯部底にヘラ状工具痕	杯部:ヘラミガキ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
126	A区	SE2	弥生土器	高坏 脚部	－	(10.3)	－	ヘラミガキ	ナデ	鈍い黄橙 10YR6/4	黄灰 2.5Y5/1	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
127	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(10.2)	－	磨滅	指ナデ	鈍い褐 7.5YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	無	無	
128	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(7.8)	－	縦方向のハケ	ナデ, 粘土接合痕	鈍い橙 7.5YR7/3	鈍い橙 7.5YR7/3	密	1mm以下の石英, 長石を含む	良好	無	無	角閃石を含まない
129	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(7.2)	－	ヘラミガキ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	杯部と接合した際の粘土の剥離痕有り
130	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(5.5)	－	円孔, ヘラミガキ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	密	1mm以下の石英, 長石, 金雲母, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	無	無	
131	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(3.9)	－	ヘラミガキor ヘラケズリ	ナデ	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	内外断面全てが黒変
132	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(12.0)	13.4	上・下段に各々円孔3, 裾部:ハケ, 裾端部:凹線2	ヘラケズリ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良	無	無	外面裾端部に赤色顔料付着
133	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(9.0)	14.6	円孔:上段1, 下段4箇所現存 ヘラミガキ	指押え, ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR5/3	鈍い黄橙 10YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 金雲母, 角閃石, 赤色粒を含む	良	有	無	
134	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(4.5)	15.6	円孔	ヘラケズリ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR4/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	無	
135	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(3.2)	16.0	ヘラミガキ 裾端部:ヨコナデ, 上端に円孔1	ヨコナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/4	密	2mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良好	有	無	外面裾端部に赤色顔料付着
136	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(9.7)	16.8	ハケ, ヘラミガキ, 円孔5	上半:ヘラケズリ 下半:ナデ？, ヘラミガキ？	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/3	やや粗	1～2mmの石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	有	無	
137	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(3.2)	22.0	磨滅	磨滅	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良好	無	無	
138	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(1.5)	19.2	ナデ 裾端部:凹線2	ナデ	鈍い褐 7.5YR6/3	灰褐 7.5YR5/2	密	1mm以下の石英, 長石, 金雲母, 角閃石を含む	良	無	無	
139	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(2.6)	23.2	裾部:ヘラミガキ, 円孔1 裾端部:ヨコナデ	ヘラケズリ, ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	密	1mm以下の長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良好	無	有	外面裾端部に赤色顔料付着
140	A区	SE2	弥生土器	高杯 脚部	－	(2.2)	18.0	裾端部:凹線1	ヨコナデ, ハケ目が残る	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
141	A区	SE2	弥生土器	直口壺	15.8	29.8	9.0	口縁端部:凹線2, 口縁部:ヨコナデ, 指押え, 頸部:斜線文, 体部上半:ハケ, 磨滅, 体部下半:ハケ後ヘラミガキ, 底部:ナデ	口縁部:ヨコナデ, 頸部:指押え, 絞り目, 体部上半:指押え, 体部下半:ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/3	密	2mm以下の石英, 長石, 雲母, 角閃石, 赤褐色粒を含む	良好	有	有	
142	A区	SE2	弥生土器	器台	32.5	(22.8)	－	口縁端部:鋸歯文, 竹管文 口縁部:粘土紐接合痕, ヨコナデ 筒部:上, 中, 下位に凹線による区画, 文様帯は刺突文, 鋸歯文などの線刻による, 方形透かしは, 上(下)段に4方向, 下端には円形透かしを(4方向？)施す	口縁部～筒部上位:ヨコナデ 筒部:指押え, 指ナデ, 下端にハケ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英, 長石, 雲母を含む	良好	有	無	角閃石を含まない, 結晶片岩？含む, 筒部上段の凹線に一部赤色顔料付着

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
143	A区	SE2	弥生土器	広口壺	14.0	(5.7)	-	磨滅	磨滅 絞り目	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
144	A区	SE2	弥生土器	広口壺	16.0	(7.9)	-	口縁部:粘土接合痕 頸部:縦方向のハケ後ナデ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	2mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
145	A区	SE2	弥生土器	甕	13.1	(12.6)	-	口縁部:ヨコナデ，体部上半:ハケ，体部中位:ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ，口縁部:ヨコナデ，体部上半:ナデ，体部下半:ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR7/3	鈍い黄橙 10YR7/2	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	角閃石を含まない
146	A区	SE2	弥生土器	甕	20.4	(18.5)	-	口縁部:指押え，粗いハケ，体部上半:粗いハケ，体部下半:細かいハケ	ハケ，ヘラケズリ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや密	2mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
147	A区	SE2	弥生土器	甕	14.0	(13.8)	-	口縁端部:凹線1 ハケ，ヘラミガキ	体部上半:指押え 体部下半:ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
148	A区	SE2	弥生土器	壺 体部	-	(14.5)	7.0	列点文，ヘラミガキ	ナデ，指押え	鈍い橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	やや粗	4mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	角閃石の含有量少ない
149	A区	SE2	弥生土器	甕	16.0	(16.2)	-	口縁端部:凹線1 体部上半:ナデ	体部上半:ナデ	鈍い黄橙 10YR5/3	鈍い黄橙 10YR5/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
150	A区	SE2	弥生土器	甕	21.2	(5.8)	-	ナデ 口縁端部:凹線2	指押え	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	
151	A区	SE2	弥生土器	甕	14.6	(4.3)	-	口縁部:ヨコナデ 体部上半:指ナデ	口縁部:ヨコナデ 体部上半:ヘラケズリ	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/4	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
152	A区	SE2	弥生土器	甕	16.6	(7.3)	-	口縁端部:凹線1 磨滅	体部:ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/4	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	有	
153	A区	SE2	弥生土器	甕	14.8	27.8	7.1	口縁端部:凹線1，体部上半:ハケ，体部中位:列点文，体部下半:縦方向のヘラ	体部上半:指押え 体部下半:ヘラケズリ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い褐 7.5YR6/3	やや粗	1～3mmの石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	赤色顔料？付着
154	A区	SE2	弥生土器	鉢	35.0	(12.5)	-	口縁部～体部上半:ヨコナデ，ハケ？ 体部下半:ハケ	口縁部:ヨコナデ 体部:磨滅，指押え	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	やや粗	2mm以下の長石，雲母，角閃石，赤褐色粒を含む	良	無	無	内面に赤色顔料付着
155	A区	SE2	弥生土器	鉢	40.6	(18.8)	-	口縁部:ヨコナデ，体部上半:指押え，ハケ，体部下半:ハケ後ヘラミガキ	口縁部:ヨコナデ，体部上半:ヘラミガキ，体部下半:横方向のヘラミガキ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR5/3	やや粗	2mm以下の長石，雲母，角閃石，金雲母を含む	良	無	有	内面に赤色顔料付着
156	A区	SE2	弥生土器	直口壺	11.2	(20.5)	-	口縁部:ヨコナデ，頸部:凹線文，刻目文，体部上半:竹管文，体部中位:横方向のヘラミガキ，体部下半:縦方向のヘ	口縁部:ヨコナデ 頸～体部上半:指押え，指ナデ 体部下半:ヘラケズリ	鈍い橙 5YR6/4	鈍い橙 5YR6/4	やや粗	2mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	角閃石を含まない
157	A区	SE2	弥生土器	甕	12.8	(5.2)	-	体部上半:ハケ	ナデ 体部上半:指押え	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR6/3	密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
158	A区	SE2	弥生土器	甕	15.0	(2.8)	-	口縁端部:凹線1 体部ハケ後口縁部ヨコナデ	口縁部:ヨコナデ 体部上端:指押え，ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	
159	A区	SE2	弥生土器	甕	18.8	(3.9)	-	口縁端部:凹線2，口縁下端～体部:ヨコナデ，体部上半:ハケ	ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	角閃石を含まない
160	A区	SE2	弥生土器	甕	17.0	(4.3)	-	口縁端部:凹線2，口縁部:ナデ	ナデ	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	やや粗	2mm以下の石英，長石，雲母を含む	良	無	有	角閃石を含まない
161	A区	SE2	弥生土器	不明 口縁部	22.6	(1.6)	-	ナデ	ナデ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
162	A区	SE2	弥生土器	甕	-	(3.7)	-	磨滅	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
163	A区	SE2	弥生土器	底部	-	(3.4)	8.0	磨滅	ヘラケズリ	灰黄褐 10YR6/2	鈍い黄橙 10YR6/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
164	A区	SE2	弥生土器	鉢	19.8	(5.6)	-	ハケ	ヘラミガキ	鈍い褐 7.5YR5/3	褐灰 10YR4/1	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	有	無	
165	A区	SE2	弥生土器	高杯 坏部	28.1	(3.6)	-	口縁端部:凹線2，口縁部:ナデ，杯部:ヘラミガキ	ナデ 杯部:ヘラミガキ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
166	A区	SE2	弥生土器	高杯 杯部	26.2	(2.5)	-	ナデ 口縁端部:凹線2	ナデ	鈍い赤褐 5YR5/4	鈍い赤褐 5YR5/4	やや粗	1～2mmの石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	無	無	
167	B区	SD4	須恵器	杯身	10.6	5.0	-	ケズリ，ナデ	ナデ	灰N6/0	灰N6/0	密	1～2mmの石英，長石を含む	良	無	無	
168	B区	SD4	土師器	甕	18.6	(4.8)	-	ナデ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
169	B区	SD4	土師器	甕	18.4	(5.4)	-	磨滅	ナデ，磨滅	浅黄橙 7.5YR8/3	淡橙 5YR8/4	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	
170	B区	SD4	土師器	高杯 杯部	12.9	(5.4)	-	回転ナデ	回転ナデ	鈍い橙 5YR6/4	鈍い橙 7.5YR7/3	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	
171	B区	SD4	土師器	高坏？ 杯？	14.4	(5.0)	-	磨滅	磨滅	浅黄橙 7.5YR8/3	鈍い黄橙 10YR6/4	密	1mm以下の石英，赤色粒を含む	不良	無	無	
172	B区	SD4	土師器	高杯 脚部	-	(5.3)	9.5	粘土接合痕，ナデ	粘土接合痕，ナデ	鈍い黄橙 10YR7/3	鈍い黄橙 10YR7/2	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	
173	B区	SD4	土師器	高杯 杯部	-	(2.4)	-	磨滅	粘土接合痕	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/1	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	
174	B区	SD4	土師器	高杯	13.0	11.0	9.4	ナデ，磨滅	磨滅，脚部：粘土接合痕	鈍い黄橙 10YR7/2	鈍い黄橙 10YR7/2	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	
175	B区	SD4	土師器	高杯	14.0	-	10.6	磨滅	磨滅，脚部：粘土接合痕	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	
176	B区	SD4	土師器	直口壺	9.4	14.1	-	ナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR7/6	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	
177	C区	SD7 +足跡	弥生土器	不明 口縁部	15.8	(1.9)	-	磨滅	磨滅	灰黄褐 10YR6/2	褐灰 10YR4/1	粗	1～2mmの石英，長石を含む	良	無	無	角閃石を含まない
178	C区	SD6	弥生土器	甕？	-	(4.8)	-	ハケ後タタキ	ナデ	鈍い黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR4/1	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	有	無	
179	C区	SR1 上層	須恵器	杯身	13.8	3.2	10.0	回転ナデ 底部切り離し：ヘラオコシ	回転ナデ	鈍い黄橙 10YR7/2	鈍い黄橙 10YR7/2	やや密	1mm以下の石英，長石を含む	良好	無	無	内外面に火襷痕
180	C区	SR1 上層	弥生土器	甕	11.6	(2.7)	-	ハケ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英，長石，雲母，角閃石を含む	良好	無	無	
181	C区	SR1 上層	弥生土器	底部	-	(2.1)	4.7	磨滅	磨滅	鈍い赤褐 5YR5/3	鈍い橙 2.5YR6/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
182	C区	SR1 上層	弥生土器	高杯 杯部	20.0	(4.6)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	やや密	1mm以下の石英，長石，雲母を含む	良好	無	無	角閃石を含まない
183	C区	SR1 上層	弥生土器	高杯 杯部	-	(1.3)	-	粘土接合痕	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
184	C区	SR1 上層	弥生土器	高杯 脚部	-	(2.0)	13.6	凹線1，ナデ	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	褐灰 10YR4/1	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
185	C区	SR1 上層	弥生土器	高杯 脚部	-	(3.1)	15.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/4	灰褐 7.5YR4/2	粗	2mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
186	C区	SR1 上層	土師器	甕	16.0	(15.5)	-	ハケ	指押え，ヘラケズリ	鈍い橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR6/2	やや密	1mm以下の石英，長石，金雲母を含む	良	無	有	角閃石を含まない
187	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	22.0	(5.9)	-	口縁部：ナデ 頸部：縦方向のハケ	口縁部：ナデ 頸部：指押え	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	2mm以下の石英，長石，角閃石，金雲母を含む	良	無	無	爪の痕有り
188	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	16.4	(3.9)	-	口縁部：ナデ 頸部：ハケ	口縁部：ナデ 頸部：指押え	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い橙 5YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
189	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	13.8	(2.6)	-	口縁端部：凹線1 口縁部：ヨコナデ 頸部：ハケ	口縁部：ヨコナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	角閃石を含まない
190	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	16.0	(1.1)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR6/2	やや密	1mm程度の石英，長石を含む	良	無	無	角閃石を含まない
191	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	14.6	(2.1)	-	口縁端部：凹線2，ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	密	1mm以下の石英，長石を含む	良好	無	無	角閃石を含まない
192	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	21.0	(2.3)	-	凹線3，磨滅	ヨコナデ	鈍い黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	やや密	2mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
193	C区	SR1 下層	弥生土器	広口壺	20.4	(4.0)	-	口縁端部：凹線2，磨滅	磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR5/2	やや粗	2mm以下の石英，長石，赤色粒を含む	良	無	無	赤色顔料？付着
194	C区	SR1 下層	弥生土器	長頸壺	-	(6.5)	-	細かいハケ	ヘラケズリ，ナデ，絞り目	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/3	やや密	1mm以下の石英，長石，金雲母を含む	良好	有	無	角閃石を含まない

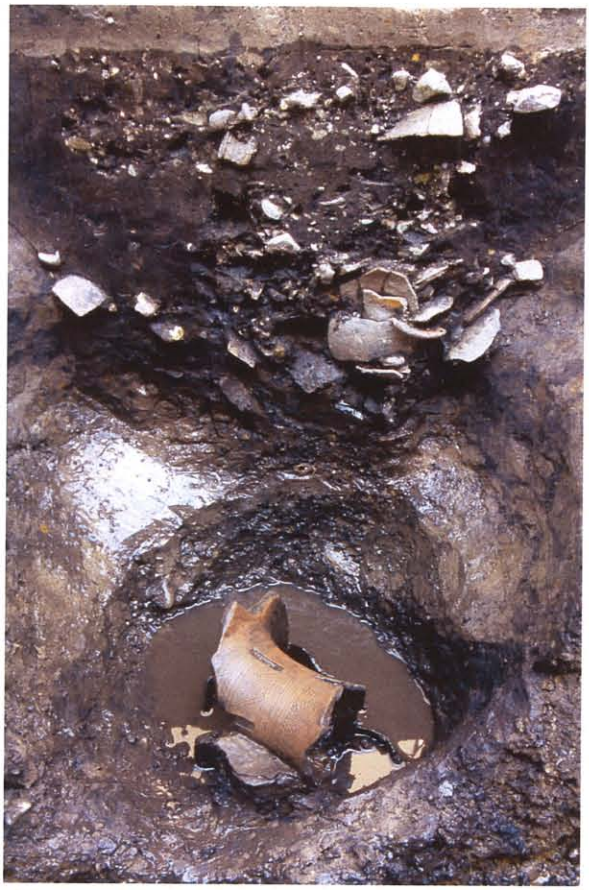
報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
195	C区	SR1 下層	弥生 土器	長頸壺	－	(14.1)	－	ハケ	頸部上端:ヨコナデ, 頸～体部上端:指押え後ナデ, 体部:ヘラケズリ	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
196	C区	SR1 下層	弥生 土器	長頸壺	－	(6.8)	－	沈線, 縦方向のハケ	ナデ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	密	1mm以下の石英, 長石, 金雲母を含む	良	無	無	角閃石を含まない
197	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	12.0	(6.6)	－	口縁端部:凹線1 頸～体部:ハケ	ナデ 頸部:ハケ	鈍い黄橙 10YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/3	やや密	石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
198	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	－	(2.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	密	1mm以下の石英, 長石を含む	良好	無	無	角閃石を含まない
199	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	－	(1.9)	－	口縁端部:凹線2	ナデ	褐 7.5YR4/3	鈍い黄褐 10YR5/3	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
200	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	16.0	(2.0)	－	ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 赤色粒を含む	良	無	無	角閃石を含まない
201	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	12.8	(3.0)	－	口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のハケ	口縁部:ヨコナデ 体部:指押え	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR5/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 金雲母を含む	良	無	有	
202	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	13.0	(3.7)	－	口縁端部:凹線1, 口縁部:ヨコナデ, 体部:ハケ	口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	灰褐 7.5YR6/2	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 雲母を含む	良	無	無	
203	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	15.6	(3.0)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/4	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
204	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	19.6	(8.3)	－	口縁端部:凹線1, 口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ	頸部:指押え 体部:指ナデ, 板ナデ	鈍い黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
205	C区	SR1 下層	弥生 土器	甕	16.8	(11.7)	－	ハケ	体部上半:指押え 体部下半:ヘラケズリ	鈍い黄橙 10YR7/3	鈍い黄橙 10YR7/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	角閃石の含有量少ない
206	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(3.5)	3.7	磨滅	ハケ, 工具痕	褐 7.5YR4/3	鈍い褐 7.5YR5/4	やや密	2mm以下の石英, 長石, 金雲母を含む	良	無	無	角閃石を含まない
207	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(3.3)	5.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い黄褐 10YR4/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	角閃石の含有量少ない
208	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(4.6)	4.6	磨滅	ヘラケズリ	鈍い赤褐 2.5YR5/4	褐灰 10YR4/1	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	有	
209	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(5.1)	5.4	ヘラミガキ	ヘラケズリ	黒2.5Y2/1	灰褐 7.5YR6/2	やや粗	1～3mmの石英, 長石, 角閃石, 赤色粒を含む	良	無	有	
210	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(2.3)	3.0	磨滅	ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	灰白 7.5YR8/2	やや粗	1mm以下の石英, 長石を含む	良	無	有	角閃石を含まない
211	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(2.4)	6.0	磨滅	板ナデ	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	
212	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(3.3)	7.8	ヘラミガキ	不明	オリーブ黒 5Y3/1	鈍い黄橙 10YR6/4	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	有	
213	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(5.3)	6.0	ナデ	指押え	鈍い黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR6/2	粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	有	無	
214	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(4.4)	6.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ	黒2.5Y2/1	灰黄 2.5Y7/2	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 雲母を含む	良	無	無	角閃石を含まない
215	C区	SR1 下層	弥生 土器	底部	－	(5.4)	6.6	ヘラミガキ	ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	有	
216	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 杯部	23.0	(3.6)	－	ナデ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 金雲母, 角閃石を含む	良	無	無	角閃石の含有量少ない
217	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 杯部	22.8	(3.5)	－	口縁部:ヨコナデ 杯部:磨滅	口縁部:ヨコナデ 杯部:磨滅	灰黄褐 10YR6/2	鈍い黄橙 10YR6/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	無	無	
218	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 杯部	30.2	(6.4)	－	口縁部:ヨコナデ 杯部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 杯部:ハケ	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	1mm以下の石英, 長石, 金雲母を含む	良好	無	無	角閃石を含まない
219	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 杯部	33.0	(6.8)	－	口縁部:ヨコナデ 杯部:ヘラミガキ, ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ 杯部:ヘラミガキ	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR6/3	やや粗	1mm以下の石英, 長石, 角閃石, 金雲母を含む	良	無	無	赤色顔料？付着
220	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 杯部	－	(3.0)	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	鈍い黄橙 10YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	やや粗	2mm以下の石英, 長石, 角閃石を含む	良	無	無	粘土貼付け痕有り

報文番号	調査区名	遺構名	種類	器種	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土		焼成	黒班	煤・こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	粗密	含有物等				
221	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 脚部	－	(8.3)	－	粘土接合痕，ナデ，ハケ後指押え	ナデ，絞り目？	灰褐 7.5YR6/2	鈍い褐 7.5YR6/3	やや粗	1～2mmの石英，長石，雲母，角閃石を含む	良	無	無	
222	C区	SR1 下層	弥生 土器	高杯 脚部	－	(3.3)	23.6	ナデ 裾端部：凹線4	ヘラケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，金雲母を含む	良	無	無	
223	C区	SR1 層位不	須恵器	椀？	12.2	(1.5)	－	ナデ	ナデ	暗灰N3/0	灰N5/0	密	1mm以下の石英，長石を含む	良好	無	無	
224	C区	SR1 層位不	弥生 土器	甕	15.0	(0.8)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや密	1mm以下の石英，長石，金雲母を含む	良	無	有	角閃石を含まない
225	C区	SR1 層位不	弥生 土器	甕	14.4	(4.9)	－	ナデ，磨滅	ナデ，磨滅	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	有	無	
226	C区	SR1 層位不	弥生 土器	底部	－	(3.2)	3.6	ヘラケズリ	磨滅	褐灰 10YR4/1	暗灰N3/0	粗	1mm以下の石英，長石を含む	良	有	無	内面に付着物有り
227	C区	SR1 層位不	土師器	高杯 坏部	17.0	(3.0)	－	磨滅	磨滅	鈍い橙 7.5YR7/4	鈍い橙 7.5YR7/4	密	1mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	
228	C区	SR1 層位不	弥生 土器	高杯 坏部	24.8	(2.9)	－	ナデ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや粗	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
229	C区	SR1 層位不	弥生 土器	不明 口縁部	21.0	(1.4)	－	ナデ	ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
230	C区	SR1 層位不	弥生 土器	高杯 脚部	－	(3.8)	18.0	磨滅	ヘラケズリ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	やや密	1～2mmの石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
231	C区	SR1 層位不	弥生 土器	高杯 脚部	－	(2.8)	(5.8)	ナデ，穿孔1	ヘラケズリ，ナデ	明赤褐 5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	やや粗	1～2mmの石英，長石，角閃石，雲母を含む	良	無	無	
232	C区	SR1 層位不	弥生 土器	体部	－	(9.6)	－	タタキ	ナデ	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	密	1mm以下の石英，長石，雲母を含む	良	無	有	角閃石を含まない
233	C区	SR1 層位不	弥生 土器	高杯 杯部	－	(3.4)	－	ヨコナデ	ヨコナデ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い橙 7.5YR6/4	やや密	1mm以下の石英，長石，金雲母，角閃石を含む	良好	無	無	
234	C区	SR1 層位不	弥生 土器	大型鉢	－	(3.7)	－	口縁端部：凹線2， ナデ	ナデ	鈍い褐 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR6/3	やや粗	1～2mmの石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良	有	無	
235	C区	SR1 層位不	弥生 土器	不明 口縁部	－	(2.3)	－	磨滅	磨滅	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い橙 7.5YR6/4	粗	4mm以下の石英，長石を含む	良	無	無	
236	C区	SR1 層位不	弥生 土器	不明 口縁部	－	(2.9)	－	磨滅	磨滅	鈍い黄橙 10YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
237	C区	SR1 層位不	弥生 土器	鉢	－	(6.2)	－	磨滅	ヨコナデ，横方向のハケ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石を含む	良	無	無	
238	C区	SR1 層位不明	弥生 土器	広口壺	21.0	(22.0)	－	口縁部：ヨコナデ 頸～体部上半：縦方向のハケ	口縁部：ヨコナデ，頸部：絞り目，ナデ，ハケ，体部上半：ナデ，指押え，体部下半：ヘラケズリ	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR6/3	やや密	1mm以下の石英，長石，角閃石，赤色粒を含む	良好	無	無	
239	A区	SE2	弥生 土器	体部	－	(9.5)	－	ハケ	ヘラケズリ	灰褐 7.5YR4/2	褐灰 10YR4/1	密	1mm以下の長石，雲母，角閃石を含む	良	有	有	内面に赤色顔料付着
240	A区	SE2	弥生 土器	体部	－	(8.4)	－	ヘラミガキ	ヘラケズリ後ナデ	鈍い黄褐 10YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/3	密	1mm以下の長石，雲母，角閃石，赤褐色粒を含む	良	無	有	内面に赤色顔料付着
241	A区	SE2	弥生 土器	体部	－	(6.8)	－	ハケ後ヘラミガキ	ヘラケズリ	褐 7.5YR4/3	褐灰 10YR4/1	密	2mm以下の長石，雲母，角閃石，赤褐色粒を含む	良	有	有	内面に赤色顔料付着
242	A区	SE2	弥生 土器	体部	－	(9.4)	－	ハケ	ケズリ，磨滅	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR4/2	密	2mm以下の長石，雲母，角閃石，金雲母を含む	良好	無	有	内面に赤色顔料付着
243	A区	SE2	弥生 土器	体部	－	(5.7)	－	ハケ，板ナデ？	ヘラケズリ，ナデ	灰黄褐 10YR4/2	鈍い黄褐 10YR5/4	密	2mm以下の長石，雲母，角閃石，金雲母を含む	良	無	有	内面に赤色顔料付着
244	A区	SE2	弥生 土器	体部	－	(7.1)	－	ヨコナデ，ハケ	磨滅，ヘラミガキ？	褐 7.5YR4/4	鈍い褐 7.5YR5/4	密	2mm以下の長石，雲母，角閃石，赤褐色粒を含む	良好	無	無	内面に赤色顔料付着
S1	A区	SE2	石器	石庖丁	長さ：15.5cm，幅：5.0cm，厚さ：1.2cm，重さ：100.3g，石材：サヌカイト												背部に自然面が残る

A調査区 SE 2出土土器集合

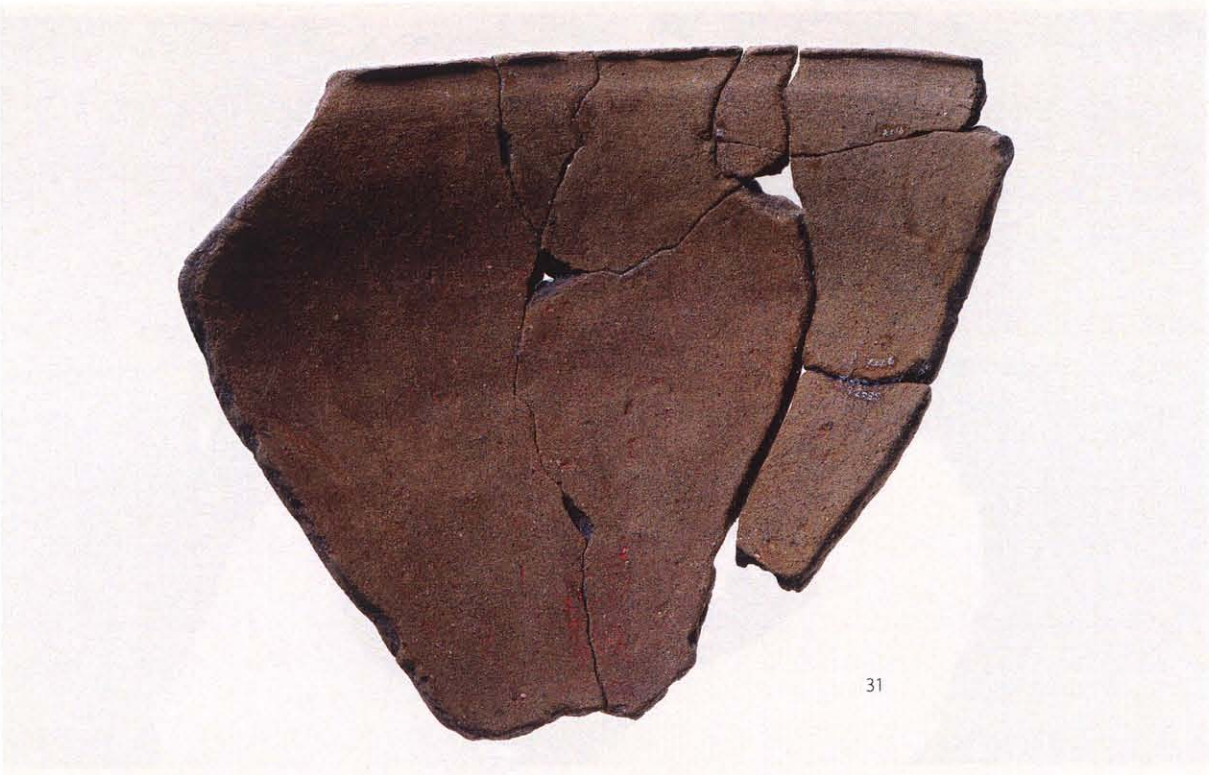
1．A 調査区 SE ２土器出土状況（第２検出面）

2．A 調査区 SE ２土器出土状況（第３検出面）

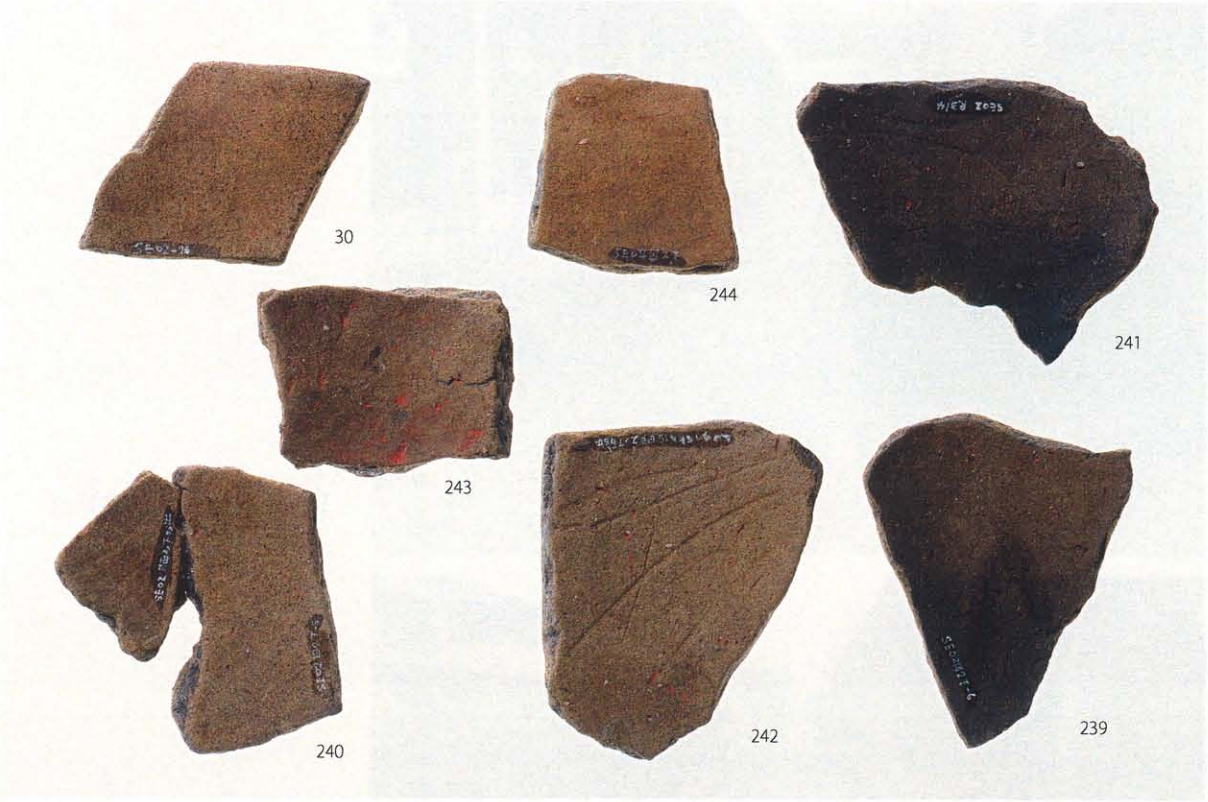


A調査区SE 2器台・壺出土状況（第4検出面）

1．A 調査区 SE 2 出土水銀朱付着把手付広片口皿



2．A 調査区 SE 2 出土水銀朱付着鉢



1．A 調査区 SE ２出土赤色顔料付着土器

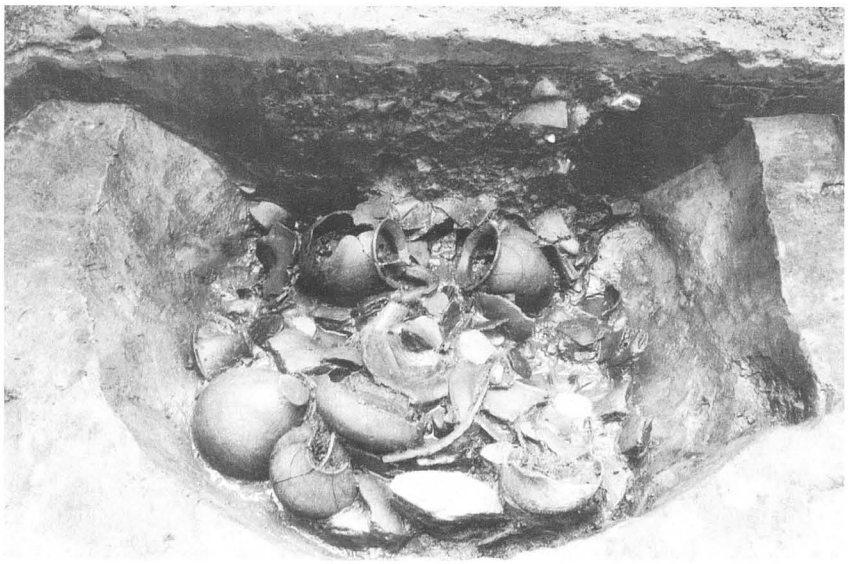
2．A 調査区 SE ２出土赤色顔料付着底部

1．A 調査区調査前状況
（北から）

2．A 調査区北部遺構
検出状況（南から）

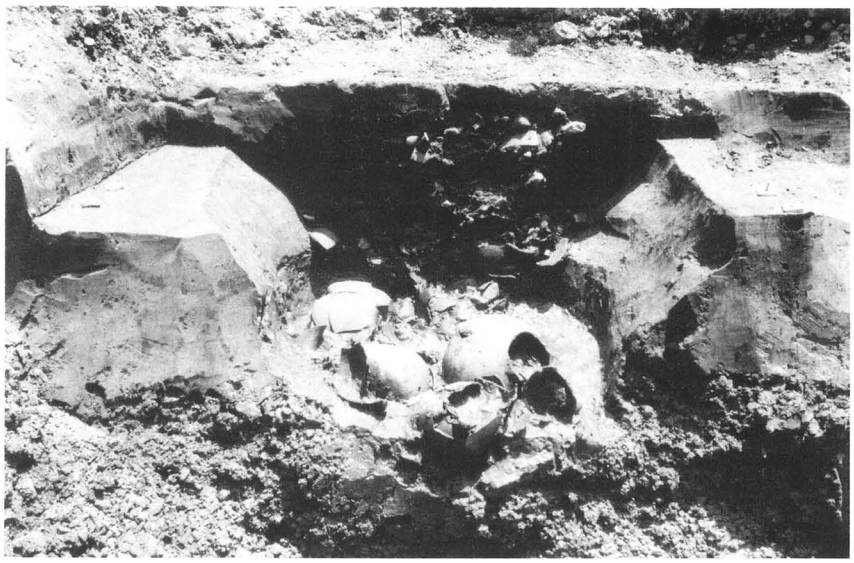
3．A 調査区中央部遺
構検出状況（南から）

1．A 調査区 SE 2
遺物出土状況①

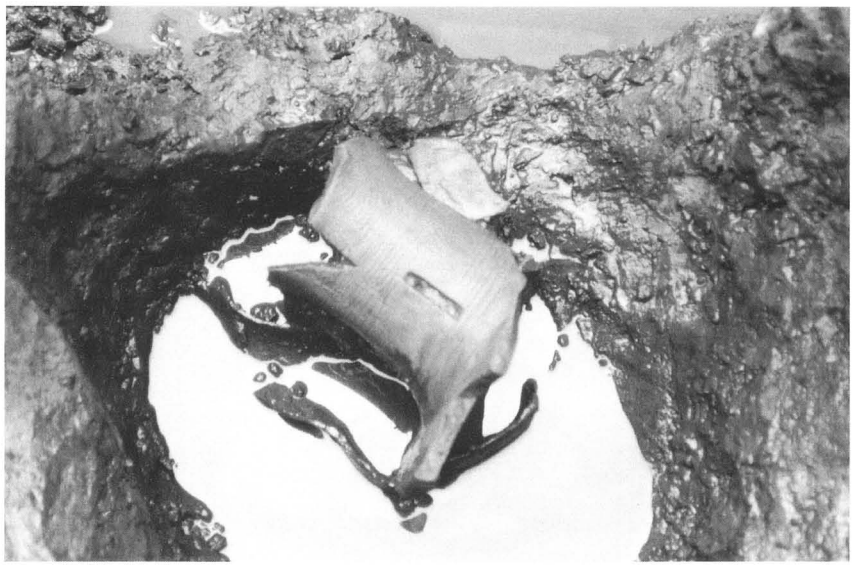


2．A 調査区 SE 2
遺物出土状況②

3．A 調査区 SE 2
遺物出土状況③



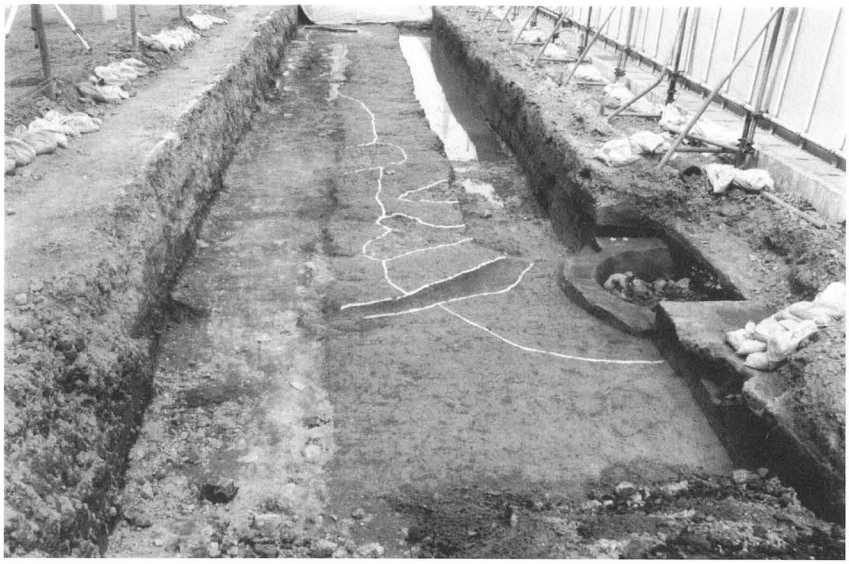
1．A 調査区 SE 2
遺物出土状況④



2．A 調査区 SE 2
遺物出土状況⑤

3．A 調査区 SE 2 断面
（西から）

1．A 調査区中央遺構（南から）

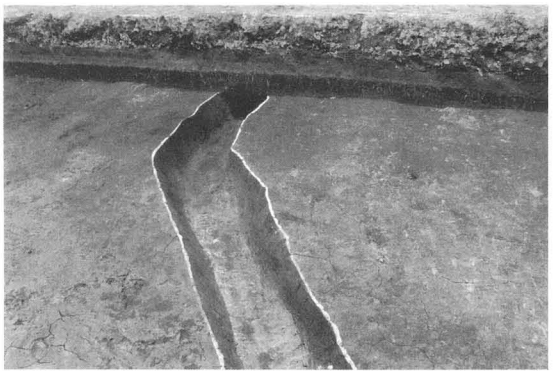


2．A 調査区
噴礫・SR 1 検出状況　（南から）

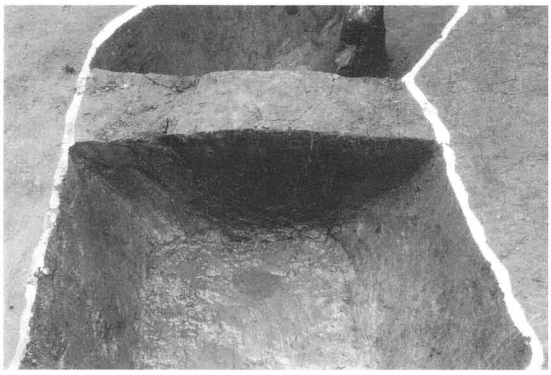
3．A 調査区噴礫断面

1．A 調査区 SD 1（西から）

2．A 調査区 SD 3（北から）

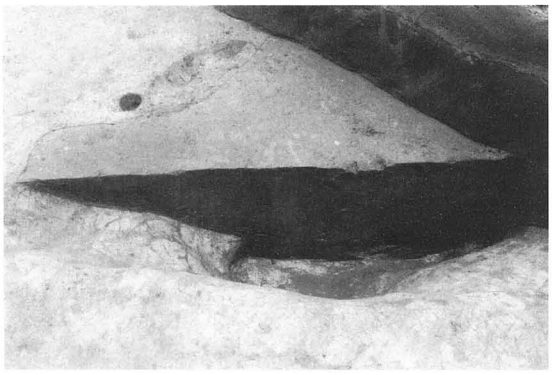


3．A 調査区 SD 3（東から）

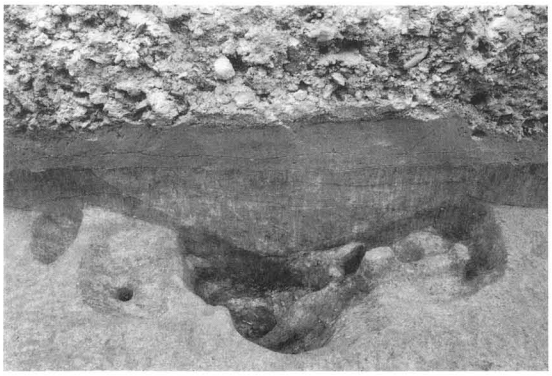


4．A 調査区 SD 3 断面

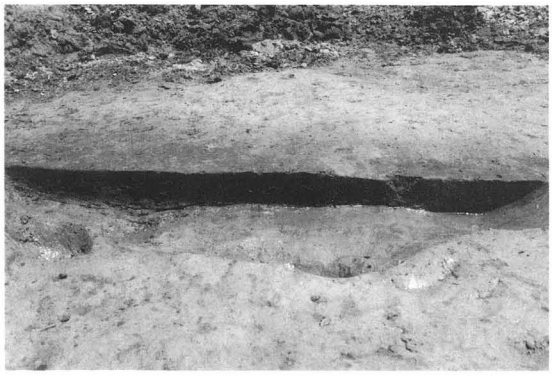
5．A 調査区 SE 1（西から）



6．A 調査区 SE 1 断面



7．A 調査区 SK 5・6（東から）

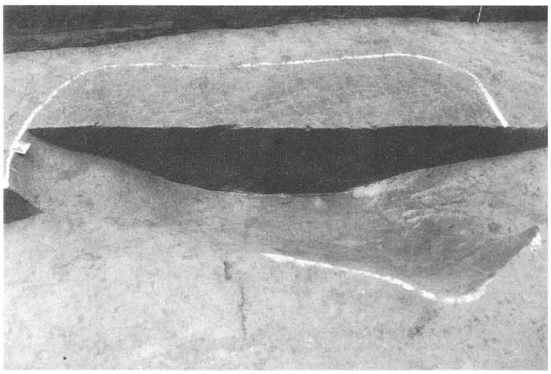


8．A 調査区 SK 9 断面

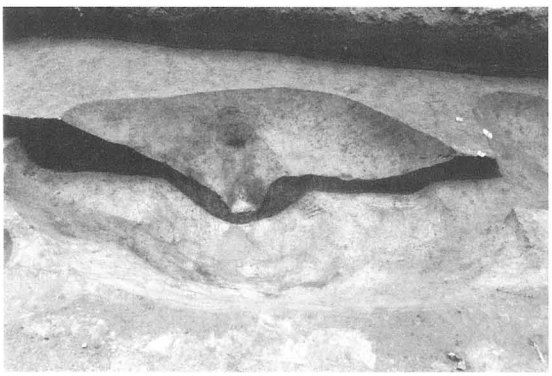
1．A 調査区南部遺構（南から）

2．A 調査区南部下層確認状況（南から）

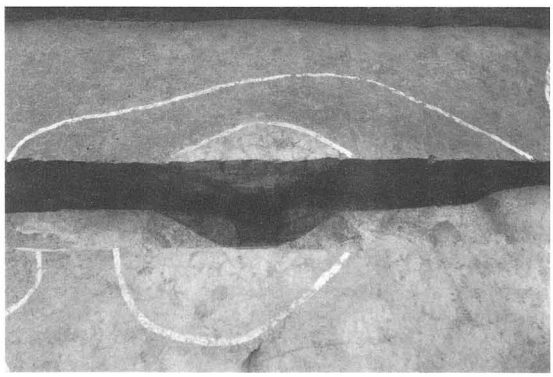
3．A 調査区 SK10・11（南から）



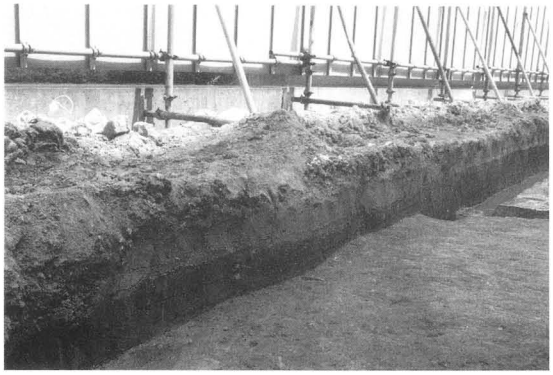
4．A 調査区 SK11 断面



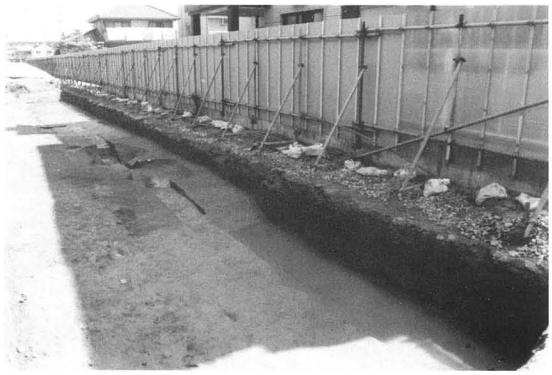
5．A 調査区 SK10（西から）



6．A 調査区 SK10 断面

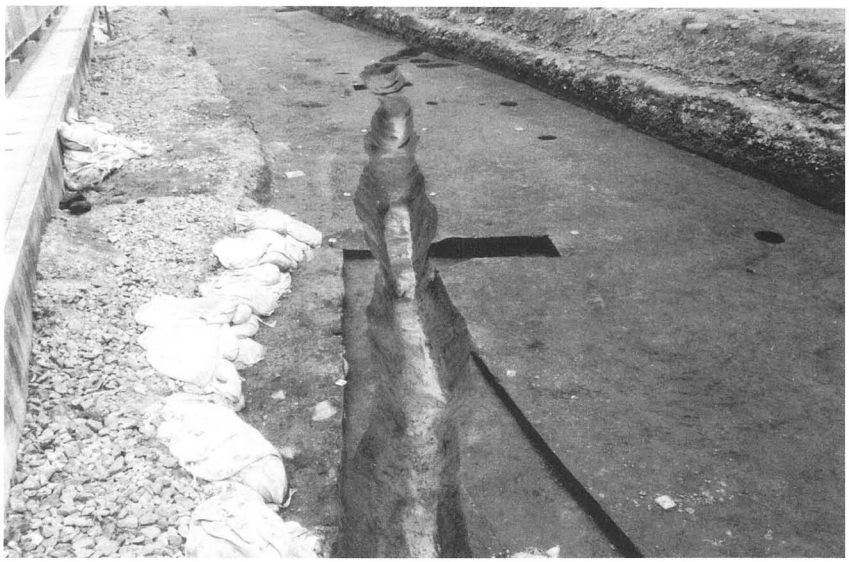


7．A 調査区中央東壁土層（北から）



8．A 調査区南端部東壁土層（南から）

1．B 調査区調査前
状況（南から）



2．B 調査区北部遺構
（北から）

3．B 調査区 SD 4
（北から）

1．B 調査区 SD 4 遺物出土状況①

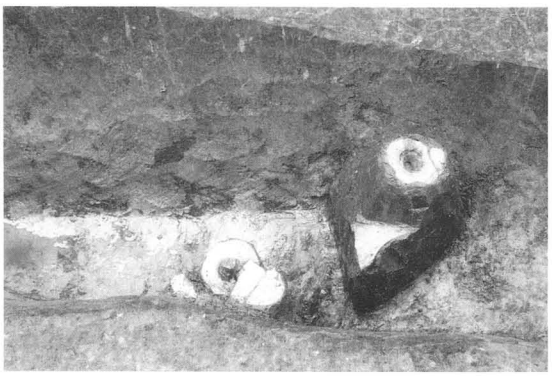
2．B 調査区 SD 4 遺物出土状況②

3．B 調査区 SD 4 遺物出土状況③

4．B 調査区 SD 4 遺物出土状況④

5．B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑤

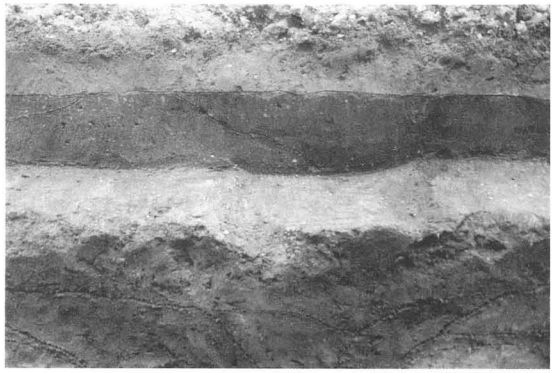
6．B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑥



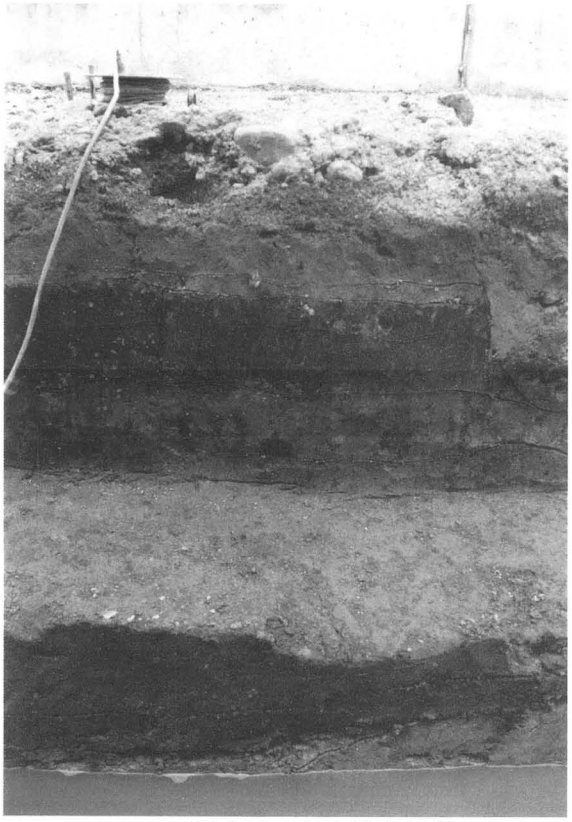
7．B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑦

8．B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑧

1．B 調査区 SD 4 断面



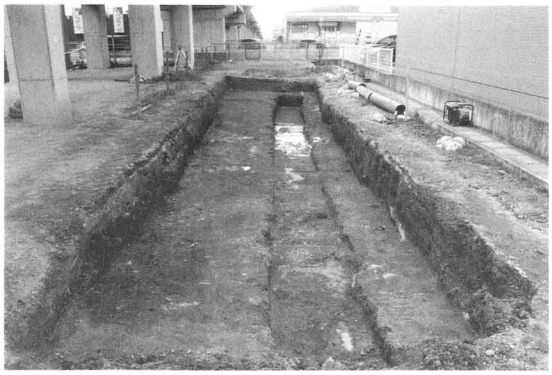
2．B 調査区南部東壁土層①



3．B 調査区南部東壁土層②

4．B 調査区南部遺構（北から）

1．C調査区北部遺構検出状況（南から）



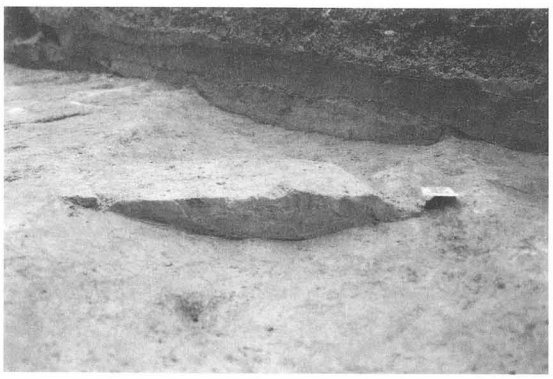
2．C調査区北部断割調査状況（南から）

3．C調査区中央遺構検出状況（南から）

4．C調査区中央遺構（南から）

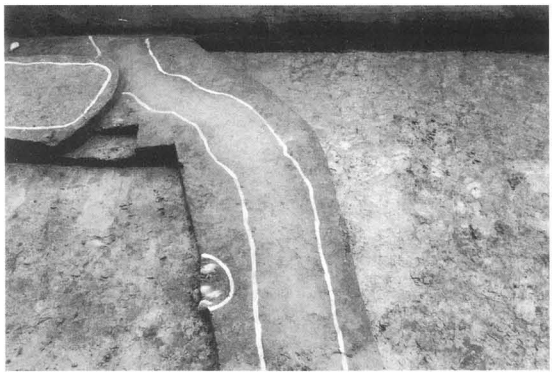
5．C調査区下層確認状況（南から）

6．C調査区SD 2断面



7．C調査区SD 1断面

8．C調査区中央東壁土層



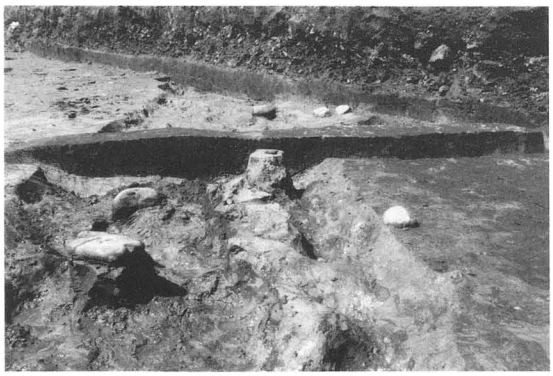
1．C調査区SD 6検出状況（西から）

2．C調査区SD 6・SK 3（西から）

3．C調査区SD 7・足跡検出状況（南西から）

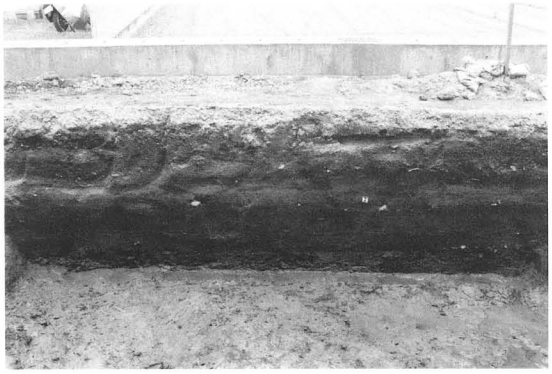
4．C調査区SD 7・足跡（南西から）

5．C調査区SD 7・足跡（北東から）



6．C調査区SD 7・足跡断面

7．C調査区SR 1（北から）



8．C調査区SR 1（東壁）断面

142

141

121

49

66

65

A 調査区 SE 2 出土土器①

47

61

64

50

52

51

A 調査区 SE 2 出土土器②

153

71

93

90

91

83

A 調査区 SE 2出土土器③

82

92

145

48

132

62

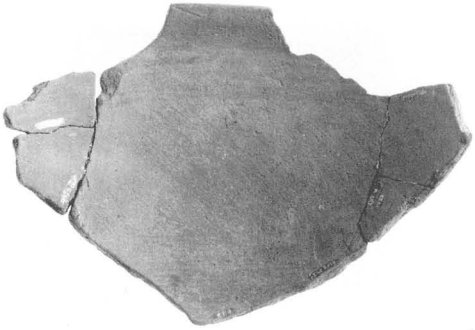
A 調査区 SE 2 出土土器④

5

156

154

81



155

155

S1

A 調査区 SE 2 出土土器⑤・石器

176

175

170

174

167

172

179

B 調査区 SD4・C 調査区 SR 1 出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおたしも・すがわいせき
書　　名	太田下・須川遺跡
副 書 名	国道11号高松東道路関連整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第124集
編著者名	小川 賢，高上 拓，魚島純一，山中稔，株式会社パリノ・サーヴェイ
編集機関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760－8571 香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたしも・すがわいせき 太田下・須川遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 おおたしもまち 太田下町	37201		34° 18′ 29″	134° 03′ 03″	2008．5．1．～2008．6．17．	1080㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおたしも・すがわいせき 太田下・須川遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	溝 井戸 自然河道 溝 自然河道	弥生土器 石庖丁 須恵器・土師器	井戸より弥生時代後期前葉の良好な一括資料。井戸祭祀か 古墳時代中期の須恵器と土師器

要　　約	高松平野中央部に位置する弥生時代後期から古墳時代中期を中心とした集落域の調査。土坑や井戸，溝などを検出し，集落の南北方向の広がりを推定する資料を得た。A 調査区の井戸からは弥生時代後期前葉の良好な一括資料。内面に水銀朱の付着した土器を多く含む。出土状況などから井戸に関する祭祀の可能性が高い。B 調査区からは高松平野では珍しい古墳時代中期の須恵器・土師器が出土した。

高松市埋蔵文化財調査報告第 124 集

国道 11 号高松東道路関連整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

太田下・須川遺跡

平成 21 年3月 31 日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番 15 号
発　行　高松市教育委員会
印　刷　有限会社 中央ファイリング